
I S 大戦 ～少女少女よ、大志を抱け～

山上真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS大戦 ～少年少女よ、大志を抱け～

【Nコード】

N4466Y

【作者名】

山上真

【あらすじ】

ISという兵器の登場によって女尊男卑の世となった昨今。

そんなある日、あるニュースが世界を騒がせる。――曰く『ISを起動できる男性が現れた』……とのこと。

それを契機に、政府直属の秘密部隊『帝国華撃団・花組』隊長の大神総一は、件の男、織斑一夏の護衛任務を言い渡される。

幼馴染みとの再会、新たな友人……概ね『平和』と言える日常を過ごす総一と一夏。

しかしその影で、複数の組織が動きを見せていた。

華撃団との因縁浅からぬ『森羅』と『騎士団』。

ISの強奪を繰り返す『亡国機業』。

そんな『亡国機業』に接触を図る『極めて近く、限りなく遠い世界からの来訪者』。

日常の崩壊は、ゆっくりと、しかし確実に迫っていた。

サクラ大戦シリーズとIS、及びスーパーロボット大戦シリーズのクロスです。

主人公はオリ主と一夏。

時代的にサクラ大戦側はオリキャラで固められています。……が、基本的に子孫です。

キャラ改変、独自解釈、捏造設定があります。

個人的にはシリアス路線だと思ってます。

原作を読み返しつつ、ある程度書きためてからの投稿になるので不定期更新となります。

感想お待ちしております。

構想が膨らみ、スパロボまで入れてしまいました。

また、それに伴い12／11に再度タイトルを変更しました。

プロローグ（前書き）

リハビリがてら書いてみました。
楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ

「おおおおおーっ！」

「はああああーっ！」

響き渡るは少年少女二人の咆哮。僅かに遅れ、甲高い音が断続的に鳴り響く。……見れば、二人の手にはそれぞれ刀が握られている。模擬刀かと思えば然にあらず。紛う事なき真剣である。

ISというものが世に広く浸透している昨今を考慮しても、それはおかしい光景だった。

二人の年頃はどう鼻肩目に見ても十代半ば。それでいながら、二人は己の手足の如く刀を扱っている。一心同体と言っても過言ではなかった。

であればこそ、尚のこと腑に落ちない。

スポーツとして広まっているISがその実兵器であることを鑑みれば、少女に関しては無理矢理だが説明付けることが可能だ。『長らくISと共にあり、刀を武器としている』……と。

しかし、少年に関してはそうもいかない。……何故ならば、ISは女性にしか動かせないのだ。それが絶対とは言えないが、常識として扱われているほどに可能性が低いのもまた事実。

では、この光景が示しているのは一体何なのか？

「いや、久々にいい訓練になった。礼を言うよ、桜華^{おうか}」

「フフ……それはこちらのセリフだよ、大神総一隊長^{おおがみそういち}？」

二人の会話の中に、その答えの片鱗があった。

どうやら二人は軍人か何からしい。ISが兵器としての地位を占める昨今では非常に珍しいことではあるが、だとするならば両者の技量にもいくらか納得がいく。——それでも、その年齢に対する疑

問は尽きないが。

「……嫌みを言うのは止めて欲しいな、真宮寺^{しんぐうじ}の姫君？」

「それは失礼。だがこれ位は許してもらいたいな？ 任務に守秘義務があるのは理解しているが、私たちの間ではそれも幾らか緩和される。隊長が長期に渡って隊を離れるというのに、副隊長の私は司令から伝えられるまでその事実を一切知らなかったのだからな？」

ジト目で言ってくる桜華に対し、総一は謝るほかになかった。

世界各国が秘密裏に連携して行っている、霊的なモノに対する都市防衛機構『華撃団』。……諜報、輸送、戦闘など様々な隊から成っており、総一は日本における戦闘部隊の隊長である。

霊的なモノに対処する以上、戦闘部隊員は強い霊力を保有していることが最低条件なのであるが、同時にそこが問題点でもあった。

世界は広く、霊力の保有者は山ほど存在している。——しかし、戦闘時におけるパワードスーツ『靈子甲冑^{りょうしかっちゅう}』を起動できるほどに強い霊力保有者となるとそうはいかない。

突然変異を除けば、ある程度血統を頼ることは出来る。事実、総一も桜華もそのクチだ。特に桜華の生まれである真宮寺家は『破邪の血統』と謳われるほどで、代々強力な霊力保有者が現れている。

それでも限度というものがあり、戦闘部隊は常々人員不足に悩まされている。

強い霊力保有者は基本的に若い女性に多く、総一のように男性でありながら強い霊力を保有しているのは非常に稀だ。……歴代隊員の血統でも、男であれば霊力を持っていない、というのはザラである。

今回、総一が隊を離れていたのもそんな人員不足によるものであり、いくら慌ただしかったとはいえ、それを桜華に伝え忘れたのは明らかに総一のミスなのである。……親しすぎるが故の弊害であった。

その血統故に幼い頃から交流を持ち、互いに切磋琢磨しあつて来た二人は、大概のことを言葉にせずとも察することが出来る。

それに違わず、桜華も総一が隊を離れている事実及びその理由を察してはいた。これが私事であれば然程問題もないのであろうが、生憎と公務である。

察しは出来てもそれが正しいとは限らない以上、事実確認は必要なのだ。

今回は桜華が誤魔化したために事なきで済んでいるが、これが発覚した場合は面倒事が舞い込むだろう。司令から『頼み事』という名を借りた実質的な処罰が下される。

総一個人で済めばいいが、そんな美味い話はないだろう。何かしら周りを巻き込むハメになる。

「……本当にすまん」

それを理解しているからこそ、総一は謝るしかないのだった。



「……疲れた」

桜華と別れてから数時間後、総一は肩で息をしていた。

戦闘部隊隊長とはいえ戦闘ばかりしているわけではなく、寧ろそれ以外の仕事の方が圧倒的に多い。

まずは離れていた期間に溜まった書類仕事。それが終わったら歌唱訓練である。

古来より、歌と踊りには魂を鎮める効果があるとされている。

故に、華撃団に所属する者たちは表向きの顔として芸能プロダクションを運営している。……日本の場合は『浪漫の嵐』という名称で、総一や桜華もその例に漏れず、歌って踊れる男女混合ユニット

『BLOSSOM』のメンバーとして所属していた。

しかし、総一は個人的に歌唱を苦手としていた。周囲の評価は低くないのだが、総一自身は身体を動かしている方が好きなのだ。振り付けをしつつ……となれば話は別なのだが、ただ歌うだけとなると一気に疲労が押し寄せる。

それでも事の重要性を理解しているので、基本的に真面目な総一は文句を言うことがあまりない。……以前に文句を言ったのは、する必要のない女装を強要されたときぐらいである。

「いよう！ お疲れだなあ〜大神い〜」

不意に背後から如何にも脳天気な声が掛けられた。振り向くまでもなく、総一は声の主が誰なのか分かった。

かやま ゆうすけ
加山雄輔。総一の幼馴染み兼親友兼悪友であり、諜報部隊の隊長であり、『BLOSSOM』のメンバーでもある。

如何に疲れていても、誰かが近付けば流石に分かる。それでも声を掛けられるまで総一が気付かなかったのは、それだけ加山の隠形が見事であることを証明していた。

「ああ、疲れた。だから、悪いが今はお前の軽口に付き合ってやれんぞ？」

「ふむ、それは残念——」

おちゃらけた様子でそう言ったかと思うと、次の瞬間には相変わった真面目な声で加山は言った。

「——大神。つい先刻、IS学園の試験会場で何かが起こったらしい。これから調べに言ってくるが……俺の予想が正しければ事態は一気に動く」

まだ何が起こったのかは分からないらしいが、こういった場合の加山の直感によく当たる。

それ則ち、『面倒事の到来』である。

予め覚悟を決めておけば、いざこの身に降りかかった場合でも割と冷静に対処することが可能になる。

「……そうか。情報、感謝する」

「いいってことよ。それじゃ大神、アディオス！」

再度脳天気な声を発し、次の瞬間、加山は音もなくその場から姿を消した。



「……申し訳ありません。もう一度お願いできますか？」

加山より忠告を受けた、その数日後。

帝国華撃団司令室において、部屋の主たる司令よりある任務を告げられた総一は、そう問い返した。

内容を理解できなかったわけではない。寧ろこれ以上ないほどに理解できた。——しかし、だからこそ問い返さずにはいられなかった。

任務内容を簡単に言えば『IS学園に入学し、織斑一夏を護衛。

場合によっては華撃団ヘスカウトし、他にも有益な人材がいた場合、その者もスカウトせよ』……と、こうである。

これは問い返さずにはいられない。

護衛だけならば、まあ分らないでもない。平均的な同年代の者と比べれば、自分の方が遙かにデキると自認している。剣術も修めているし、靈的戦闘ではあるが実戦も経験している。極めつけに護衛対象と同性である。護衛のしやすさを考えれば、自分がその任に

就くのは妥当と言えるだろう。

分からないのは『IS学園に入学』の部分である。自分の歳を考えれば高校に通うのは問題ない。寧ろ普通である。——しかし、この部分だけは納得する事が出来ない。

織斑一夏という例外が現れたとは言え、ISは未だ女性のモノだ。……平たく言えば『IS学園』は女子校なのである。そこにどうやって自分が通えというのだ。

華撃団は任務内容が内容なだけに、通常の軍隊——日本の場合は自衛隊——と比べてもその権限は遙かに大きい。普通に考えれば分かることだが、霊的存在に対して通常の武力など役に立たないからである。

故にその権限を用いれば通えなくもないだろうが、実行できなければ意味がない。

権限を使用できるのは、あくまでも『霊的存在が認められた場合のみ』なのである。——緊急事態においては独自の判断で使用することも出来るが、そんな緊急事態など滅多なことでは起こらないし、使用後に提出する書類の量がバカにならない。

そんなわけで、IS学園が実は『霊的現象を起こすことを目的とした秘密結社』でした……などといった場合でない限り、その権限は使用できないのだ。

より詳しく言えば、華撃団は秘密部隊であるために表立った階級はないが、それでも総一は平常時から少尉相当の権限を保有している。これでも充分と言えるが、霊的存在が絡んできた場合、脅威の度合いによって左官や将官までその権限が跳ね上がるのだ。

ともかく。

その事実を踏まえれば、今回の任務は自分より桜華向きである。世間における『IS学園』の立ち位置を鑑みれば、少尉相当の権限で出来ることなどたかが知れているはずだ。

また、大神総一と真宮寺桜華を比較した場合、性別の違いこそあれ、その腕前と実戦経験に大差はないという事実もある。

そして分からない点がもう一つ。織斑一夏のスカウトだ。……これは絶対ではないようだが、そこに至った経緯が見えてこない。

「うん……君の疑問はもつともだ。通常ならば桜華君の方に命じていただろう」

総一の疑問を汲み取っているのだろう。答える司令の声は柔らかかった。……元より『司令』という立場にしては柔らかい言葉を使う人物ではあるが、冷徹になるべきときはどこまでも冷徹になれる人物でもある。

それを踏まえた上でこういった言葉で返してくることを鑑みれば、真宮寺桜華ではなく大神総一でなければならぬ理由があるということだ。

そしてそれは、『当たれば儲け』的なモノではあるが、当たったときの配当が巨大であるという事実も示している。

「IS存在が今の世を形成することになったのは否定しない。……が、それが必要悪だ。……何故か？ かの兵器によって多大な技術革新がもたらされたのも、また事実であるからだ。無論、巨大な光は相応の闇を生むし、その点では見逃すことは出来ない。だが、それは何もISに限ったことではない。今回はたまたま、ISによる『技術革新』という名の光だった、という話でしかない。まあ、如何に現行兵器を凌駕する威力を持つていようと結局は物理兵器である、という点も我等がISそれ自体をそこまで危険視していなかった一因だがね。……しかし、織斑一夏の存在がその認識を覆すこととなった」

総一は司令の言葉に同意する。少なくとも、華撃団員の認識は皆似たり寄ったりだった。

それをここに来て否定するに至った。そして、その原因となった

のが織斑一夏。先の命令と今回の言葉。そこから見えてくるモノは一体何だ？——総一は思考する。

認識を覆された、と言っている以上、ISは霊的脅威たりえるということだ。だが、真にそうであるならばもっと早くに発覚して然るべきである。しかし、織斑一夏が表立つまでそんな動きはなかった。

では、織斑一夏と他のIS起動者の違いは何だ？——織斑一夏は男性であり、他のIS操縦者は皆女性だ。

そして、男性なら誰でも良いわけではなく、織斑一夏でなければならぬ理由がある。また、女性も起動確率が高いだけであり、その全員が起動できるわけではない。

（おいおい、ちょっと待て……。これは、どこかで聞いたような話じゃないか……？）

思考を重ね、総一はある結論へと行き着いた。

そもそも、総一が今ここでこうして話を聞いているのも強い霊力を保有しているからであり、大神家の実績によって十五の若さで隊長という任に就いているからである。

そうでなければ、『今ここでこうして話を聞いている』という事実は起こり得なかった。

そして、大神家の実績を語る上でも総一が華撃団にいる理由を語る上でも外せないのが霊子甲冑である。

霊子甲冑とは『霊力ありき』で開発されたパワードスーツだ。

時代の流れと共に使われる技術や形状は変化していったが『起動に強い霊力を必要とする』という点は今になっても変わらない。

そして一方のISだ。

ISのコアはブラックボックスそのものであり、開発者である篠ノ之束が発表した事柄以外は一切が不明。

そして篠ノ之束自身、『ISの起動に何を必要とするのか分かっ

ていない』可能性が高い。……これは当初の発表から考える限り可能性は高いだろう。宇宙空間での活動、つまりは宇宙開発をするに当たって、女性しか動かせないのでは意味がない。

なのに発表したのは、篠ノ之束の認識では『男女とも動かせる』ことになっていたからではないだろうか。そして、ここで重要なのはあくまでも『篠ノ之束の認識である』という点だ。

篠ノ之束は自他共に認める天才だ。独力でISなどというものを開発した以上、総一もその点に関しては認めている。

その一方で『自分の興味のないことにはとことん無関心』という話もある。この無関心は人間関係にも当て嵌まるらしく、自身の妹である篠ノ之箒、件の織斑一夏、その姉である織斑千冬くらいしか親しい人間はいないとも聞いている。

この、自分を含めたごく狭い範囲の四者に共通する部分があったなら、篠ノ之束は『人類全てに共通する』と認識するのではないだろうか。そして、ISの起動にこの共通部分が必要としていたならばどうだろうか。

人類全てに共通するという認識ならば、わざわざその事について考える必要もなければ説明する必要もない。その結果として世間一般での認識が『ISを起動できるのは女性のみ』になったとすれば……。

「ISの起動には霊力が必要。……違いますか？」

自身の至った結論を、総一は司令へと確認した。……その声音は冷静そのものだが、表情まではそうはいかない。驚愕がありありと浮かべられていた。

「そう……君の驚き通りだよ。簡単にではあるが織斑一夏を調査した結果、彼が男性にしては珍しい霊力保有者であることが認められた。霊子甲冑の起動には至らぬものの、その霊力値は男性として充

分に高い。そしてそこから調べられる限りのIS操縦者を調査した結果、保有量の差こそあるものの、その全員が霊力保有者であるという結果が出た。……無論、以前にもIS操縦者を調査したことはあったし、霊力を保有しているという事実も判明してはいた。しかし、調査したのは五名にも満たず、対象が何れも女性であったために『賢人機関』はスルーしていたようだ。……華撃団の求める霊力値には遠く及ばないという事実もあったらしいけどね」

果たして、司令の答えは肯定であった。

それが真に事実ならば、この命令も納得がいく。

男の霊力保持者は貴重であるが、そこには確固とした理由が存在する。

そもそも、霊力それ自体は万能である、というのが通説だ。しかし、実際にそんなことはない。……何故ならば『発現形質』と『霊力性質』に左右されるためである。

炎、冷気、雷、或いは瞬間移動や治癒、テレポート身体強化などが発現形質に当たり、その分類は多岐に渡る。また、人によっては複数発現できたりするが、大抵の場合は一極特化である。

そして、個々の持つ霊力の特性を俗に霊力性質という。

今は紐育の華撃団戦闘部隊である『星組』隊長の任に就いている大河星司たいがせいじと総一は、この霊力性質が特殊なのだ。

彼らの霊力性質は『触媒』である。その性質故に、彼らは他者と霊力を重ねることが出来るのだ。

譲渡であれば、他の隊員たちもやってやれないことはない。——しかし、相乗できるのは現時点において総一と星司だけなのだ。

この霊力性質は、文字通りの万能性を秘めている。そして、未だ男性にしか確認されていないのがポイントである。

現時点で織斑一夏をスカウトしたところで即戦力には成らないだろう。——しかし、その将来性は大きい。もし霊力性質が『触媒』だとするなら尚更だ。

だが、それも前提条件が間違っていないければの話である。総一がISを起動することが出来なければ、この話は始まることなくそこで終わりだ。

「失礼します。打鉄を持って参りました」

当然、そのことは織り込み済みだったらしい。……まるでタイミングを図っていたかのように、量産型ISの一つである打鉄が司令室へと運び込まれた。

「さて、論より証拠。早速確認してみるとしどうか、総一君？」
「はっ」

司令に促され、総一は打鉄へと触れた。

「ぐう……っ!？」

瞬間、ナニカが繋がった。……それが総一の感想だった。

ISに関するおびただしいまでの情報の数々が、意識へと直接流れ込んでくる。……その影で、己を見つめる存在がいることに総一は気付いた。

（何だ……？ 俺を見ている……？ 男？ それとも女？ ……わからない。今はまだ、遠すぎる）

それは刹那の邂逅だった。——邂逅と言えるかもわからない。次の瞬間、総一は我知らず打鉄を動かしていた。

「ふむ……どうやら推測は正しかったようだね」

司令の声に意識を浮かび上がらせた総一は、しゃがみ込んで打鉄を脱着した。……実に自然で、まるで『よく見知った物を扱っているかのよう』だった。

そして敬礼し、命令を復唱した。

「了解しました。大神総一、I S学園への入学、及び織斑一夏の護衛スカウトの任に当たります」

「うん……よろしく頼んだよ、大神隊長」



神崎重工の技術者からI Sについてのより詳しい話を聞いたり、I Sの参考書を読んだり、表向きの仕事をしたりしているうちにあっという間に日は流れた。

（まさか此程までに偏っているとはな。男性教諭が一人もない。それも困るが、何よりも授業がI S関連に偏りすぎだ。曲がりなりにも高校なのだから、これは問題がありすぎないか……？）

現在I S学園の廊下を歩きながら学校案内を読んだ総一の感想がこれだった。

こうして廊下を歩いている以上、I S学園への入学自体は問題なく出来た。――だが、I Sの動作に関して問題があった。

普通に動かす分には問題ないのだが、戦闘行動を取ろうとすれば上手く動かないのだ。

これは靈力が過剰注入されるためであろう、というのが総一の至った結論である。

靈力を動力源にしているところは同じだが、I Sと靈子甲冑の設計思想、設計理念は当然の如く異なっている。

靈子甲冑の場合は攻防移全てに靈力を用いるが、I Sの場合は防

——バリアーや絶対防御——だけらしいところを見てもそれは明らかだ。

無論、そのままでは問題があるので対策は練った。

それに実体験から、最適化が進めば問題は解消される、と総一は踏んでいる。……初期設定時と一次移行後の動きを比べれば、そうとは思えないのだ。

異例ながら発現した単一仕様能力の存在が、その推測を後押ししてくれる。
ワンオフ・アビリティー

もつとも、単体では何の意味もない能力だ。なにせその名前からしておかしい。『隊長』なのだ。その効果は、作戦を発令することによりISの『コア・ネットワーク』においてチーム登録しているメンバー——自分を含む——の攻防移に補正を掛ける、である。……靈子甲冑で出撃しているときと然程変わりのない。

そのことから鑑みても、後は時間の問題ということである。——しかし実際問題、その時間がどれくらいなのか分からないから困りものだ。

「まあ、上手いこと立ち回ってみせるさ」

不利な状況など慣れたものだ。何せ靈的戦闘というものは基本的に後手に回るものだから……。

それを思えば、これもまた大差はあるまい。

総一には経験からくる自信と自負がある。

そして、たとえISという未知の舞台といえど、それらの経験を転用できないはずはない。

それに、正直に言えば総一は楽しみだった。

総一はその仕事柄、普通の学校に通うことなど出来なかったのだ。今までの勉強は全て華撃団の関係者に教わってきたのである。

つまり何が言いたいのかといえ、総一は同年代との付き合いに飢えているのだ。同年代の友人など華撃団の関係者ぐらいで、それ

以外は仕事上のドライな関係でしかないのである。

IS学園も決して『普通の学校』とは言えないが、それでも学校であることに変わりない。

この年齢になっての学校デビューであることも相俟って、総一は心底から『友達百人』をつくる気である。

そうして、総一は意気揚々と教室に入ってしまった。

プロローグ（後書き）

一話当たり何文字くらいが妥当なんでしょうか……？
自分の場合、最低五千字は突破するようにしているのですが……。
お教えいただければ執筆の目安になるので助かります。

第1話

「いよいよですか……」

そう呟いたのは、鮮やかな金髪が映える青眼の少女であった。名はセシリア・オルコット。IS学園の新入生である。

日本に来るにあたり、セシリアにはある目的があった。

イギリスの代表候補生という立場にある以上、ISの操作能力向上とブルーティアーズのデータ取りが第一であることに違いはない。そのためにIS学園に通うことを選んだのだし、余儀なくされたのだから。

しかし、それはあくまで公人としての目的だ。――私人としての目的は他にある。

私人、セシリア・オルcottの目的。それは『ある男にもう一度会う』ことである。

だが、ただ会うだけでは意味がない。会うべくして会う必要があるのだ。――でなければ、名前も居場所も知っている以上、既に関に行っている。

初めての出会いは偶然の産物だった。……ならば、その男に会うのは次も偶然の産物によるものでなくてはならないのだ。

あの男は自分の慢心を打ち砕いてくれた。――だから、その点には感謝している。

しかしそれと同時に、自分のプライドをも打ち砕いてくれたのだ。――だから、その点に関しては恨んでも仕方ないだろう。

あの男に抱いたのが感謝の念だけだったならば、素直に会いに行っている。――しかしそうでない以上、自分から会いに行くのは我慢がならない。

そう、『偶然に次ぐ偶然』という過程を経て、今度こそ自らの言葉で己の名をあの男に刻み込み、そしてその次には『必然』として

出逢えるようにする。……それが、私人、セシリア・オルコットの現時点における最終的な目的だ。

「さあ、待っていなさい。わたくしは必ず目的を果たしてみせますわ。そのために必要だというのであれば、運さえも味方に付けて差し上げましょう……！」

言葉にすることで、今一度意志を確かなものとする。……セシリ
ア・オルコットは静かに気炎を上げた。



不意に、ゾクリときた。

それを表に出すことなく、総一は静かに警戒を強めた。

靈能者であり剣術家でもある総一にとって、この手の感覚は慣れ親しんだものだった。もっとも、事が実際に起こったとて、その脅威度は千差万別であったが……。

（さて、当たりか外れか……）

視界内に織斑一夏の姿を認め、総一は心中で呟いた。

華撃団の存在を知っている政治家の中にも、当然の如くその役目を疑問視する者はいる。何せ時勢が時勢だ。『そんな曖昧なものに注ぎ込む金があるのなら、その分を新たなＩＳの開発に回すべきではないのか』……といった考えを持つ者がいるのは至極妥当であるだろう。——実際に靈的現象に対処している総一としては困りものだが。

ともあれ。

そういった考えの者たちに華撃団の有意性を示すためにも、此度の護衛任務はありがたかった。そういった考えの者たちは、華撃団

の実戦部隊を『強い霊力保持者の集まり』としか認識していないからである。

確かにそれも間違っているが、あくまでそれは最低限の条件である。実際に配属されている隊員の多くは、何かしらの戦闘技術を修めていたり、そうでなくても優れた能力を持ち合わせている。事実、総一は二天一流を修めているし、桜華は北辰一刀流を修めている。

そこで重要となってくるのが織斑一夏である。『世界で唯一ISを動かせる男』という肩書きは強い関心を引き寄せている。――実際に総一も動かせるので唯一ではないのだが。

華撃団の上層部である『賢人機関』、技術協力している『神崎重工』の上役たちは『ISを起動させるには霊力が必要』という結論に至っているが、世間一般には謎のままである現状、織斑一夏はあらゆる意味で狙われやすい。

織斑一夏を『世の男性にとって希望の星』と表せば分かりやすいだろうか。

表向きには技術的な意味で狙われやすい。現在判明しているあらゆるデータとこれから取得できるであろうデータを女性のそれと比較することで、『男なのにISを動かせる理由』が判明するかもしれないのだ。

そして女尊男卑を招く要因がISにある以上、それが分かれば男女平等にまで持ち直せるかもしれないのだ。

これは大きい。仮に科学的な理由を証明できたならば、それを発表した国は世の男性陣からの多大な支持を得られることだろう。

そして、だからこそ大半の国が身柄を確保しようとしているはずだ。

確かに、IS学園は国際規約で『学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されない』と定められている。――がしかし、今現在そんなものは既に有名無実の代物と化している。

故に、今こうしている中でも、あらゆる国家あらゆる組織が動いている筈だ。

結婚などで合理的に確保しようとする分には何も問題ない——わけではないが、結婚は個人の問題であるために口出しし辛い——が、それに紛れて秘密裏に確保しようとする所も間違いなく存在しているだろう。

そして裏向きには『世界を絶望で満たす』ために狙われるだろう。得た希望が容易く無へと帰したならば、後に待つのは絶望だ。

世界の男女比はおおよそ半々。その内の半分が一斉に絶望の海へと沈むのだ。

霊的見地に立つ者としては、その後に起こることなど考えたくもない。文字通りに世界が減んでも不思議ではないだろう。

故に、織斑一夏を見事に護ってみせれば、華撃団を疑問視する政治家たちに『華撃団は役に立つ』と考え直させることが出来るはずだし、起こり得る災厄を未然に防ぐことにも繋がるはずなのだ。

そんなわけで、このような悪寒が起こるのは、総一にとって寧ろ望むところであった。

（しかしまあ、彼も災難な事だ……）

警戒はそのまま、総一は護衛対象に同情せざるを得なかった。

織斑一夏にとって——大神総一じぶんを除き——周りの人間は全部女性。しかも席は最前列の中央……つまりは教卓の真ん前という最も目立つ位置。挙げ句の果てには向けられる視線の数々。

見ていて可哀想になるほど緊張しているのが丸わかりだ。

男という点で見れば総一も同じであるが、彼の席は最後列だ。それに表の仕事柄視線を向けられることには慣れている。それに加えて、興味本位で眺めるだけならわざわざ後ろを向くよりも前や横を見た方が楽なためか、総一に向けられる視線は想像以上に少ない。

だからこそ、総一には同情を抱くような余裕があった。

(HRまでまだ時間はある。……休み時間を予定していたが、今の内に話しておくか)

総一は席を立ち、静かに、それでいて自然に、一夏の席へと向かっていった。



「いや、君も大変だな。織斑一夏君？」

自分に掛けられたその声に対し、何よりもまず『助かった』と一夏は思った。

女性の群れの中に男子は自分一人だけという事実もあり、一夏としても覚悟は決めてきたつもりだった。——しかし、所詮は『つもり』でしかなかったということだろう。これは想像以上にキツかった。

一応『HR直前に入室していらなく目立つ真似をするよりは、前もって入っていた方がマシだろう』という考えの元に早めに来たのだが、いつまで経っても視線の雨は止まない。

いい加減にどうにかなるんじゃないかと思ったところで、救いの主が現れたのだ。

誰かと会話でもしていた方が時間の経ち具合も早く感じられるだろう、と自分でも思っていたのだが、助けを求めた先——幼馴染みの少女である篠ノ之箒——に無視を決め込まれて諦めていたところでこれだ。その喜びも一入ひとしおである。

(ああ……神様って本当にいるんだな。神様ありがとう)

思わず神様に感謝を捧げてしまったが、声を掛けられて何の返事

もしないのは失礼だ、と返事を返そうとしたところで何かが引っ掛かった。

何だ――――

「もしもし？ 聞こえているかい、織斑君？」

――――と思ったところで再度声が掛けられ、直ぐに答えが出た。声が低い。声が低い女性もいるだろうが、この低さは男性のそれだ。

その答えが出ると同時、ぐるん、と勢いよく一夏は声の主へと振り向いた。

果たして、声の主は男だった。充分に美形と言える顔立ちには微苦笑を浮かべている。しかし、何よりも一夏の目を惹いたのはその佇まいだった。凜としている、と言えはいいのだろうか。ただ立っているだけだというのに、美しさと力強さを感じさせてならない。

「あ、ああ……聞こえている。悪い。男は俺一人だって聞いてたから、驚いて反応が止まった」

「まあ無理もないさ。俺は他人から視線を向けられることには慣れている方だけど、それでもこれは結構くるものがある。……取り敢えず自己紹介といこう。俺は大神総一だ。君と同じく『男なのにISを動かせた』ってことでこの学園に通うことになった。動かせた理由は……有り体に言えば偶然の産物だな。『LOSSOM』ってグループは知ってるかい？ 俺はその一員なんだけど、メンバーの一人がISを題材にしたドラマに出ててね。俺もそれに急遽端役で出るようになったんだ。まあ撮影自体はすんなり終わったんだけど、事が起こったのはその後だ。片付けを手伝ったときに偶然ISに触れたんだが、そしたら何の因果が起動したってわけだ」

カバーストーリー
流石に真実を言うわけにもいかず、表向きの理由を言って総一は

笑った。

なるほど。芸能界のことなどサッパリだがそういうこともあるだろう。——総一の説明に一夏は納得した。

しかし、同時にこうも感じた。『本当のことを言っているが——真実は語っていない』……と。

何故そう感じたのかは一夏自身にも分からない。本当にただの直感だ。けれど別に構わなかった。

これもまた直感でしかないが、総一は信じられる、と一夏は感じたからだ。

そんなわけで一夏もまた自己紹介をしようとしたところで——

「きゃあああああ！」

「まさかとは思ってたけど！」

「本当に『BLOSSOM』の総一君!？」

「サインちょーだーい！」

————爆発と言わんばかりに周りの女子が騒ぎ出した。

それから暫し。

総一の自己紹介に周囲の女生徒たちが騒ぎ出し、結局一夏が総一に自己紹介することなくHRが始まった。



(これは……別の意味でキツイ)

一夏は心中で呻いた。——出席番号順での自己紹介。……それはいい。別に構わない。進級に伴うクラス替えがあるかは分からないが、少なくとも一年間は一緒に勉強することになるのだ。自席の周りや気になる人物を確認する意味合いでも、自己紹介というものは必要だ。しかし、この歓声は一体何だ。自己紹介でこんな歓声が上

がるものなのか。というか、他のクラスに迷惑だろう。

H R 前と同じく、総一が自己紹介した途端にこの騒ぎである。

少なくとも、この騒ぎが治まるまでは一夏が自己紹介する意味がない。こんな状態で行ったところで、騒ぎに吞まれてお終いである。

（だからこそ、こうして考えてられる余裕があるんだが……）

しかしそれも長くは保つまい。程なく自分の番がやってくる。その時、自分はどのように自己紹介をすればいいのだ。……よく知らないが、総一は有名人らしい。所謂『芸能人』というやつだ。この騒ぎはそれも一因なのだろうが、何よりも総一の自己紹介の上手さが理由だろう。この衆人環視の中で、彼は如才なくやってのけたのである。真似しようにも、とてもじゃないが無理である。ひよんな事から有名人になってしまったが、そこに自分の意志は介在していないのだ。結局のところ何が言いたいのかといえば、『周りがどう思おうとも織斑^{じぶん}一夏は平々凡々な小市民である』ということだ。

（そんな俺が、どうやったら自己紹介を上手くやれるってんだよ……！？）

一夏が心中で絶叫している間にも周囲には静寂が戻りつつある。いや、戻った。それと同時に、幾多もの視線が自分に向けられる。

（えーい、こうなったらヤケだ……！ やってやる！ やってやるよ！）

自分に克を入れ、勢いのままに口を開く。

「名前は織斑一夏。皆がどう思ってるか知らないけど俺はしがない小市民なんでムダに何かを期待するのは止めてくれ。ただ掃除洗濯

に関しては一日の長があると自分でも思ってるからそこら辺は頼ってくれても構わない。まあ何はともあれここに通うことになった以上最初は不慣れもあると思うが皆と仲良くやっていきたいと思う。どうかよろしく」

一夏はノーブレスで言い切り着席した。――自分でも何を言ったか曖昧だ。変なことを言っていなければいいんだが……。

少しばかり余裕が戻ってきてから気付いたが、周囲は未だにしんとしている。どうやら呆氣に取られているようだ。――一夏が思い至った途端に後方からパチパチという音が鳴った。

振り向く。視線の先では大神総一（こうしんそういち）がその手を叩き合わせていた。

「フム……まあ良しとしておいてやろう」

それを確認したと同時に、またも自分の後方――副担任である山田先生がいた場所、つまりは教壇――から、今度は声が聞こえてきた。しかし、山田先生の声ではない。

一夏はその声に聞き覚えがあった。――いや、そんなレベルじゃない。よく知っている声だ。この『俺にのみドラの効果音付きで聞こえてくる、トーンの低い声』は、自身の姉、織斑千冬（おじま ちふゆ）のものに他ならない。

至った結論に対し、そんなバカな……、と思いつつ、一夏は――まるで錆び付いたロボットの如く――ゆっくりと振り向いた。

黒のスーツにタイトスカート。その背はすらりと高く、ボディラインは見事の一言。胸の前で組まれた腕。その鋭い目つきは、まるで狼（じぶんのあね）を思わせる。……思い違いでも見間違えでもなく、真正正銘、織斑千冬がそこにいた。

「な、んで……？」

何でここに千冬姉がいるんだ？　——そう問い掛けようとした一夏の声は、しかし言葉として機能しなかった。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

目の前で交わされる会話に一夏は理解が追いつかない。だが、そんな一夏をお構いなしに状況はどんどん進んでいく。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らうのは個人の自由だが、私の言うことには従え。いいな」

千冬の自己紹介はこれ以上ない暴力宣言と同義だった。しかし、その言葉は一夏を落着かせる効果を果たした。

この『目の前に織斑千冬じぶんのあねがいる』という現実を、ただただ一夏に納得させたのだ。織斑千冬しんどうの理不尽さをこれ以上ないほどに知っている一夏にすれば、諦観ていかんを抱くのは慣れたものだったのである。

だが、一夏のテンションと周りのテンションはどうやら違うらしい。総一そういちのときよりもなお凄まじい黄色い声が教室の中を飛び回っている。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

心底うつとうしいという表情で千冬は毒を吐く。だというのに、女生徒の黄色い声は止まない。

「あーもうやかましい。いい加減に黙れ。騒ぎたりないんならグラウンドを十周でもしてこい」

その言葉と共に、教室内からはピタリと音が止んだ。……先程までの喧騒が嘘のようである。

「初めからそうしているバカどもが……。そら、時間は押してるんだ。次の奴、とっとと自己紹介をしろ」

千冬効果は絶大ということなのだろうか。そこからは順調に自己紹介が進められていった。

第2話

(さて、どうしたものかな……?)

一時間目の休み時間、総一は行動を決めかねていた。

視線の先では、ある女子生徒が護衛対象へと声を掛けている。

篠ノ之箒。織斑一夏の幼馴染みにして、ISの開発者、篠ノ之束の妹。

四方八方から見られているこんな状況では、落ち着いて話をするなど出来るわけがない。……少なくとも、加山の情報を信じる限り篠ノ之箒には無理なはずだ。

となれば、必然的にどこかへと移動するだろう。

護衛としては付いていくのが正しいのだが、総一とて情を知る人間である。

久方ぶりの再会、その上に篠ノ之箒の事情も鑑みれば、邪魔をしたくないと思うのが人情というものだ。

(とは言え、目を離すわけにもいかないから……。仕方ない。遠目に窺うくらいは許されるだろう……)

二人が席から離れたのを見計らい、気落ちしながらもごく自然に総一は起立する。

「少々、よろしいでしょうか？」

「……ええ。とは言え、ここではなんです。教室から離れませんか？」

「構いませんわ」

「では、少々歩くとしましょう」

横合いから掛けられた声に、総一の反応は僅かに遅れた。

知人である。——同じクラスにいることは分かっていたが、話し掛けられるとは思ってもみなかったのだ。

だが、これ幸いと総一は話し掛けてきた人物——セシリア・オルコットを誘導する。……こんな状況だ。教室の外へと誘うのは何らおかしい事ではない。

「しかし、まさか話し掛けられるとは思っていませんでしたので……少々、驚きました」

視界の中に一夏と箒の姿を確認し、廊下を歩きながらも総一はセシリアへと告げた。

「……無理ありませんわね。お恥ずかしい話ですが、あの時のわたくしは、ただ『男』というだけで見下しておりましたから……。
言い訳にしかありませんが、やはり重圧やストレスプレッシャーに参っていたの
でしょうね。オルコット家を継いでから……つまりはたった三年会
わなかっただけで、幼き頃よりの親友が男だということすら忘れて
おりましたもの。その事実が気が付いたときは愕然としてしまいま
したわ」

そう言って、セシリアは静かに笑った。

いい笑顔だ、と総一は素直にそう思った。

セシリアとの出会いは、以前、総一が仕事で欧州へ赴いた際に遡る。

全てではないにしろ、代表候補生ともなれば国内に限っては相応の知名度を有しているものだ。それ故に、メディアへ出てくることも少なくはない。

セシリアの場合は、見目麗しく、名門貴族である『オルコット家』の当主という追加要素もある。メディアへの露出は必然と言えた。

さて、欧州にはある実話を元にした物語が存在している。その起源は新しめで、日本でいえば太正時代に当たると言われている。

主人公は日本よりやって来た黒髪の男。ヒロインは五名で、その内訳は修道女、貴族の娘が二名、サーカス団の少女、世間を騒がせた大悪党となっている。……この六名が舞台となるパリの地で次から次へと起こる怪事件を解決していく、というお話だ。

そのタイトルを『黒髪の貴公子』というこの物語は、欧州全域で多大な人気を博している。——しかし細部は非常に不鮮明で、ハッキリしていることなど紹介文に書かれていていることくらいしかない。だが、主人公とヒロインの名前も不明だからこそ自由度が高く色々なストーリーが創られており、そうして創られたストーリーが或いは加えられ或いは削られていったからこそその人気である、とも言われている。

今までにも何度か映像化されている『黒髪の貴公子』だが、またもや映像化する運びとなった。いつもと違うのは『主人公には黒髪の日本人を起用したい』という監督の強い拘りが反映されたことである。

そこでスポットを当てられたのが総一だ。

総一の聞いたところによると、当初『若い』という理由で監督は却下したかったようだが、スポンサーの面々——フランスの名門貴族であるブルーメール家、北大路家、きたおおじシャトーブリアン家、ライラック家、更には欧州全域にその名を轟かせるホワード技研、果てはイタリアでも屈指の名門、『赤い貴族』と謳われるソレッタ家と錚々たる顔触れだ——からの強い推薦に断り切れなかったとの事である。

まあ、実際に動きを見せた後は両手を挙げて歓迎されたのだが……。

ともあれ、主人公が若いのでヒロインの年頃もそれに合わせ、ヒロインの一人である『貴族の娘』としてセシリアが選ばれた。

この共演が二人の出会いである。

そして当時、総一はセシリアからどこか張り詰めた空気を感じていた。それをどうにかしたくて話し掛けたり料理を作ったりと色々やってみたわけだが、結果は芳しいものではなかった。

しかしそれがどうだ。今のセシリアは自然体であるように見受けられる。

自分にはどうすることも出来なかったが、良い方向へと向き直ってくれたのは素直に嬉しいことである。

歩きながら話を聞いている内に廊下は抜けていた。

降り注ぐ陽の光と肌を撫でる風が心地よい。

「なので大神さん、わたくしはあなたに感謝しておりますのよ？
あの時、あなたの剣を見ていなければ……今もきつと、わたくしは慢心したままだったでしょうからね。……ええ、ですから、ありがとうございました」

そう言って、セシリアは総一へと頭を下げた。そこにわだかまりは感じられない。少なくともセシリアにとって、この件で総一に頭を下げるのは前々から決めていたことであり、何ら厭うことはない。その一方で、頭を下げられた総一としては堪ったものではない。総一個人がセシリアに行ったことで感謝を受けるのなら、それはそれで問題なく受け止めることが出来る。――しかし、セシリアの言葉を聞く限りではどうも違うようだ。

セシリアは『剣を見て』と言った。総一が覚えている限り、セシリアの前で剣を抜いたことは一度もない。となれば、セシリアが言っているのは撮影時、或いは自己鍛錬をしている時のことだろう。……どちらにせよ、総一自身の意図はない。

撮影時のことを言っているのであれば、それは仕事だからだ。公人としても私人としても全力で臨んだが、それでセシリアに対してどうこうという意志は微塵もなかった。

自己鍛錬にしても同じ事だ。打ち合う相手がない以上、それま

で疎かにするわけにはいかないということだけのこと。やはりセシリアに対してどうこうという意志は持ち合わせていなかった。

だからこそ、こうして頭を下げられるのは非常に困る。総一の意図するところではないにせよ、総一が影響を与えたという点では間違いないから尚更だ。

「……頭を上げて下さい。俺個人としては、あなたに何かをしてやれたという実感がありません。無論、俺個人の感情は別として、感謝の念はありがたく頂戴します。それを固辞するのは、あなたを侮辱する行為に他なりませんからね。……しかし、身に覚えのないことで頭を下げられるのは、その、どうにも心苦しいのです。ですので、こちらを助けると思って頭を上げてくださいますか？」

総一は困惑を隠しきれないままにそう言った。

これが加山や桜華相手であれば、もっとざくばらんに言っているのだが、彼らとセシリアの立ち位置は違うのだ。

これが公人として礼を言っているのであれば、ISの先輩ということで下手に出るのも吝かではない。――だが、今回の彼女は私人として礼を言っている、と総一は受け取った。

その点を加味すれば、上から言うのもダメだし、下手に出すぎるのも良くはない。……総一にとっては何とも難しい話である。

正直、この対応で合っているかどうか自信がなかった。

「……では――――」

と言ってセシリアは頭を上げた。

それに総一はホッと息を吐く――事は出来なかった。……セシリアの纏う空気が一変していたからである。

「――――次の話へと移らせていただきますわね？　率直に言えば、

わたくし、負けず嫌いなんです。……で、ですね？　あなたは確かにわたくしの慢心を打ち砕いてくださいましたが……それと同時にわたくしのプライドをも粉微塵に打ち砕いてくださいましたの。となれば……これはリベンジするしかないでしょう？」

そう言ってセシリアは囁く。

ゾクリ、と総一の全身を怖気が走った。それと同時に、HR前に感じた悪寒の正体に気が付いた。

これはマズい。何をしたのかは皆目見当も付かないが、この空気は桜華やシャルロットを始め、女性陣を怒らせた際のそれと同質のものだ。

（くっ……俺はどうすればいい。俺に一体何ができる。……教えてくれ、そして助けてくれリヴァイアス！）

空気に耐えきれず、総一は遠きパリの地にいる親友にしてシャルロットの義兄、リヴァイアスへと心の中で助けを求めた。……現実逃避とも言う。

総一の経験上、このテの空気を纏った女性は厄介事しか運んでこないのだ。

「……俺に、一体何を望んでいるんだ、セシリア・オルコット？」

絞り出すように総一は言った。……最早、言葉を取り繕う余裕など持ち合わせていなかった。

「今は秘密とさせていただきますわ。まだ準備が整っておりませんので……。大丈夫ですわ。それほど時間は掛からないはずですから……」

「……了解した。皆目見当もつかないが、俺に非があるのは間違い

ないようだしな……。何であれ、甘んじて受け入れるとしよう」

諦観の念を抱いた総一が言うと同時に、二時間目の開始を告げるチャイムが鳴り響いた。

「それでは戻りましょうか」

颯爽と歩み去るセシリアを追い、総一もまた歩き出した。……一夏もまた筭の後を追っているのが、視界の端に微かに見えた。



「ほとんど全部わかりません」

二時間目の授業中、『わからないところがあったら訊いてくださいね』との山田先生の言葉に対する一夏の返答がこれであった。

その言葉を受けた山田先生の態度が一転し——先程まで胸を張っていた——思いつきり顔を引き攣らせたのが、総一の目にハッキリと映った。

山田先生がそうなるのも無理はない。

総一としてそこまでISのことが分かるわけではないが、それでも今授業でやっていることぐらいは分かる。

IS学園に入るに当たり、事前に参考書には目を通していいし、技術者の方からも説明を受けたからだ。……当初、件の参考書がやたらと分厚いことにげんなりとしたが、その実わかりやすく纏められており、スイスイとページを進めたのは記憶に新しい。

そして、今日は初日で今の授業は二時間目だ。……つまり、今やっているのは『初歩の初歩』という事である。

それを『わからない』と言われてしまえば、教師としては困りものだろう。

「え、えっと……織斑君以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

それでも、何とか気を取り直したらしい真耶が確認を取る。……当然の如く、誰一人として手を挙げる者はいなかった。

「な……!？」 大神、まさかお前もわかるっていうのか!？」

それを見た一夏が驚愕も露わに総一へと問い掛けた。

「いや、俺からすればこの時点で『わからない』っていうのがわからないんだが……？ 確かに仕事の関係もあって参考書にも全部目を通したわけじゃないが、今やっているのは最初の方に載ってたぞ？ しかも結構わかりやすかったし……。織斑君も大変だったとは思うけど、俺ほど時間が取れないわけじゃなかったと思うんだが……。？」 仮に参考書に目を通していなくても、政府から教育役が派遣されているはずだ。何せこの学園はそのシステム上、事前学習が欠かせない。しかしISの特性上、余程の物好きでなければ男にそれは望めない。こういう言い方はアレだが、俺や君は世の男性陣にとって『希望の星』なんだ。そして自発的な協力が得られれば、データ取りであれ研究であれ進展が早くなる。そこを踏まえれば、参考書だけ渡して『入学までに勉強しておいて下さい』なんて有り得ないんだ。事実、俺に対しても技術者が派遣されてきたし、その技術者は『織斑先生が君の教育役』だと零していたんだが……。？」

困惑しつつ、総一はそう返した。……寧ろ、そうとしか返せなかった。

「そうなのか？ 俺は千冬姉がこの学園で教師をしていることすら、

今さっきまで知らなかったんだが……」

総一の疑問に一夏はそう答え、その視線を千冬へと移す。……一夏だけではなく、教室中の視線が千冬へと突き刺さった。

「ゴホン……織斑、貴様ISの参考書はどうした？」

「実は……家の掃除をしたときに古い電話帳と間違えて捨ててしまいました」

「やれやれ……仕方ない。あとで再発行してやるから目を通しておけ」

千冬はそう言って山田先生に授業を進めるように指示した。この対応は、先程までの千冬の態度からは考えられないものである。

故に、それを見ていた一同の心は一致した。……則ち『誤魔化した!』である。



「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

二時間目の休み時間、不意に声を掛けられた一夏は素っ頓狂な声を出した。

鮮やかな金髪が映える青眼の少女。美少女と評するに充分だが、その言葉遣いといい纏っている雰囲気といい、『いかにも』今時の女子だ、と一夏は思った。

「もしもし? 聞こえてます?」

「あ、ああ……聞こえてる。どういう用件だ?」

「いえ、特に用という用はございませんわ。……ただ、他者を知ろ

うと思うのなら、まずは実際に話してみるのが一番でしょう？ あなはそう思いませんか？」

同意を求められた一夏は、確かに、と肯定した。

それと同時に己を恥じた。自分は第一印象で決めて掛かれるのを嫌がっているというのに、『他ならぬ自分が第一印象で決めて掛かっていた』という事実が自己嫌悪を呼び起こす。

「悪い。俺、第一印象であんたの事を決めて掛かっちゃってた」

だからこそ、一夏は頭を下げた。……目の前の人物には困りものだろうが、こうでもしないと自分のスジが通せない。

「くう……っ！ 彼もこんな気持ちだったのかしら……？」

いきなり頭を下げられた当の本人、セシリア・オルコットは困惑し、つい一時間ほど前に自分が頭を下げた相手もこんな感じだったのだろうか、と思考した。……それが言葉として零れていることに気付かぬままに。

「あゝもう！ とにかく頭を上げてくださいな！ いきなり頭を下げられては、わたくしの方が困ってしまいますわ！」

ついセシリアは怒鳴ってしまった。別に怒ってはいないのだが、こんなのは彼女にとっても予想外である。……どちらかと言えば直情径行気味な彼女はイレギュラーに弱かった。

「あ、その、悪い……」

「いえ、わたくしも怒鳴ってしまいましたから……」

一夏が頭を上げたかと思えば、今度はセシリアが頭を下げた。
暫しの後、二人揃って小さく笑う。

奇妙な静寂が教室内を包んだ。――寧ろ、二人の周りに独特の空気が形成された、と言った方が正しかろう。

当然、そんな空気を許容できない者がいた。

篠ノ之箒である。

彼女は一夏に恋をしている。そして、これ以上ないくらいの焼き餅焼きであった。ついでに言えば『素直になれない』病の持ち主で、加山曰く『ツンツンツンデレ』である。

箒は正當な――一夏にとっては不當である――怒りをぶつけようと席を立った。そして一步目を踏み出すと同時にそれが鳴り響いた。

三時間目の開始を告げるチャイムである。……ああ、無情。

箒は怒りを抑え込んで席に着いた。

第3話

「この時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する。――が、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

三時間目。教壇に立ったのはこれまでと違い山田先生ではなく織斑千冬であり、その第一声がこれだった。

その言葉を聞き、総一は教師としての織斑千冬に疑問を抱いた。確かにクラス代表者を決めるのも必要だろうが、何も授業中に行うことはない。それこそ下校時のHRで行えば済むことだ。

なるほど。確かに織斑千冬は優れたIS操縦者なのだろう。……それは総一も認めるところだ。

しかし、それが優れた教育者とイコールで結ばれるとは限らない。千冬の場合、その言動から鑑みるに軍隊の教官などであれば適正は抜群だろうが、教師としての適正は然程高くない。……総一はそう見て取った。

（織斑一夏への事前指導も行っていないようだし、ここの上層部は一体何を考えているんだ……？）

「はい！ 織斑君を推薦します！」

「私は総一君を推薦します！」

（ん？ 今名前を呼ばれたようだが、一体何だ……？）

考え事に没頭していた総一は己の名前を呼ばれたことで我に返り、情報を得ようと耳を立てた。

「では候補者は織斑一夏と大神総一。……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

代表者の選出か、と千冬の言葉を聞いて理解した。

代表者とはクラスの顔だ。それが周囲に埋没するようでは意味がない、と考えるのも道理ではある。そしてこのクラスには打って付けの客寄せパンダが二名存在しているとなれば、それが選ばれるのは自明の理だ。――だが、クラスの顔というのならば専用機持ちで充分に事足りる、というのが総一の考えである。

「では、俺はセシリア・オルコットさんを推薦します」

総一の言葉が、教室内に静かな波紋を呼び起こした。



「さて、それじゃあ帰ろうか、織斑君？」

放課後。唸る一夏にそう声を掛けたのは総一である。――しかし、誘われた一夏としては意味がわからない。

「いや、帰るってどこにだよ？ 俺は一週間は自宅通学なんだが？」

「……それも聞いてないのかい？ 俺という二人目が現れた事で、部屋の問題は解決しているんだけど……」

首を傾げて問う一夏に、総一は深い溜息を吐いて答えた。

当然、わからないのは一夏である。そんな話は聞いていない。

「はぁ？ それって一体どういうことだよ？」

「そうだな……？ IS学園は全寮制で、基本的に相部屋とされて

いる。……ここまではいいかい？」

「ああ。だから『男の俺を迂闊に放り込むわけにはいかない』ってんで、少なくとも一週間は自宅通学って聞いてたんだが？」

「そう、そこだ。君が男で、同室の子が女子だから問題となるんだ。だから時間を掛けて君用の部屋を用意しなければならなかった。――けど、俺という二人目の男が現れた。……なら、俺と君を同室にしていまえば問題はない。わざわざ時間を掛けて個室を用意する必要もない」

言われてみれば納得である。

しかし、一夏としてはこう言わずにはいられなかった。

「なあ……俺っておざなりにされてんのかな？」

「……………」

否定したくても否定できず、総一は沈黙を以て答えるしかなかった。

総一の沈黙に、やっぱそうなんだな、と一夏は首をガツクリと落とした。

自宅通学する必要が無くなったのは、まあありがたいといえばありがたい。――しかし、荷物は家に置いてあるのだ。これでは二度手間である。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「山田先生……？ 一体どうしたんですか？ そんなに息を切らせて」

呼ばれた声に一夏が振り向くと、そこには息を切らせた山田先生がいた。その手には何らかの書類を持っているのが見て取れた。

「えつとですね、連絡が遅れてしまったんですが織斑くんの部屋が用意されてます。当初の予定と違い大神さんと相部屋となってしましますが……。あ、こっちの紙が部屋番号で、これが部屋のキーになります」

「ああ、それについては今し方大神から聞かされたところです。キーと紙についてもありがたく受け取っておきます。……それで、用件はそれだけですか？ さっさと家に荷物を取りに行かなくちゃならないんですが？」

山田先生が言いつつ、紙とキーを渡してきた。それを受け取りつつも、一夏の言葉は自然と荒くなった。山田先生が悪いわけではないとわかってはいるが、こうも後手後手に回されてしまつては感情を抑えきれなかった。

「あう……それに関しては本当に申し訳ないです。それで荷物についてなんですが——」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え。まあ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器があれば問題ないだろう」

山田先生の言葉を千冬の言葉が遮った。

千冬のジャイアニズムに関しては諦めのついている一夏である。

特に口答えする気も湧かなかった。——しかし、意外な人物が否を唱えた。

「織斑先生は黙っていてください！」

山田先生である。今日一日の態度が態度だっただけに、こうもビシッと言い放つとは思ってもみなかった。……そう思うのは他の面々も同じだったようである。一夏と総一のみならず、教室に残っていた他の生徒や千冬までもが驚きの表情を浮かべていた。

「もう、何なんですか、織斑先生！ 事前説明を行ってなければ事前指導も行っていない。挙げ句の果てには連絡の不徹底！ 確かに織斑くんは織斑先生の弟さんかもしれませんが、それでも限度というものがあります！ しかも、それに対して織斑くんに謝るでもなく上から目線のそのセリフ！ もっと言わせてもらえば生徒に対する口が悪すぎます！ ここは確かに特殊な学園ですが、それでも対外的には『高校』を謳っているんです！ 教育委員会から文句が来たらどうするんですか！ だいたいですね……………」

その勢いは、正に一気呵成と評するのが相応しかった。

よく『普段大人しい奴ほど怒らせると怖い』と言われているが、目の前の光景はそれを証明しているようだった。

そしてその光景は、一夏にとってひどく新鮮に映った。何せあの織斑千冬がタジタジなのである。

「まあ、忙しそうだし……俺たちはお暇するでしょう」

「……そうだな」

これ以上この場にいても、二人に出来ることは何もない。

「それでは失礼します」

異口同音に言い放ち、総一と一夏は教室から去っていった。



校舎から寮までは五十メートルくらいしかない。色々と見て回るべき施設や設備はあるが、何も急ぐ必要はない、という点で両者の意見は合致した。

折り合えずは人心地つくのが先決である。

おのぼりさんよろしくキョロキョロと周囲に視線をやりながらも、その足は真っ直ぐに自室への道を歩んでいる。

普通に歩くよりは時間が掛かったが、それでも必要以上に時間を取られることもなく二人は自室へ辿り着いた。

「改めて……これからよろしく、織斑君」

「ああ、よろしくな。それと、俺のことは名前の呼び捨てで構わないぜ。名字だと千冬姉と被るし、同い年の奴から君付けで呼ばれるとこそばゆくて仕方ないからな」

「そうかい？ それじゃあ、次からは名前で呼ばせてもらおうとするよ。ああ、そうそう、俺のことは好きに呼んでくれて構わないから」

与えられた部屋へと着いた総一と一夏は改めて挨拶をした。

「んで、これからどうするよ、総一？」

「まずは……荷物の整理だな。俺は問題ないはずだけど、そっちはどうかかわからないしな」

「……だな。千冬姉の言葉を信じるなら着替えと充電器しかないはずだし。場合によっては、購買にでも行って足りない物を買ってこないとな」

指針を決め、二人はそれぞれに荷物の整理を始めた。

しかし、千冬の言葉は真実だったらしい。『一夏用』と書かれて部屋に置かれていたダンボールには本当に着替えと充電器しか入っておらず、整理という整理をする必要のない一夏はすぐに手持ち無沙汰になった。

ならば、さっさと購買に行けばいいと自分でも思うものの、一夏の目はルームメイトに吸い付いて離れなかった。

まず、総一は荷物から私服を引っ張り出すとすぐに着替え始めた。

……そこは問題ない。

しかし、なぜ制服の下から刀——大きさからして『小太刀』という奴だろう——が出てくるのか一夏には理解できなかった。

それだけでは終わらない。着替え終わった総一がやけに細長い箱を丁寧に持ち運び、備え付けのテーブルに載せたと思ったら、中から出てきたのはこれまた刀だったのである。当然だが、制服から出てきた奴よりも長い。扱い慣れた様子で僅かに鞘から抜き放ち、軽く目を走らせた後で再び鞘に納めた。

一夏はそれを真剣だと断定した。以前に千冬から、軽くだが真剣についての手解きを受けたことがあるのだ。見間違いでも勘違いでもなく、あれは真剣だ。

「ん……？　どうかしたのか、一夏？」

「え？　あ、いや、その……」

じっと見ていることに気付いたのだろう。総一が一夏へと問い掛けた。——しかし、一夏は上手く返せない。

「なあ、それって……真剣、だよな？」

暫く口をモゴモゴさせた後、ようやくそれだけを口にした。

「ああ、そういうことか……！　いや、すまない。そうか、そういうばそうだよな……」

一夏の言葉を聞き、総一は得心がいった様子で何度も頷いた。驚くのも当然だな、と呟いたのが一夏の耳に届いた。

「どこから説明すればいいかな？」

「いや、どこからつつわれてもな。懇切丁寧に説明されても理解で

きないと思うから簡単に頼む」

苦笑しつつ、了解、と言って総一は説明を始めた。

それによると総一の実家は剣術『二天一流』を伝えているらしく、この年で総一は免許皆伝を受けているらしい。そして総一の所属するユニット『BLOSSOM』のメンバーである真宮寺桜華と加山雄輔もまた、それぞれに剣術を修めており、暇を見付けてはその二人と手合わせをしていた。他のメンバーや事務所の人間もその事は知っており、ここ最近はつつこまれることもなかったとのこと。仮につつこまれたところで、政府から帯刀許可を受けているので何ら問題はない。

それを聞いた一夏は慣れ親しんだ諦観の念で以て受け入れた。それもISという兵器がスポーツとして扱われている御時世である。この年で免許皆伝を受けていようが帯刀許可を受けていようが、実際のところはそう問題ないのかもしれない。

「けど、剣術を修めてるのか……」

諦観の念で受け入れた一夏だが、その点については考えるところがあった。

小学生のとき、一夏は剣を学んでいた。……それこそが箒との出会いに他ならない。

しかし、ISの登場とそれを開発したのが箒の姉、束であったことが問題だった。幼い一夏はよく分からなかったが、束が行方をくらまし、それにより箒は転校を余儀なくされた。

教えてくれる人物と、一緒に学ぶ仲間が揃って離れてしまったことにより、一夏はそこで剣を止めた。

だが、そんな一夏に転機が訪れた。

第二回IS世界大会『モンド・グロッソ』決勝戦当日のことだ。千冬が決勝戦に出ることもあり、一夏は当然の如く応援に行った。

……そして、ISを使う数名からなるグループに誘拐された。

生身ではIS相手にどうすることも出来ず、恐怖に囚われたまま時間だけが過ぎていった。

十分か一時間か、それとももっとか、どれだけ時間が経ったかも分からない中、一夏はそれを見た。

騎士とも侍とも言える、桜色をした全身装甲のIS——だと思う、多分。

その手には一振りの刀を握り、そこから繰り出される剣技を以て相手を圧倒する姿。……一夏は今でもその時のことを鮮明に思い出せる。

そして、その姿に、その技に、織斑一夏は心の底から惚れ込んだ。千冬もまた決勝戦を放棄して駆けつけてくれたが、より心に残ったのは桜色のISの方だった。……これは、結果的に千冬の戦闘を一夏が直接見ることは無かったためでもある。

一夏は建物の中に閉じこめられており、桜色のISが建物内部の誘拐犯を、千冬が建物外部の誘拐犯を相手取ったのだが、それは全くの偶然によるものだった。

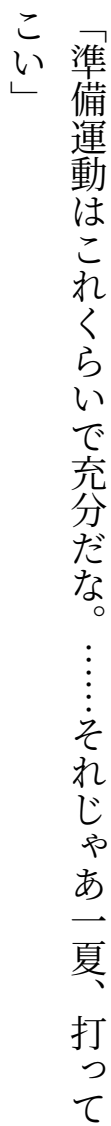
その証拠に千冬にも桜色のISに心当たりはないらしく、その正体不明さが『正義の味方』みたいで、一夏の心に刻み込まれたのだ。それ以降、部活こそやっていないものの一夏は再び剣を始めた。

しかし、桜色のISの動きを模倣したりしてみたものの、一人では素振りが精々。時折千冬が帰ってきて、その細腕で自分を養ってくれている姉のことを鑑みれば、稽古に付き合ってもらうのも気が引けて頼めなかった。

自分はどれ程の腕なのか、自分はあるの剣にどれだけ近付けたのか、分からなかったものが分かるかもしれない。

「頼む、総一。俺と剣を合わせてくれ！」

気が付けば、一夏はそう言っていた。



未だ陽が上がって間もない時刻。寮の外に総一と一夏の姿があつた。

「いや、打ってこいって言われてもよ……。防具も着けないで本当に大丈夫なのか？」

「構わないよ。ただ単に君の腕を見るだけだからな。……なら、防具など不要だ。重い防具が動きを阻害する点を加味すれば、寧ろ邪魔でしかない。そして、君と俺には未だ大きな開きがある。ハッキリ言わせてもらえば、君の剣が俺に届くとは思えない」

そうまで言われて黙っている一夏ではない。

50

一夏もまた木刀を構え――

「いくぜ！」

――叫び、地を蹴った。

一夏が攻撃し、総一が迎え撃つ。……それが何度続いただろう。静寂の中、木刀のぶつかる音だけが鳴り響く。

これで防がれたのは何度目だ。――荒い息を吐きながら一夏は自問した。

分からない。――それが一夏の答えだった。

フェイントを掛けようが、力一杯打ち込もうが、総一はアツサリと防いでみせた。

また一合打ち合い、一夏は大きく距離を取った。――自分がこうも汗だくで息も絶え絶えだというのに、総一にそんな様子は見受けられない。

何でも違うんだ。単純に腕の差だけだとは思えない。しかも、アイツからは一度として打ってきてないんだぞ。――既に一夏の怒りは治まっており、その心中には次から次へと疑問が浮かんでいた。

「……ここまでにしよう。このままだと、これ以上続けても意味はない」

だからだろうか。一夏の耳には総一の言葉がやけに大きく響いた。

「な……！？ 俺はまだやれるぞ、総一！」

「ああ。確かにまだやれるだろう。――だが、それだけだ」

一夏は咄嗟に叫んだが、総一は淡々と返すのみ。

「……どういふことだよ？」

「今回の打ち合い、君から言ってこなかった場合は俺の方から誘っていた。……俺にも思惑があるからな。だが、実際には君の方から誘ってきた。……何故だ？ 何故君は俺に剣を合わせるように頼んできた？ 君は一体何がしたい？ 君が剣を振るう理由はどこにある？」

それが分からない限りこれ以上続ける意味はない。……そう言つて総一は構えを解いた。

その言葉は、一夏に冷静さを取り戻させた。

冷静になった一夏は、そのまま自己の内へと潜っていく。

そもそも、自分は何で剣を合わせてくれるように頼んだ？ ——あの剣に、どうしようもなく惹かれた剣に、自分がどこまで近付けたのかを知るためだ。

では、何故自分はその剣にここまで惹かれたんだ？ ——助かったと思ったから。嬉しかったから。

本当にそれだけか？ ——違う。『あの剣を身につければ、自分もまた誰かを護れるんじゃないか』つて、そう思ったからだ。

ならば、それを鑑みて今の自分はどうか？ ——酷く無様だ。

この剣で、誰かを護ることなど出来るのか？ ——出来ない。こんな理由を見失った剣では、誰かを護るだなんて夢のまた夢だ。それに気付いたとして、どうすればいい？ ——決まっている。

「心を静めろ」

いつしか一夏は、両の瞳を閉じていた。

「覚悟を決めろ」

そして自分に言い聞かせるように声を出す。

「誰かを護ることは、誰かを傷付けること」

木刀をしっかりと握り直す。

「それを認めて、なおも『護る』と魂で叫べ」

何度となく模倣した、その構えへと移行する。

（――護る！）

魂で叫ぶと同時に、一夏はその瞳を開いた。

（そうだ。それでいい……！）

一夏の雰囲気が変わったのを、総一もまた当然の如く感じ取った。
ピリピリと空気が振るえている。

先程までの一夏とは全く違う。

これは断じて見せかけだけの変化ではない。

「……どうやら、理由を思い出したようだな。来い、一夏！ その
剣、見事俺に届けてみせろ！」

一夏の気に昂揚した総一が叫ぶ。

答えるかのように一夏が駆けた。

それはさながら居合の如く。

一夏が抜き、総一が防いだ。――しかし、一夏の動きは止まらない。
い。

「おおおお……っ！」

それは流れるような連続五連撃。只管に模倣していく中で、より自分が動きやすいように、それでいて威力が損なわれないように改良を続けた結果に至った、言うなれば織斑一夏の独自剣技。オリジナル

並大抵の者であれば、遮二無二躲そうとすれば躲せるだろう。しかし、防ごうとすればまず間違いなく防ぎきれずに敗れる。……今回一夏が放ったのはそんな連撃だった。

だがしかし、今現在一夏と相対しているのは総一だ。剣を振ってきた回数も歳月も、一夏を軽く凌駕している。

それだけに留まらず、総一は暇さえあれば他者と打ち合ってきたのだ。その結果鍛えられた見切りは、既に一線級の域に達している。故に、総一が一夏の剣を防ぎきるのは道理である。

「な……!？」

———通常ならば。

高い見切りを有しているからこそ、総一は困惑することとなった。一夏の剣によく見知った流れが見えたからである。幼い頃から数えるのもバカらしいほどに打ち合い、互いに切磋琢磨しあってきた——真宮寺桜華の剣が見えたのである。

桜華の剣を、総一は我が事のように理解している。だからこそ、次はどこへどのようなように打ち込んでくるのかも理解できる。それこそ、反射的に剣を合わせてしまうほどだ。

しかし、今現在総一に剣を向けているのは織斑一夏だ。……真宮寺桜華ではない。

結果、総一は二つの理由から反射行動を無理矢理に抑えつけた。

一つに、桜華に合わせた剣では一夏の剣は防げないため。

一つに、桜華に合わせた剣では一夏が防げないため。

幸いだったのは、今回総一が守勢に回っていたことであろう。もし攻勢に出ていたならば、最悪、死体が一つ出来上がっていた。

一夏の剣。桜華の影。意識と無意識の相反する命令。……様々な要因が重なり、総一は体勢を崩された。

しかし地力の差か。体勢を崩されてなお、総一は一夏の連撃を防ぎきった。

「届かなかった……か」

結果を認め、一夏は俯いた。――遠い。総一にはまだ届かない。

「いや……」

しかし、連撃を防ぎきった当の本人が、一夏の言葉を否定した。

「え……?」

その言葉に疑問を覚え顔を上げた一夏の前で、総一の木刀が中程から折れて地に落ちた。

「ありがとう、一夏。君のおかげで、俺はまた強くなれる」

慢心はしていないつもりだった。過信もしていないつもりだった。しかし、どこかで油断はしていたのだろう。

今回は反射行動を無理矢理に抑えることが出来た。だが、仮に次があつたとするなら、その時も抑えられるかどうかは分かったものじゃない。……今回のことは、運が良かったのだ。

それを知ったからこそ、また一つ強くなれる。

そしてだからこそ、それを発覚させてくれた一夏への感謝は尽きない。

「そしておめでとう、一夏。君の剣は、確かに俺に届いた」

その顔に笑みを浮かべ、総一は自らの敗北を一夏へと告げた。

第4話

「へえ、セシリアって箸の使い方上手いじゃん」

一年生寮の食堂にて、セシリアの箸裁きを見た一夏は感嘆した。彼的に外国人は箸を上手く使えないイメージを持っていたのだ。

ちなみに今は朝食時である。総一、一夏、箒、セシリアの四人が同じテーブルに着いていた。

何故この四人が同じテーブルに着いているのかといえば、そんなに難しい話ではない。

まず、総一と一夏の二人は剣を合わせた後、汗を流してサッパリしてから食堂へと向かった。

その道中、同じく食堂へ向かう箒と遭遇し、一夏が彼女を誘った。箒が一夏の誘いを承諾し、三人揃って食堂へ来たのだが、生憎と席の殆どが埋まっていた。

そこで席を探す彼らに声を掛けてきたのがセシリアというわけである。

総一、一夏、セシリアの三人は今度の月曜に勝負することになっている。しかし、その空気は特に陰悪というわけでもなかった。言葉数こそ少ないものの、どちらかと言えば穏やかだ。

ちなみに今朝はバイキングである。……が、それでも敢えて選んだ食事に名前を付けるとするならば、一夏と箒が和風セット、総一が野菜炒め定食、セシリアがお刺身定食といったところか。

そんな中、ふとセシリアを見た一夏が先の一言を漏らしたのだ。

「…………叩き込まれましたから」

一夏の感想にすぐには答えず、ゆっくりと咀嚼し嚥下してから、セシリアはただそれだけを口にした。

ボソリと告げられたその一言には、並々ならぬ感情が込められていた。

ここまで扱えるようになるのに、相当苦勞したのだろう。――三者にそう思わせるほどであった。

「そ、そうか……」

「ええ。それより、時間はあまりありませんわよ。そのペースで間に合うのかしら？」

セシリアに言われ、一夏は現在時刻を確認した。

確かにあまり余裕がない。――が、間に合わないわけでもない。

「まあ、ギリギリ間に合うだろ」

言って、一夏は黙々と箸を動かす。

その速度は速すぎず遅すぎず。しっかりと咀嚼しているのが見て取れた。

「しかし、叩き込まれたって誰にだい？」

今度は総一が問い掛けた。既に食器は空となっており、あとはお茶を飲み干すだけという状態だ。

「名前は北大路神楽^{かぐら}。リーヴァーリヴァイアス・ブルーメールと共にわたくしの数少ない親友ですわ」

誇るかのようにセシリアは答えた。

「ほう？ そなたには日本人の親友がいるのか？」

驚く筈に答えたのは――

「いや、北大路家は既に帰化している、フランスにその名を馳せる名門貴族の一柱だ。古くより、同じくフランスの名門貴族であるブルーメール家との親交が厚く、現時点において神楽はブルーメールの次期当主であるリヴァイアスと婚約関係にある。また、北大路の女はその家訓により代々『大和撫子たらん』とする姿勢を学ぶ。神楽自身、既に日本では見かけなくなって久しい、数少ない現存する『大和撫子』だ。『書』、『花』、『お茶』は勿論のことだが、それより何よりその『射』が見事だ。あれは一度見たら忘れられない」

――しかしセシリアではなく総一だった。しかも、その説明は内部事情にまで及んでいる。……もつとも、当の総一とて『北大路神楽』という名前だけでは判断がつかなかった。『リーヴァ』という名前が絡んできたからこそ分かったのだ。それに驚いたのは他ならぬセシリアだ。

「大神さん、あなた……何者ですの？」

セシリアがそう問い掛けるのも無理はない。

北大路家もブルーメール家も名門の貴族なのだ。一般人がそう簡単に親交を持てるはずがない。いや、仮に親交を持てたとしても、内部事情まで明かされるとは考えられない。

「何者と訊かれても大神総一としか答えようがない。ま、太正の頃を境に大神家は結構手広くコネを持つようになってな。有名どころで言えば……シャトーブリアン、ライラック、レゾン、ソレッタ、ホワード、アルタイル、神崎、花小路とかとも親交がある」

指折り数えながら名を挙げていく総一にセシリアは言葉もない。

……見れば、一夏と箒も絶句している。

「外国のことはよく分からぬが、神崎とは『神崎重工』のことか？」
「それに花小路ってまさか『日本の政財界の重鎮』って言われてる
あの花小路か？」

箒と一夏の問いに総一は軽い調子で頷いた。

知らない名前も勿論あるが、知っている名前は『知らない方がおかしい』というレベルである。……そこから考えれば、知らない名前も地元に行けば『知らない方がおかしい』レベルにあるのは間違いないだろう。

そんな名前を総一はポンポンと挙げていったのである。

「あ、頭が痛くなってきましたわ……」

この瞬間、一夏、箒、セシリアの中で『大神総一＝得体の知れない人物』として認められたのだった。

ともあれ。

得体が知れなかりうと頭が痛くなろうと、時間は刻一刻と過ぎていくのが理である。そしてこのままでは遅刻確定だ。

ごちそうさまでした、と四人の声が重なったのはある意味で必然だった。



「しかし、行動が遅いにも程がある。やれやれ……としか言いようがない。君も災難だな、一夏」

時間が進んで昼休みである。朝食時と同じく、総一、一夏、箒、セシリアの四人が、またも同じテーブルに着いていた。

そんな中、お茶を飲んで一息ついた総一がおもむろに言い放った。
……だが、いきなりそんなことを言われても一夏には訳が分からない。
い。

「災難だなんて……何がだ？」

目をパチクリとさせながら、一夏は総一へと問い返した。

「恐らくは専用機のことでしょう」

言って、違いますか、とセシリアは目で総一へと問う。

総一もまた、違う、と目で返す。

「まあ、確かに……。世間一般におけるお前の立ち位置を考えれば、専用機が与えられるのは至極当然と言えるだろう。……だというのに、未だ用意されていない。しかも一夏。お前がここに来ることを強制されたのはいつだ？ それから何日経っている？」

箒もまたお茶を一口飲んでから同意した。

そこまで言われれば、流石に一夏も理解できる。

「けど、だからこそ手間取ったって事じゃないか？ 専用機ってのは基本的に国家や企業に属する人間にしか与えられないんだろ？ そこに例外を作るわけなんだから、意見の対立とかもあったんじゃないの？」

一夏の意見も尤もだ。確かに意見の対立もあっただろう。
だが、しかしだ。

「俺が専用機を与えられてから軽く1週間以上は経っているわけだ

が……この事実を踏まえてもそう言えるか？」

一夏に専用機が与えられるのは既に決定されていたことだ、と総一は言外に言つてのけた。

何せ総一の立ち位置は『二番目の男』である。悪く言えば予備スベアでしかない。

そんな総一が既に専用機を持っているのであれば、一夏もまた既に専用機を持っていなければおかしいのである。——無論、これには『政府直属機関である華撃団の一員』という総一本来の立ち位置も絡んでいるわけなのだが……。

「大神さんのことが発覚したのがいつかによっても変わってきますが……仮に、用意されるのに時間のズレが発生したとしても、それは『多少』と言える程度のズレでしかないはずですわ。掛かったとしても、精々が一日二日というところでしょう。——まあ、大神さんを比較対象にするのもおかしいのかもしれませんが……」

そんなことを言つて、セシリアはジトリとした目で総一へと視線を送る。確かに、と頷きながら一夏と箒もジト目で総一を見やった。なにせ今朝の驚愕は未だ記憶に新しい。……この男なら、と三人が思つてしまうのも無理はなかった。

そんな時だ。

「ビュービュー、聞きましたよ総一君。何でも今度の月曜にISで勝負するらしいじゃないですかあ？ 確かイギリスの代表候補生と例の男の子とのバトルロイヤルでしたっけ？ 流石『黒髪の貴公子』は入学早々やるのが違いますねえ」

まるで総一を助けるかのように、横合いからそんな声が掛けられた。

向き直る一同の眼に映ったのは人好きする笑顔を浮かべた女性である。美人と言っても差し支えはないだろう。年齢は二十歳はたちを超えたあたりか。身に着けているエプロンからIS学園のスタッフであることが分かる。

その姿に驚いたのは総一である。――聞いてない。彼女がここに
いるなんてこれっぽっちも聞いてない。

「なあ総一？ この美人さんお前の知り合いか？ ついでに『黒髪の貴公子』って何だよ？」

総一を肘で突きつつ訊く一夏。……しかし、当の総一は驚愕の表情で固まっております、答えられる状態にない。

「やだもう、美人なんて照れるじゃないですかあ。ま、それはともかく……私のことが気になるみたいね少年？ 問われたならば、
答えてあげるが世の情け。答えられる範囲でお答えしましょう！

あ、そっちの娘たちも質問があったらどうぞ？ と言うことでまず
名前はカグヤ・カプリス。お察しの通り、総一君の知り合いで……す
！ より正確に言うならば……愛人？ で、『黒髪の貴公子』って
のは欧州における総一君の通り名ね。同名映画の主演をやったこと
に由来します。ま、上映自体はただけど、前評判だけでかなりの
ものよ？」

一夏の言葉が聞こえたのだろう。当の女性本人が答えてきた。その
表情はコロコロと変わり、アクションの変化も激しい。……正しく
天真爛漫という言葉が似合うだろう。

「愛人だと!？」

「わたくしのことは説明無しですのね……。わたくしだって『蒼の
公女』ですのに……」

聞き捨てならない言葉に叫ぶ筈。共演し、ヒロインを演じたにも関わらず、自身のことが何も説明されずに落ち込むセリア。……始めのシリアスはどこへやら。場は一気に混沌カオスの様相を呈することとなった。

「……って、誰が愛人ですか誰が！ 人聞きの悪いことを言わないで下さいよ、カグヤさん！」

「そんなっ！？ 酷いわ総一君……。あの日、同じベッドで二人朝まで過ごしたことは無かったことにするというのはの！」

「おい、総一！ こんな美人さんを泣かせてんじゃねえよ！ 男なら、言い訳せずに責任を取れよ！」

驚愕から覚め、カグヤの言葉につっこむ総一。目の端に涙を浮かべ、よよよっ、と芝居がかった動作でくずおれるカグヤ。見事に騙され、総一に対して怒鳴る一夏。――未だ混沌は終わらない。

「そんな簡単に騙されないでくれ、一夏……。ああ、何だか頭が痛くなってきた……。まあそれはともかく、カグヤさん？ 俺はただ、敢えて誤解されるような言い回しをするのを止めて下さいと言ってるんですよ。『同じベッドで二人朝まで』を否定はしませんが、それだって俺が十にも満たない頃のことと、更に言えば、甘酒呑んで酔っぱらったあなたが俺を無理矢理引っ張り込んだんじゃないですか……。はね除けるにはね除けられなかった俺の苦痛をそんな風に弄るんだったら……。俺にも考えがありますよ？ フ、フフ、フフフ……」

頭を抑え、深い溜息をつき、諭すように言った総一は、最後に壊れたように嗤った。

血統かどうか分からないが、大神に連なる男子は基本的に女難で

ある。総一と星司も例外なく女難の気が強い。

それに関して、端からは『リア充』だのなんだの言われており、実際に女性との間で起こっていることなので総一と星司もそれを認めてはいる。――のだが、振り回されることが多い以上、どうしても女難として捉えてしまうのだ。

それでも『日本男児たる者、かくあるべし』と育てられた二人は、基本的に女性を尊重する傾向が強い。――しかし、それにも限度が存在するのである。

抑圧された感情はいずれ爆発するのが理だ。そして、総一がこのように嗤うのは、その導火線に火がついたことを意味していた。

以前総一を怒らせたときにどうなったのか。それをカグヤは情報として知っていた。

（マズ……ッ！ 弄りすぎちゃった……！）

故に焦る。

情報が真実かどうか興味がないわけではない。正直に言えば確かめたい。――しかし今は状況が悪い。

仮に情報が真実正しかった場合、ここで総一を怒らせるということとは、周りで昼食を食べているだけの、何の罪もない生徒たちを巻き込んでしまうということだ。……それはカグヤの望むことではない。

ならばどうするか。――考えるまでもなく答えが一つしかないことをカグヤは理解していた。

他の相手ならば分からないが、こと大神総一が相手である以上、解決方法は誠心誠意謝るしかない。

「ゴメンなさい、総一君。私が悪かったです。この通りです。……機嫌直してくれませんか？ お友達も困惑してますよ？」

見事に頭を下げられた上でチラリと上目遣いに見つめられては、総一としても怒りを抑えるしかなかった。――だが、ただ謝罪を受け入れるだけでは、また弄られる可能性が高い。……と言うより、まず間違ひなく弄られる。ことカグヤ・カプリスが相手である以上、この予測は絶対と言っていいだろう。

怒りを呑み込んだ総一は条件付きで謝罪を受け入れた。

「りょうかい……って言いたいところなんだけど、流石に今から作るとなれば時間も掛かるし出来合いのものでもかまわないかなあ？」
別に今すぐじゃなくていいって言うんなら時間合わせて作るけど？」

一夏、箒、セシリアの三人も出来合いのもので構わないと答えた。三人とも、これは降って湧いた幸運であり高望みするべきではない、と考えたためである。

「それで、仕事って何すんだ？ 休日とはともかく、基本的に敷地外へ出るのは禁止だろ？」

ちよつと待っててね、と小走りに駆けていったカグヤを見送り、一夏は総一へ訊ねる。……これは一夏が芸能方面に明るくないこともあるが、純粋な興味から出たセリフであった。

「ん？ 写真撮影。流石に仕事でも敷地外へは出られないから敷地内での撮影になるけどな。……これは聞いた話なんだが、仕事の話を持ちかけたらこの経営陣は二つ返事で頷いたらしい。まあ自慢じゃないが、俺の人気もかなりのものだからな。『撮影協力』ってことで振り込まれる金額を考えたら、まず間違いないと頷くだろう」

至極当然といった様子で総一は答える。

「そんなわけで、仕事後自室に帰ってからはともかく、その前に時間を取ることは難しい。それを踏まえた上でだが……一夏、お前はこれから勝負当日までの放課後、俺の仕事中はただ只管に剣を振れ。自分の身体の動かし方さえ分かっているれば、あとはISの方で合わせてくれる。そこに理論は必要ない。『瞬間加速』イグニッション・ブーストを例に挙げると、攻撃の過程にそれが必然として組み込まれているのならば出そうと思わずともISの方で発動してくれる、といった具合だ」

そこまで言ったところで、総一はひとまず言葉を切った。そして、聞き手たる一夏が言葉の意味を理解するのを待つ。

「言いたいことはわかったけどよ、だからって理論を学ぶ必要が無いってわけじゃないんだろ？」

「当然だ。理論は俺の仕事が終わった後で教えるさ。だけどお前の場合、肝心の機体が手元にないだろう？ それでどこまで理解できるか判断が付かないんだ。……ほら、よく『体育会系』とか『文化系』とか言うじゃないか？ それと同じだよ。『文武両道』のヤツもいるが、大抵の場合はどちらかに偏っているからな……。けどま

あ、見た感じお前は体育会系だと思うから剣を振ることを勧めてるのさ。実際に誰かと打ち合うなり想像上の相手と打ち合うなりやり方は任せるけど、ただ闇雲に振るだけじゃ無意味だからな？ 相手の動きに自分はどうか合わせるか、自分の動きに相手はどう返してくるか、ありとあらゆる状況を模索して振るんだ。それが集中力の増加にも繋がるし、視野の拡大にも繋がっていく。……ただ、これは諸刃の剣でもあることを言っておく。こういう事をしていた場合、本質が兵器であることも相俟ってISを道具として見かねないんだ。確かにそれも間違いじゃないが、今日の授業で教わったようにISは『意識』と呼んで差し支えないものを持っている。つまりは純然な道具じゃない。相棒^{パートナー}なんだ。ISを動かす際にはそのことを忘れるなよ？」

総一がこう言ったのには根拠がある。

そして、その根拠こそが霊子甲冑だ。

霊子甲冑の起動には強い霊力を必要とするが、実のところそれだけではスムーズに動かない。何故なら、霊力とは言わば『精神エネルギー』でありカタチを持たないからである。

故に、霊子甲冑には操縦者の負担を軽減させるために、この『カタチのない力』を『物理エネルギー』に変換する機関が組み込まれている。それを『霊子力エンジン』という。

この霊子力エンジンを形成する大きな要素が『霊子水晶』と『霊子反応基盤』——別名『霊力反応基盤』——である。

霊子甲冑の起動は三つの段階に分けられる。

第一に、操縦者の霊力を霊子水晶が物理エネルギーである『霊子力』に変換、増幅する。

第二に、霊子反応基盤によって霊子力を安定化させる。

第三に、この安定化した霊子力を霊子力エンジンが受け取っているのである。

この一連の流れを『霊子力循環システム』と称している。……も

し操縦者の霊力だけで霊子甲冑を動かそうとすれば、この一連の流れを操縦者だけで行わなければならず、相当の潜在能力が求められると同時に多大な負担が掛かってしまうのだ。

さて、霊子力循環システムの中で問題となるのが霊子水晶と霊子反応基盤である。

まず霊子水晶だが、文字通りに水晶なのである。これは偶然から発見されたものであり、その特性もあって数が少ない。人工的にも精製できるのだが、その効果は天然物には遠く及ばないのが実状である。

次に霊子反応基盤だ。一定以上の霊力がないと反応せず、霊子水晶が変換、増幅した霊子力を安定域まで持っていけないのだ。安定域まで持っていけないということは霊子力エンジンが起動しないということであり、つまりは霊子甲冑が起動しないということである。……霊子甲冑の起動には強い霊力が必要、というのはここから来ているのだ。

それだけでも問題なのに、これらは独特の『波長』を持っているのだ。——これには諸説あり、霊子水晶が持っているという説もあれば、霊子反応基盤が持っているという説もある。

そして、この波長を『心』と言い換えることもあり、これを重ね合わせなければ霊子甲冑は本来の力を発揮しないのである。

これこそが、総一の語った根拠である。

確かに霊子甲冑とISは別物だ。その設計思想も設計理念も異なっている。……だが、それでいて似ている部分が多いのだ。

現に、それを証明するかのような事も起こっている。……ISに初めて触れたときには自分を見つめる存在を、霊子甲冑に初めて触れたときには自分に呼び掛ける声を、総一は感じたのだ。

それこそがISと霊子甲冑の似て非なる部分であろう。『心』と『意識』、『声』と『視線』……確かに違うものである。そして同時に、純然たる道具には必要がない、という点で共通しているのだ。

「……なるほど」

総一の言葉にも一理ある、と一夏は思った。――全面的に正しいとは思わないが、それでも自分の場合として捉えるならば理に適っている。第一、あのサッパリわからない授業のことを鑑みれば、理論を学んだところで理解できるとは思えない。……ああ。確かに自分は体育会系だ。

「……そうだな。他の奴はどうか分からないけど、俺の場合はお前の言葉通りにするのが一番だと思う」

瞑目し、考えを纏めた一夏は頷いた。

「箒！ 放課後、時間は取れるか？」

「あ、ああ……。問題ない」

一夏の言葉に箒は頷いた。

昨日話したときには見えなかった真っ直ぐさが、炎が、今の一夏には見える。

これでこそだ、と箒は思った。

「……なるほど。織斑さんもまたサムライだったということですか……。フフ、大神さんにわたくしの舞を刻み込むことが出来ればそれでいいと思っていました……。考えが変わりました。織斑さん？ あなたにも私の舞と名前を刻み込んで差し上げます。――ですから、その返礼としてあなたもまた、あなたの武と名前を私に刻みつけてくださいませ」

微笑を浮かべ、セシリアが言った。

それは宣戦布告にして挑発だ。

バトルロイヤルをする事になったとはいえ、セシリアの目に敵として映っているのは総一だけであり、一夏は添え物でしかなかった。……それが、つい先刻までの嘘偽り無いセシリアの本音だ。

しかし一夏の言葉が、その身から発せられる気迫が、セシリアの考えを覆した。一夏もまた自分の敵として捉えるに相応しい相手である……と。

そして、敵には全力でぶつかるのが礼儀だ。

だからこそその宣戦布告。

同時に、自分の見立てが間違っていない証明が欲しい。それ故の挑発。

「ああ、見せてやるよ。未熟なことこの上ないが、それでも今の俺に出来る最高の剣をな……！」

「今度の勝負はあくまで試合であって死合デュエルじゃない。……なら、精一杯楽しんだ方が得策か。よし、期待に添えるかどうかは分からないが、俺の剣も披露させてもらおうでしょう」

「わたくしは剣を学んでいないので心苦しい気がしなくもないのですが、この国では『舞は武に通ず』という言葉があると聞き及んでおります。……ですから、わたくしは舞を披露させていただきませわ。どうか心ゆくまで楽しんでくださいませ」

三者の視線が交わり、見えない火花が宙に散る。

しかしそれも一瞬のこと。

「はーい、お待たせー」

届けられたデザートを前にしては、そんなことを続けたところで何の意味もなさない。

「まあそれはそれとして……」

「今はこれを片付けるのが先決」

「……だな」

「いただきます」

口々に言い、一同はカグヤの手作り菓子を頬張った。

幕間：真宮寺桜華 1

「……今、なんて言った？」

総一がIS学園に入学したその翌日のことである。夜遅く――深夜といっても差し支えない時刻に掛かってきた総一からの電話。その内容を聞いた桜華は普通に問い返した。

「だから、織斑一夏に剣を教えたことでもあるのか？」

どうやら聞き間違いではなかったらしい。――桜華は思わず溜息を吐いた。

「ああ、いや、言い換えよう。そもそも、織斑一夏とは一体誰だ？」

桜華の世界は非常に狭い。総一や加山を始めとした一部の例外を除き、一切の興味を持たないのだ。

有ろうが無かろうがどうでもいい。いてもいなくても構わない。それらの有無で桜華の世界に影響など出ないのだから……。

仕事上接する必要がある相手であっても、桜華にとっては記号でしかない。だからこそ、そんなモノに好意を抱くこともなければ嫌悪を抱くこともない。ただ与えられた仕事、言われたことを淡々とこなすだけだ。……それはさながら機械の如く。

しかし、だからこそ桜華の評価は高かった。何故なら、桜華の行動は確かに機械のそれであるが、真実機械ではない。感情も持っていれば、その表し方も分かっている人間なのだ。

喜び、哀しみ、怒りといった感情を、桜華は求められたとおりに表すことが出来る。……周囲に無関心だからこそ、逆に素直に表すことができるのだ。……それが真宮寺桜華という人物である。

そしてそれ故に、桜華がまともに認識していることなど数少ないのが実状だった。

たとえば『織斑一夏』が世界で一躍有名になろうとも、そんなのは桜華にとってどうでもいいことなのである。

「ああ。そうだな。お前はそういうヤツだった。……織斑一夏は護衛対象だ」

「……なるほどな」

言われてみれば、そんな名前だったような気がしなくもない。――多分に呆れを含んだ総一の言葉に、記憶を整理しつつ桜華は頷いた。

「それで？　どういった経緯で私がそいつに剣を教えたなんて素っ頓狂な話が出てきたんだ？」

桜華が問い返すのも至極当然である。

桜華はその無関心さも相俟って、自発的に動くことが少ない。

それでも、自分の世界に関わることなら寧ろ積極的に動くし、請われた場合も素直に聞くだろう。

前者の場合ならまず忘れることなどないし、後者の場合でも事実の有無くらいは覚えている。

しかし、今回の総一の話はどちらにも該当しないのだ。

「そうか……。いや、実は今日の朝、彼と剣を合わせたんだ。……最初の内はそうでもなかった。軽い挑発に乗って乱れるほどに、彼の剣は軽かった。暫く打ち合ってもう充分かと思った。それでも『もしかして』という思いが拭えなかったから理由を思い出すように促してみたんだ。……そしたらまあ、激変したよ。まさしく雲泥の差だった。思いがけず昂揚したよ。……しかし、本当に驚いたのは

その後だ。彼の剣によく見知った流れが見えたんだからな……。そう
うだ。桜華、お前の剣だよ」

いや、あの時は本当に焦ったよ。——そう言つて総一は言葉を切つた。

そう言われれば、桜華としても興味を惹かれる。……なにせ、他の誰でもなく大神総一が断言しているのだ。

「そいつの顔写真とかはあるのか？」

「俺は持っていないな。それに時間も時間だ。これから写メを撮って送るにしても、鮮明とはいえないものになるだろうから……。寧ろ加山に頼んだ方が確実だと思うぞ？」

「……そうか。なら、加山に頼んでみることにしよう」

「それがいいさ。それじゃ、お休み。夜遅くにすまなかった」

「気にするな。私としてもお前の話は興味深かったからな……。お休み」

電話を切り、桜華は横になる。……その顔は知らずの内に笑みを浮かべていた。



「待たせたな、桜華。……これが、今朝方頼まれた織斑一夏に関する資料だ」

「すまん。手間を掛けさせた」

お昼のことである。所属事務所『浪漫の嵐』の食堂にて昼食を取っていた桜華の前に、いくつかの封筒を持った加山が現れた。見れば、封筒にはそれぞれ名前が書いており、どうやら本人だけでなくその関係者の資料も持ってきたようである。

これは素直にありがたかった。一方向からでは分からないことも、多方向から見ることとで分かることがあるのは確かな事実である。

加山の配慮に、桜華は素直に礼を告げた。

「いいってことよ。……だが正直な話、一体どうしたんだ？　こう言っちゃあ何だが、お前が他人に興味を示すなんて相当だろう？」
「昨夜、総一から電話があってな……。その時に言っていたんだが、そいつの剣に私の剣が見えたらしい。しかし、生憎とこちらには覚えがない。だが、他ならぬ総一が言ってるんだ。……気のせいと聞き流すには、些か問題があるだろう？」

「むう……。そいつあ確かに……」

加山が唸るのを眺めながら、桜華はおもむろに封筒の中から資料を取り出す。

「ああ。ちょい待った。一応、機密書類も入ってるんで……。ここで取り出されると問題がある。部屋に帰った後にでもゆっくりと調べてくれ」

——取り出そうとした。

「ふむ。確かに」

加山の言っていることは尤でもある。これはあくまで華撃団の有する資料だ。また、いかに『浪漫の嵐』がその隠れ蓑であったとしても、当然ながら関係者ばかりで運営されているわけではない。華撃団には関わりのない、その存在すら知らぬ一般人も務めているのだ。

そしてここは食堂である。一般人の目というならば、ここほど触れそうな場所もない。

「では、私は部屋に戻る。何か思い出したら連絡するよ」

「おう。……ってもまあ、気のせいですめばそれが一番楽なんだがな」

「違うない」

資料を脇に抱え、食器を返却口に戻して、桜華は自室へと向かう。
……その足取りは、存外軽いものだった。



「こいつが織斑一夏……か。確かに見覚えがあるような気もするが、これだけだとな……」

部屋に戻った桜華は、早速資料を取りだした。そして、まずは添付された写真に目を向ける。……しかし、その結果は芳しいものではなかった。

まあ、それも当然である。桜華が気に留めていなかっただけで、織斑一夏の姿はニュースや新聞を始めとした様々な媒体で流れたのだ。……視界に映る回数が多ければ、その分だけ記憶に留まるのも必然である。

写真から記憶を洗うのには見切りをつけ、桜華は記された情報に目を通す。

出身、経歴、家族関係、交友関係……一通り読み進めてみたものの、やはり記憶に引っ掛かるものはない。

しかし、備考欄に気になる一文を桜華は見付けた。

何でも『二年前のある時期を境に、公園などで素振りをする一夏の姿が度々見かけられるようになった』らしい。……ここがポイントだろう。それまでと異なる行動を取り始めたということは、その『ある時期』に何かがあったことを示している。

華撃団で用いる資料形式の場合、備考欄には噂から何か取り留めのないことも記載するのが通例だ。文字通りの備考であって、その信憑性はハッキリ言えばアテにならない。

だが、今回ばかりは別だろう。少なくとも『剣』という部分で総一の言葉と合致する。

「チッ……」

桜華は思わず舌打ちする。……幾つかのキーワードは見つかったが、肝心の部分が分からないのだ。

「仕方ない、と言えば仕方ないのかもしれないが……」

深呼吸をして幾らか気分を落ち着けた後、桜華は呟いた。――そして思考する。

なにせ織斑一夏は極々普通の一般人だったのだ。……自然、これらの情報の大半は一躍有名になってから掻き集めただろうことを意味している。いくら姉や交友関係者が有名人だとて、当時の織斑一夏本人はその限りではないのだ。それでも、有名人の関係者だからこそこの短時間でここまで情報が集まっているのだろう。……また、この備考欄に書いてあることからして、そもそも転載の可能性が高い。いくら何でも、今から二年前の噂を集めるなど不可能に近いからだ。

「そうか、転載か……!」

思考を重ねた末その可能性に思い至った桜華は、すぐさま別の資料に目を通す。

果たして、姉である織斑千冬の資料にも気になる情報を見付けた。

「第二回 I S 世界大会『モンド・グロッソ』決勝戦を突然辞退。その後、ドイツ軍で教官を務める……か」

突然の辞退だけならば、考えられる可能性は様々にある。……しかし、誰もが辞退の理由を知らず、それでいて唐突にドイツ軍で教官を務めるとあらば、『何かあった』と声高に叫んでいるようなものだ。

そして、桜華は『モンド・グロッソ』の時期と、ある事件の時期が重なっていることに思い至った。

「加山か！ 二年前、私が遭遇した『騎士団^{ナイツ}』に関する資料を持ってきてくれ！ 時期は I S の『モンド・グロッソ』辺りだ！ もしかしたらもしかするぞ……！」

すぐさま加山に連絡を入れる。

「……！？ 了解した！」

桜華の勢いに吞まれたのか、電話に出た加山は最初こそ絶句していた。しかし、すぐさまその意味に気付いたのだろう。それだけを言って通話を切った。

それから暫し。桜華の部屋のドアがノックされた。

「入ってくれ」

「失礼する。……すまない。思いの外時間が掛かった」

入室するなり謝罪してきた加山に対し、気にするな、と桜華は座るように促した。……確かに時間は掛かったが、それでも突然の要請に対するものとしては充分に早い。

桜華は加山の持ってきた資料を受け取るも、それをすぐには取り

出さない。

それに目を通すよりも先に、そうなるに至った経緯を説明するべき、と考えたためである。

すぐに確認したい気持ちも確かにあるが、飛躍しすぎている可能性も否めないのだ。

それならば、加山にも意見を伺った方が良い。『隠密・諜報部隊』である『月組』の隊長を務めていることもあって、加山は情報の扱いに慎重だ。

「私が気に掛かったのは……このこと、ここだ」

桜華の指した部分に加山は目を向ける。

「これは……。すまない。もう少し待っていてくれ。俺も思い出したことがある」

言うなり、加山は退室した。……それを怪訝に思いながらも、桜華には待つことしかできない。

そして、再度ドアがノックされる。

促せば、また別の資料を持った加山が入ってきた。

「それは？」

「『森羅』に関する資料だ」

桜華の問いに重々しく加山が答える。

「おいおい……。まさか『騎士団』だけじゃなく『森羅』まで関わってるって言うのか？」

頭を抑えて桜華が呻く。

世界規模で活動している秘密結社。……それが『騎士団』と『森羅』である。

その目的が一切不明なこと、そして隠匿性が非常に高い点で両者は共通していた。……しかし、両者は別に仲間というわけではなく、時に協力し時に敵対している関係だ。

「直接関係しているかどうかまでは分からん。……あった。ここだ」
「なにに……。未確証。ドイツ。某月某日、議会にて投棄されたはずの案件が正式な認可を受けて施行されていることが発覚。認可書類には強く反対していたA氏——安全のため実名記入を避ける——のサインもあった。しかし、A氏にはサインした覚えなどなく『森羅』の『言霊使い』によるものとみられる。後日調査をしたが、『森羅』が関与した形跡は何一つとして発見できなかった。……つておい、これ十年以上前のことじゃないか。今回のことに関係あるのか？」

加山の指した部分を読み進めた桜華は、胡乱氣に問い返した。

「それだけなら何とも言えんが、こっちも加えればどうだ？」

次に加山が示したのは千冬の資料であった。……より詳しく言うならば、千冬が教官を務めた部隊に関する資料である。

「……なるほどな」

桜華は加山の言葉に同意した。二つの資料が重なったのである。

「いつのまにか施行された『人造兵士生産計画』。それによって生まれた兵士が、今度は十年以上の時を経て『織斑千冬』の教導を受ける……。か。フン、出来すぎにも程がある。そして——」

「な……!？」

桜華は驚きつつも、遮二無二その一撃を回避した。

アイドルという仕事をしていれば、性質の悪いストーカーに出会うこともある。……故に、街中で飛びかかれるだけならば——珍しいと言えば珍しいが——桜華には経験があった。

しかし、流石にこれは初めてだった。

飛びかかる間にも、男を包むように鎧が形成されたのだ。世を騒がせているISとも違う。……どちらかと言えば霊子甲冑に近い。

「何だお前は？　ついでに言うとその鎧は？」

即座に身を起こした桜華は、いつでも抜き放てるように刀を構え、油断無く問い掛ける。

「ハ、流石だな。本気じゃなかったとはいえ、今の一撃をよく躲したもんだ。……とは言え、確かに今の行いは俺に非がある。すまなかったな。気の乗らねえ仕事でムカついてたところだったんだ」

男は桜華に賞賛を浴びせ、直後に謝罪した。……頭を下げることはしなかったが。

「では、名乗らせてもらおう。俺は『騎士団』が一人、ゲイル。『虚鎧』、『シルフィード』を纏いし……疾風だ！」

言うなり、男——ゲイルは再度桜華へと向かう。その手には刺突^{ピア}剣。『疾風』を称するのは伊達でないということか、その速度は先程よりも尚速い。

「チッ……!」

桜華は舌打ちし、跳躍。この速度を前にしては、たとえ相手の刺突剣を弾くことが出来てもはねられてしまう。

「良い判断だ！……だが、甘えっ！」

並外れた速度だというのに、ゲイルもまた即座に跳躍。勢いのままに蹴撃を放つ。……その姿には、何ら負荷をおった様子が見られない。

「が……っ!？」

桜華は愛刀『荒鷹』で直撃を防いだものの、如何ともし難く吹き飛ばされる。

「チッ……。やりすぎちゃったか……？」

それを見て、ゲイルは落胆したように舌打ちする。

「うお……っ!？」

——その直後、走る斬撃にはね飛ばされた。

「ってゝな、おい！ 一体何だってんだ……？」

ゲイルは首を傾げる。——確かにあの斬撃は払った。……しかし、刃が素通りしてしまったのだ。

「破邪剣征・桜花放神。自らの狙ったものにだけ威力を伝える、『破邪の剣』の初伝だ。……少なくとも、これが出来なきゃ『靈剣・

荒鷹』に認められることはない。……情報不足だったな？」

言いつつ現れたのは桜華だ。服は所々破け、血も流れているが、その足取りはしっかりしている。

「さて、許可は下りた。……お前が虚鎧とやらを纏うなら、こちらも纏わせてもらうとするさ。霊子甲冑をなあっ！」

時代の流れと共に進展する技術は、過たず霊子甲冑にも適用されている。その中でもISに用いられている量子格納技術は特に大きい。流石にそれそのものはISコアに組み込まれているので用いられていないが、着眼点として多大な恩恵をもたらしたのだ。

ISを独自の力で開発した篠ノ之束は確かに天才である。

彼女に比べれば、華撃団の整備陣・開発陣は劣っているだろう。……しかし、個人としては劣っていても、総体としては決して劣っているわけではない。

それがここに証明される。

桜華の咆哮に答えるかの如く、足を、腕を、そして頭部を……身体全体を光が包む。それは徐々に薄まり、完全に光が消えたとき、彼女の全身は桜色の鎧に覆われていた。

「さあ、戦ろうか？ 先刻までのように楽にいくとは思うなよ？」

「フン……上等だ！」

時に地面を、時に壁を、時には中空さえもを足場にして二人は打ち合いながら移動する。

「おい！ お前……どうして手を抜いている？」

打ち合いながら、桜華は問い掛ける。……桜華はそう言うが、ゲ

イルの刺突はまさに閃光の如しだ。端からはとても手を抜いているようには見受けられない。

しかし、桜華の言葉は正しかった。……ゲイルは特段、攻防に手を抜いているわけではない。それでも、その意識はこの戦闘だけに向いているわけではなかった。

必倒の意志がない。必殺の意志がない。……それは、手を抜いているのと同義である。

「言っただろ？ 気の乗らねえ仕事でムカついてたつてよ。……『騎士』ってのは忠誠誓ってナンボのもんだが、それだけじゃねえ。民を、力持たぬ弱き者を護ることもその本分だ。上が何を考えてやるのかは知らねえが、今回の仕事はその弱者を巻き込むことだ。……それが俺には我慢ならねえ。だが、諫めの言葉も届かねえ。こうなっちまうと、立場上、俺自身にはどうすることも出来ん。……出来んが、だったらどうにか出来るヤツを放り込みゃあ良いだけの話だ」

「……なるほど。つまり、私はお前の怒りの捌け口にされたと同時に厄介事を押し付けられるわけだ。まったく面倒な……。だが、まあ良いだろう。お前みたいなヤツは嫌いじゃない」

「助かるぜ。……これからお前を飛ばす。あとは上手いこと頼んだぜ？」

剣を打ち合いながらの、その会話。『騎士団』と『華撃団』という、本来ならば敵対関係にある者同士の会話として、それは奇妙な会話だった。

この短時間で友情など生まれるはずがない。信頼など出来るはずがない。……それでも、互いが互いにそういったモノを感じていることは事実だった。

「いくぜ！」

「ああ」

ゲイルの蹴撃を足場に、桜華はその建物へと突撃。
そして中にいたヤツらを片付けて――――



「―――ああ。思い出した。そうか、あの時の少年か……」

「……と、言うことは？」

「そうだ。二年前の『騎士団』事件の際、幽閉されていたのが織斑一夏だ」

「分かった。この件は俺から司令に報告しておく」

加山を見送りながら、桜華は決めた。

「明日……は無理だから明後日か。織斑一夏に会いに行ってみるでしょう」

眩き、桜華は惰眠を貪ることにした。



「すまないが、織斑一夏君……であってるかな？」

IS学園へと赴いた桜華は、その生徒へと問い掛けた。

「はあ……？ 確かに俺は織斑一夏ですけど……」

返事は肯定。……それを確認した桜華は話を進める。

「総一から話を聞いてね。もしよければ、これから手合わせしてくれないか? ……ああ。自己紹介がまだだったな。私は真宮寺桜華という」

「ああ……! 聞いてます、聞いてます! 何でも北辰一刀流の免許皆伝だとか!?!」

「ははっ、君は面白いな。真っ先に出てくるのがそっちか。大抵の場合、仕事の方で驚かれるんだが……。まあそれはともかく。都合はつくかな?」

「ええ、大丈夫です。いつも手合わせをお願いしてるヤツが部活に強制招聘されてしまったんで、正直どうしようかと思ってたんですよ。……手頃な場所に案内するんでついてきて下さい」

一夏の後を桜華は追う。……道中、特に会話らしい会話もない。



「そら、どうした? どこから打ち込んできて構わないぞ?」

実に気楽に桜華は言う。その立ち姿はまさにぞんざい。構えらしい構えも取っていない。

その一方で、一夏はまったく動けない。動く様子がない。……動きたくても動けないのだ。

目が霞む。冷や汗が止まらない。歯がカチカチと音を鳴らす。

そう、桜華の放つ殺氣に一夏は完全に吞まれていた。

これには桜華の気性も関係している。

基本的に桜華の戦闘は殺るか殺られるかだ。剣を執る理由が理由なのだから、こればかりはどうしようもない。

仲間内で手合わせをする際にはその限りでないが、基本的には殺気全開である。

「ああ、そうか……。これならどうだ？」

その事実には、桜華自身ようやく思い至ったのだろう。

仲間の中でもデキない方に分類される相手との手合わせを思い出しながら、桜華は静かに殺気を弱める。……消すのではなく弱めるのがポイントだ。完全に消してしまえば、耐性がつくことも無いからである。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

地面にへたり込み、一夏は荒く息を吐く。――まだ若干息苦しいけど、今のに比べたら万倍マシだ。

「はあ……はあ……いま……のは？」

呼吸を繰り返して、ある程度落ち着いてから一夏は訊ねる。――生きた心地が、まったくしなかった。

「すまないな。つい、いつものように殺気を全開にしてしまった」

「そう……か……いま……のが……」

その返答を聞いて、一夏は納得した。――箒との手合わせとは違う。総一と手合わせしたときよりもなお空気が重苦しかった。今のが殺気だというのなら、それも当たり前か……。

「どうする？ 止めておくか？」

「いや、続ける。さっきの殺気に慣れさせてくれ……」

「……分かった」

自身では面白いことを言っただけだが、どうやら外してしまっ

たらしい。——呆れたように頷く桜華を見て、一夏は思った。

それからは、ただ時間だけが過ぎていく。

時折、遠くから部活のものと思しき喧騒が聞こえてくる。

場面だけを見れば、実に長閑な一刻だ。

しかし、その実態はまるで違った。

一夏を見ればそれが明らかである。その冷や汗は、治まるどころかゆっくりと勢いを増していく。

そう、一夏はまるで殺気に慣れていなかった。

だが、それは一夏の問題ではない。様子を見つつ、桜華が徐々に殺気を増しているからである。

桜華自身このようなまどろっこしいやり方など好みではないが、出来ないわけでもないのだ。……ならばやらない理由など無い。

戦闘という御馳走を頂くための事前準備だと思えば、この程度はまるで苦にならないのである。

そして——

「すみません。待たせました」

——自身でも知らぬ間に、一夏は桜華の殺気に完全に慣れてしまっていた。

それは、普通には考えられないほどである。

慣れるまでの異常な速度。……一夏の異常性を指し示す一端であった。

「もう慣れたのか……？ まったく……。私も大概イカレてるが、お前も負けず劣らずだ」

その事実、桜華にも呆れをもたらす程であった。

「来い……！」

今度こそしっかりと構え、桜華は言い放った。

「いきます……！」

それに応え、一夏が駆ける。

打ち合う音だけが響く。

一夏の攻撃は、一度たりとも桜華に届かない。その全てが或いは躲され、或いは防がれている。

距離が離れ、間をおかずに一夏は駆ける。

そして――

「ぐう……っ！」

「え……？」

――桜華の苦悶と、一夏の呆けた声が重なった。……何のことはない。端的に事実を示すなら、単に桜華が無防備に一夏の一撃を受けただけのことである。

「え……？　なん、で……？」

一夏は現実を認識できない。したくない。

「宿題だよ」

「しゅく、だい……？」

「剣を続けるつもりなら、この恐怖を乗り越えろ。……分かったか？」

「……………分かった」

かなりの時間をおいて、一夏はようやくそれだけを口にした。

「それじゃあ、またな。……ああ、そうそう。今の一撃、実に良かった」

そう言っ
て桜華は去った。……呆ける一夏をその場に残して。

第5話

「俺……不戦敗になるのかな？」

観客席から試合会場たるアリーナを眺めつつ、一夏は隣に立つ筈へと訊ねた。――アリーナには、既に総一とセシリアの姿がある。本来ならば、自分ももうそこに立っていておかしくない時間なのだ。

「……それを私に聞かれても答えようがない。それでも答えるとするれば……このままだとそうなるだろうな」

「やっぱりか……」

一夏は深い溜息をついた。

決して長いとは言えない今までの人生だが、それでも、決して短いとも言えない人生だ。

その中で日々を過ごすうちに、諦めることには慣れてきたつもりだった。どれだけ望もうとも、叶わないこと届かないことは必ずある。……今、自分がIS学園こくにいるのもそうだ。

今でも思い出せる。『男なのにISを動かせた。だからIS学園に通え』……お偉いさんの遣いでやって来た黒服が自分に告げた言葉だ。言っていること、言葉の陰に隠されていることはそれとなく分かった。それでも自分は藍越学園に通いたかったし、実際にそのことを告げた。

だが願いは叶わず、届かず、自分はIS学園に通うことになった。だから、諦めること、流されることには慣れているつもりだった。それでも――――

「――――今回だけは諦めきれない。流されてたまるかよ……！」

言って、一夏は歯を噛み鳴らした。

「お前の気持ちはわかる——とは言えない。私はお前ではないからな」

一端言葉を切り、箒は一夏を見つめた。
鋭い、真摯な瞳だ。

「それでも、想像することは出来る。確かに苦しいだろう、辛いだろう。だが、一体何が出来る？ 間もなく試合が始まるというこの状況下にあってまだ！ お前のISは届いていないんだぞ……」

始めは淡々と、次第に勢いが上がり、最後には俯き声を震わせた。
泣いているのか……。——一夏は察し、思う。

試合のことが決まってから今日まで、箒は嫌がる様子も見せず自分の稽古に付き合ってくれた。部活の先輩からのお達しで相手が出来ない日もあったが、その日以外は毎日付き合ってくれたのだ。

確かに箒は試合に出るわけではないが、ここまで付き合ってもらった以上、当事者と何ら変わらない。……現に今、織斑^{おれ}一夏の事なのに、我が事のように悲しんでくれているのだ。

この姿を前にして、それでも俺は諦めるというのか？ 流されるというのか？ ——そんなこと、出来るわけがないだろうが……！

こうして嘆いているのは何故だ？ ——試合に出られないからだ。何故出られない？ ——専用機が届いていないからだ。

そもそも、試合に出るのに専用機が必要なのか？ ——否だ。試合に出るだけならば量産機で充分だ。

ではどうして量産機で出ない？ ——データが取れないからだ。この上なく不利になるからだ。

それを織斑一夏が気にする必要があるのか？ ——無いな。不利は元々だし、データなんぞ知った事じゃない。

ではどうする？　――出る！

結論は出た。……ならば、ここでこうしている必要はない。

「箒、征ってくる。応援、頼むな？」

「……え？」

箒は呆けた声を出して顔を上げる。

既に一夏の姿は隣になかった。

徐々に遠ざかっていく背中が映った。

その背に声を掛けることも出来なかった。

箒に出来たのは、呆然と見送ることだけだった。



「……すみません、織斑くん。もう一度言って貰えますか？」

「打鉄で出ます」

山田真耶の困惑は深まった。どうやら聞き間違いではなかったらしい。

「いや、あの、織斑くん？　打鉄で出ると言っても申請はしているのでしょうか？　突然そんなことを言われても許可できないとか……。寧ろ私の一存では何とも言えないというか……」

「そんなことは関係ありません。今日、試合を行うと決めたのもそちらですし、自分に専用機を用意すると言ったのもそちらです。そして、各自試合に向けて準備をしておけ、とも言われました。だからと言うわけではありませんが、自分はISを持たないなりに今日の試合に向けて訓練をしてきました。……それが、いざ試合当日になってみれば、まだ来ていない？　巫山戯てるんですか？」

しどろもどろの真耶に対し、一夏は淡々と告げる。

普段の一夏からは考えられないその口調が、一夏の怒りを表しているかのようだった。

「総一もセシリアも、俺との勝負を楽しみにしているって言うてくれたんです！ 俺もまた、俺の剣で答えてやるって返したんです！……確かに俺は今まで何度となく諦めてきたし、流されてきました。それは否定しません。けど、だからって、今回の勝負まで諦めるわけにはいかないんです！ だけど、専用機はまだ来ていない。……だから打鉄で出ると言うてゐるんです。申請についてはそちらで手を回してください。全部が全部とは言いませんが、この状況は明らかにそちらの落ち度なんですから、そのくらいはしてもらいます」

真耶はほとほと困ってしまった。セリフからも様子からも、一夏は撤回する気がないと理解できるのだ。

それだけでなく、真一文字に結ばれた唇と、真っ直ぐに見つめてくるその瞳が、普段の一夏とはまた別の格好良さを醸し出しており、真耶の心拍数を上昇させてならないのだ。

確かに言っていることは分かる。人情的に見ても論理的に見ても、一夏の言っていることは間違っているわけではないのだ。

けれど、自分に決定権はないのだ。だからどうしようも出来ないのだ。

（————って言えたらいいんですけどね……）

真耶は深い溜息をついた。——分かっているのだ。そんなのは所詮建前であり、言い訳でしかないことは……。

「……わかりました。打鉄を用意します。ただし、出るのは時間ギリギリまで待って下さい。現在、織斑先生が状況確認も込めて先方

に向かっています。もしかしたら間に合うかもしれません」

それは儚い希望だった。既に開始時刻まで十分を切っている。これで間に合ったとしたら、一体どんな奇跡だということのか……。

そう思うと同時に知っていた。――奇跡を起こすのはいつだってヒトである、ということ……。

「わかりました。ギリギリまで待ちます。……それと山田先生、我が儘を言ってますみません」

「いえ、いいんですよ。生徒の願いを出来るだけ叶えるのも、先生の役目ですからね」

ポツリと付け足された一夏の謝罪に、真耶は満面の笑みで答えたのだった。



「織斑さんは大丈夫でしょうか……」

アリーナに立ち、セシリアはポツリと呟いた。

間もなく試合が始まる。まだいくらか時間に余裕はあるが、普通なら既に姿を現していてもおかしくはない。――しかし、未だ一夏の姿はない。出てくる様子も見受けられない。

セシリアの胸に不安が募る。

「心配することはない。一夏は来るさ、必ずな……」

それを吹き飛ばすかのように総一が言った。顔には笑みを浮かべており、不安な様子は微塵もない。――普通なら見えもしないし聞こえもしない距離であるが、ISのハイパーセンサーがそれを可能

としていた。

「こうと決めたらどこまでも突っ走る、一夏はそんな熱いヤツだ。そしてあの日、俺たちは約束をした。……ならば、アイツがそれに答えないはずがない。たとえ専用機が無くとも、量産機で出てくるだろうさ」

「そうでしたわね……。織斑さんもまた、あなたと同じくサムライなのでした。フフ、これは彼に失礼をしてしまいましたわね」

不安は去った。

ならば、あとは時が来るまで適度な緊張を維持すればいい。

（さあ、早くおいでくださいな織斑さん）

（早く来い、一夏……!）

両者の胸の内では炎が猛った。



——時は遡る。

「ちょっとアンタたち、今なんて言った！ 何をやった！」

とある街道にて、金髪青眼の少女が吼えていた。怒っているためにその瞳はつり上がっているが、それでも目を惹く美少女であることに変わらない。

その隣には一人の少女。そして少女たちの前には数人からなる男たち。

少女は俯き、自らの頬に手を当てている。一方の男たちは下卑た笑みを浮かべている。……状況を推察するのはそう難しいことでは

なかった。

「あん？　なんだテメエ？　……まあいいや。今何をやったか、だったな？　こうしたんだよっ！」

言うと同時に、その拳を振り抜く男。

拳速。そしてタイミング。そのどちらを取っても防げるタイミングではない。

「耳が聞こえないの？　私は何て言ったのかも訊いたはずだけど？」

———相手が普通の少女であったのなら。……男の繰り出した拳は、物の見事に逸らされていた。そこに、ムダな力は一切込められていない。

「情状酌量の余地もあるかと思ったら、いきなりコレか……。ま、事情を確認するのは一人起きてれば充分だし、他のヤツらは……。取り敢えず寝てなさい」

深い溜息を吐いて、金髪の少女はそう言った。——それと同時にその姿が消えた。……少なくとも、もう一人の少女と男たちにはそうとしか認識できなかった。

「ガ……ッ！？」

「ゲエ……ッ！？」

「ゲエ……ッ！？」

そして次から次へと奇声を上げて倒れ伏す男たち。

ここまでくれば殴りかかった男にも分かった。——自分は『決して手を出してはならない相手に手を出してしまった』ことが……。

「な、なんなんだよ、テメエは!？」

残った男は勢いよく叫ぶ。——しかしその声音は振るえており、恐怖に囚われているのが明白だった。

「……なんだ。知ってて言ってるのかと思ったけど、本当に知らなかったんだ……。私の知名度もまだまってることか……」

男の言葉に感じるところがあったのか、金髪の少女はその動きを止める。そして呆気に取りれた表情を浮かべたかと思えば、次の瞬間には目に見えて分かるほどに落ち込んだ。

少女がそうなるのも無理はなかった。少女の名はリリィ・シャトーブリアン。芸能界において押しも押されぬ人気アイドルグループである『BLOSSOM』の一員なのだから……。

「ま、私のことはどうでもいいわ……。アンタはただ、こうなった経緯を話さない。——あなたもいいわね?」

だがそれも一瞬のことで、リリィはすぐさま立ち直り冷徹な瞳で男に告げた。——かと思えば、少女の方には打って変わった優しい面持ちで訊ねる。

「わ、わかった……」

「……はい」

男と少女は——理由を異にするにせよ——どちらもが弱々しく頷いた。

「……なるほどね。——アンタが悪い!」

理由を聞いたリリイはウンウンと頷いた後、ビシリと男を指さした。

「確かに昨今の世の中はどうかと思う。仕事をクビにされたアンタにも同情する。……けど、それとこの娘は関係ないでしょうが。ムシクシヤして当たり散らしたい気持ちは分かるけどね。文句があるんなら、アンタをクビにしたその会社の上司に言いなさい。……そのための手助けならしてあげるわ」

サバサバとした態度でリリイは言う。そこには先程までの怒りもない。

「手助けって……どういことだよ？」

呆氣に取られたのは男の方である。女尊男卑の昨今、何かあれば『男が悪い』で定着しているのだ。

現にこの男とて、女上司のミスによってクビにされたのだ。ただ『同じ仕事についていた』というそれだけの理由で……。

だというのに、この金髪少女は——全てではないにせよ——自分の言い分を認めてくれたのだ。

「一言で言うなら仕事を紹介してあげる。コレを持ってその住所に行きなさい。正式採用されるかどうかまでは保証できないけど、試用だけならしてもらえるわ」

リリイはサラサラとペンを走らせ、何事かを書いた名刺を男に渡した。……それも人数分だ。

「そこは実力主義だから男も女も関係ないわ。自分の実力を認めて

くれるところで頑張って、そうして見返した方が暴力に頼るよりもよっぽど気持ちいいでしょ？」

そう言ってリリイは微笑んだ。

「すまねえ……ありがとう嬢ちゃん。——あんたも、あたっちまうてすまなかった。謝ってどうにかなることじゃねえが、この通りだ」

それに感極まったのは男である。涙と鼻水で顔をクシャクシャにしながらリリイに謝罪と感謝を告げ、殴ってしまったもう一人の少女には土下座をして謝罪した。

「……頭を上げてください。そういった事情があるなら仕方ないとも思いますし、私も不注意だった部分がありますから……」

「すまねえ。……俺に出来ることがあったら言ってくれ。誠心誠意、詫びさせてもらうつもりだ」

「……だったら、食事の際はうちを利用してください。『五反田食堂』って食堂やってますから」

「五反田食堂、だな。わかった。飯ん時はそこを利用させてもらうぜ。……本当、すまなかったな。——オラ、立ってお前たち。これから履歴書買いに行くぞ……！」

こうして一応の決着がついた。——そして計り知れない拍手と歓声が包み込んだ。

繰り返すがここは街道であり、いざこざを起こしていたのは人気アイドルである。

短時間ですめばこうはならなかっただろうが、実際には事情確認やら何やらで結構な時間が経っている。

それだけの要素が組み合わされば——そして『お涙頂戴の人情劇』みたいなやり取りだったことも合わせれば——こうなっても別にお

かしくなかった。

「いやー、良かったですねえ主任」

「……だな。久々に人の素晴らしさを見た気がするよ」

「——って、主任！ 時間！ ヤバイですよ、時間！」

「時間？ うお！？ 忘れてた。急ぐぞ！」

——だが、それによって別の問題が生じてしまった。……コントのようなやり取りをしているこの二人は倉持技研の技術者である。

両者は織斑一夏の専用機『白式』をIS学園へと運搬している最中であつた。

その途上、何の変哲もないところで人垣が出来ているのを発見した二人は、早めに出たため時間に余裕があつたことも相俟って、興味本位の野次馬と化したのだ。

それでもすぐに発てば問題なかったのだろうが、決着がつくまで見入ってしまったのである。

そんなことをしていれば、時間の余裕がなくなるのも当然であつた。

「ねえ、おじさんたち、どうかしたの？」

そこに件の金髪少女が話し掛けてきた。食堂の娘とは離れたらしく一人である。

「ああ、いや……」

どうかしたの、と問われても男たちは答えられない。見物に興じてしまったのは自分たちだからだ。

「あれ？　もしかして……おじさんたちって倉持技研の人？」
「あ、ああ。そうだが？」

いきなり職場を当てられ、男たちは戸惑いながらも肯定する。…
…こんなことをしている間にさっさと出発すればいいのだが、焦って気が回らないらしい。

「じゃあ、荷物って織斑一夏の専用機？」
「……………ッ!？」

続けての言葉に男たちは言葉を失った。

何故それを知っている？　いや、たとえ知らないとしても、どうしてその質問を提示することが出来る？　この少女は一体何者だ？

——織斑一夏に関する情報の扱いは慎重に慎重を重ねている。…
…その事実を知っている二人は自然と身を堅くした。

「倉持の人。それも織斑一夏に関わる人なら分かるよね？　コレの意味」

しかし、それも長続きはしなかった。

リリイが示した物は華を模ったバッジだ。その中央に『花』の文字が刻まれている。——二人はその持つ意味を理解してはいない。ただ、そういった紋章を持つ組織が織斑一夏の護衛に当たっている、としか説明を受けていないからである。

それでも、大局的に見れば少女が味方であることは分かる。そしてそれさえ分かれば、この二人には特に問題などなかったのである。

「手伝ってあげるよ。私にも責任が無い訳じゃないしね」

「手伝うと言われても、もう時間が……」

「あーもう！　だ・か・ら・手伝うって言ってんのよ！　騙された

！
「！
と思つて、取り敢えず人目につかないところまで車を走らせなさい」

言葉の意味は分からないが、それでも二人は少女に従うことを選
択した。……リリーの剣幕を男たちが恐れたためであり、男たちが
藁にも縋りたかつたためである。

そして――

「……信じられない」

――主任は思わず呟いた。眼に映る景色が信じられない。I
S学園が映っているのである。それも、目前とは言わないが残り時
間から鑑みても充分に間に合う距離にいるのだ。

何が起こつたのかも分からない。少女の言うままに車を走らせ、
停め、目を瞑り、再び目を開けたらここにいたのだ。

「ほら、呆けている暇なんてないでしょ？ 急がないと本当に間に
合わないよ？」

促され、車を動かす。――ああ、確かにその通りだ。自分たちは
技術屋であり、こんなのは自分たちの気にするところではない。

そして程なく、様子見に出てきた織斑千冬と合流した。

二人が気付いたとき、既に少女の姿は消えていた。



「あー、あつぶなかつた」。遅刻の原因が私にある、なんて総一や
桜華に知られたらどうなるか分かつたもんじゃないしね」

近場の建造物の屋上からその光景を見下ろしつつ、リリーは安堵

の息を零した。――瞬間。チャキリ、と音が鳴った。そして寸暇をおかずに首横を刃が奔る。

「そうか。ここまで遅れたのはお前が原因だったのか……」

「ア、ハハ、ハハハハ……」

リリイは力なく笑うしかできなかった。聞こえた声とあてがわれた刃から、声の主が真宮寺桜華だと判断できたためである。

桜華は華撃団員として異端である。その理由として、彼女の行動が『輪の外側のヤツなんてどうでもいい』という考えの元で執られていることが挙げられる。

しかしその反面、桜華は『輪の内側にいる者には限らない愛着を持つ』のだ。問題を起こせば叱るし、その逆もまた然り。

彼女が『花組』で戦っているのは、被害者を慮ってのことではない。『仲間』が傷付くことを厭うているからである。

その事実を知っているのは『輪の中にいることを許された者たち』だけであり、上層部として知らない者の方が多い。

ともかく。

そんな桜華だからこそ、リリイを見逃す理由はない。

流石に斬り付けたりはしてこないだろうが、説教は確実である。

――リリイは表情を萎ませた。

「……まあいい。間に合ったんだからな」

だが、不思議なことに見逃してくれた。――だからこそ、リリイの恐怖は増す。

「ど、どうしたの……桜華？」

「なに、簡単なことだ。先日の礼だよ。……それはともかく。楽しく観させてもらおうでしょう。ほら、月組謹製の双眼鏡」

かによって起こされたのか……。

その真実を知る術など一夏には存在しない。興味はあるが知る必要もない。大事なのはただ一つ。『専用機が届いた』という事実到他ならないのだから……。

しかし、試合開始まで時間がないのも確かな事実。無駄に出来る時間など残されてはいない。

「き、来ました！？ 来ましたよ！？ 織斑くんの専用IS！」
「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ」

真耶と千冬の言葉を聞きながらも、一夏はそれに反応を示さない。その時間すらも惜しいのだ。

真っ直ぐに自分の専用機として用意された、その純白のISに駆け寄り、触れる。

「うん……？」

初めてISに触れたときのような感覚が流れなかったことに一瞬疑問を覚えるものの、すぐにその理由も分かった。ISから流れ込んでくる情報が教えてくれたのだ。

無作為に流れ込んでくる、しかしそれでも確固たる流れを持った情報に導かれるままに、専用機を起動させる。

前方装甲を展開しているISに、座り込むように背中を任せる。自分という主を認識したのだろう。すぐさま装甲が閉じ、次いで空気を抜く音が響きわたる。

空気が抜けたと同時に飛来する一体感。

ISネーム…白式。戦闘タイプ…白兵専用型。特殊装備…無し。操縦者…織斑一夏。——まるで客観的に捉えたような情報として、自分たちのことがわかる。

「不幸中の幸いってのはこのことかな……」

思わず一夏は呟いた。

元より不利は承知の上だが、それでも白兵型というのはありがたい。なにせこの一週間というものの、自分は剣しか振っていない。これで射撃型だったりした場合目は当てられない結果となっていただろう。なにせ遠距離戦の心得などないのだ。接近戦の心得が転用できなくもないだろうが、期待は出来ない。

白兵専用の部分が気にならないでもないが、元より自分はそれほど器用な性質じゃない。逆にこの方が良いのかもしれない。

———戦闘待機状態のISを二体感知。

「ん……？」

ハイパーセンサーのもたらす情報に、一夏は自然と釘付けになった。

ISネーム…ブルー・ティアーズ。戦闘タイプ…中距離射撃型。特殊装備…有り——現時点では詳細不明——。操縦者…セシリア・オルコット。

ISネーム…狼虎。戦闘タイプ…近距離特化型。特殊装備…無し。操縦者…大神総一。

「便利なもんだな、ハイパーセンサーって。……っと、ゲートが開くか」

ゲートの完全解放まであと二秒弱。

ここは何か気の利いたセリフでも言っておきたいところだが、何がフラグとなるかわからないので自重する。アニメ然りマンガ然りゲーム然り、下手なことを言えばそれが引き金となって結末が決定し

てしまいかねないのだ。

だが、だからといって無言で出るのも芸がない。

「織斑一夏。『白式』、出ます……！」

結局、某有名ロボット作品のセリフを流用することにした一夏だった。

第5話（後書き）

切に感想が欲しいです。

幕間…セシリア・オルコット 1

IS学園のアリーナにて一夏の参戦を待つ最中。

微かに、傍目にはそれこそ分からぬように、セシリアは視線を移す。……視線の先には一人の少年。

自分と同じ年のこの少年は、しかして自分の遙か先を往く。

そう、彼こそは正に『騎士』であり『サムライ』だ。

彼と出会ったればこそ、今の自分がある。

未だ途すら定まっていけないが、それでも、その事に気付けた分だけ、自分は迷いながらも進んでいる。……そんな確かな実感がある。

貴族とは『誇り』の体現者であらねばならない。それ出来なくして『貴族』とは名乗れない。……それがセシリアの考えだ。

その語源がどこから来たのか、セシリアは知らない。しかし『貴き一族』と書くからには、そう呼ばれるに相応しい行いをしたが故だと考えている。人々の尊敬を、感謝を、憧れを、それらを捧げられるだけの行動を取った故の尊称である……と。

そう思っていたというのに、いつの間にか、自分はその事を忘れていた。

両親が死んだ後は、名門貴族であるオルコット家を潰すまい、とただそれだけを考えていた。

ではそこに、果たして『貴族』としての価値はあるだろうか？

誇りを体現する者だ、と自分は胸を張って言えるだろうか？ ——

否だ。

与えられた席にしがみつき、そこから離れたくないが故にもがき苦しむ。……何と醜いことだろうか。

だが、間違いなく自分はその『醜いモノ』の一人だったのだ。

それを否定することは出来ない。……してはならないのだ。

そして、その事に気付かせてくれたのが、彼——大神総一その人

である。

その時の美しさを、全身を駆け巡った衝撃を、セシリアは今でも鮮明に思い出せる。

一夏が来るまでのほんの一刻。

自戒も込め、セシリアは過去に想いを馳せることにした。



その日、セシリアは中々寝付けなかった。

自分、引いてはオルコット家の知名度を上げる目的もあって、映画『黒髪の貴公子』への出演を求められた際には一も二もなく受諾した。

そしてその撮影に自分の家を使うことになり、参加スタッフを家へと泊めた。

名門貴族の肩書きは伊達ではないということか、部屋数だけは余っているのも一因である。……それは同時に、両親の死と時を同じくして辞めていった者たちの多さを否応なくセシリアに実感させることになった。

普段であれば、忙しさのあまりそこまで気を回すことはなかった。忘れることができた。

だが、今回のことにより改めて気付かされた。母親の凄さを。自分の実力を。自分の人望のなさを。……確かに残ってくれている者たちもいる。しかし、如何に実力を併せ持っているとは言え、幼馴染みであるチェルシーが自分の専属メイドを務めている現実が、一つの事実を突きつける。そう、今もなお残っている者たちの大半は『チェルシーよりも仕事が出来ない』という事実だ。

曲がりなりにも現在のセシリアはオルコット家の当主である。その専属メイドということは、当然ながら相応の実力を求められる。それも一極特化ではなく万能的な実力だ。……言い換えれば、メイド、執事、調理師、庭師……それら全ての頂点に立てるだけの実力

を有する者が当主の専属メイドであり専属執事なのである。

チェルシー以外に残っているスタッフも充分に仕事は出来る。しかし、それとても一極特化故のこと。総合的な実力で比較すれば、チェルシーの方が圧倒的に優れている。

確かに実力と年齢は比例しない。それはセシリアも認めている。

……だが、いくら何でもこれはヒドい。この現実ヒドすぎた。

否応なく現状を叩き付けられたためだろうか、身体は疲れているというのに……眠れない。眠れなかった。

気晴らしに窓から外へと視線をやり、そして気付いた。

それが目に入っただのは、本当に偶然だった。

今回の主役として、東洋からわざわざ招かれた一人の少年——大神総一。

彼が庭にいる。

ただ庭にいただけじゃない。手に何かを持って動いている。

月明かりと星明かりから、それが剣——東洋で言うところの『カタナ』だと分かった。

その姿を目にして、セシリアは視線を逸らすことが出来なかった。ただ剣を振っているだけだというのに、何故こうも美しいと感じてしまうのだろうか。

暫し考えたセシリアは、その理由に思い至った。……腑に落ちた、とはこのことを言うのだろうか。

彼の剣には、自分の持たざるモノを感じるからだ。剣を習ったとか習ってないとか、そういうのとはまた別次元の話。

そう、彼の剣は確かな錬磨の跡なのだ。研鑽を積んだ証なのだ。自分が頑張っていない、とは言わない。……しかし、費やした歳月が違うのだ。

彼自身がどう思っているのかは分からない。未だ満足していないのかもしれない。……それでも、その剣は確かに誇れるモノだ。誇っているモノだ。

今の自分は持っていない、けれどいつかは持ちたいモノ。

彼の剣はその具現。可能性の一つだ。

ああ、認めよう。今この瞬間、自分は彼に憧れた。……そしてだからこそ、自分は彼に認められたい。認めさせたい。

だからといって、おざなりの賞賛では意味がない。おためごかしの賛礼など以ての外だ。……心底からのモノなればこそ、価値があるのだ。

自分は誰だ？ セシリア・オルコットだ。生来の負けず嫌いだ。ならば、やってみせよう。歳月が違うと言うのであれば、その分は密度で補ってみせる。

故に、今この場を以て、月と星に誓おう。

「大神総一……わたくしは必ず、あなたに認めさせてみせますわ。わたくしという存在を、セシリア・オルコットの名と共に」



そう、あの日、あの瞬間。

自分は目標を得たのだ。

以降、私人、セシリア・オルコットはそれだけに時間を費やしてきたのだ。

何度挫けそうになっただろうか。何度諦めそうになっただろうか。……覚えてなどいない。覚えられないほどに多かった。

つまり、それだけ自分は甘い時間を過ごしてきたということの証明だった。

悔しかった。屈辱だった。……だからこそ、それをバネに頑張れた。

思えば、あれほどに頑張ったのは生まれてから初めてだったような気がする。

だからだろうか。あの日々は、自分に限らない充足を与えてくれていたように思う。

何度も打たれた。何度も撃たれた。……文字通り、身体に叩き込まれた。



「好きに仰ってくださいな。ええ、わたくしは確かに負けず嫌いですから」

「恋路って、ちよつとリーヴァ！ わたくしはそんな……！」

「何か言いました?」

そんな会話をし、入念な準備体操のあとランニングを行った。：

また、ランニングが終わってもそれで全てが終わりではない。仮宿であるブルーメール邸に戻ったあとは、神楽による正座指導と箸

の特訓が待っていたのだ。……正直、ランニングよりもこつちの方が辛かった。

そんな日々が何日か続いた。

現金なもので、百メートルでも十メートルでも昨日より進むことが出来たと分かれば、完全に嫌気が差すこともなかった。

それは正座や箸の扱いにしても同じ事で、一分でも長く座ることが出来れば、掴めなかった物が掴めるようになれば、やはり完全に嫌気が差すことはなかった。

教え手であるリーヴァと神楽が、自分と同じ年である部分も大きかったのだろう。負けず嫌いは、ここでも遺憾なく発揮されることとなった。

そして、体力がついたらついで実戦形式の訓練に移行した。

そもそも、こうしてブルーメール邸を訪れたのはそれが目的なのである。……現在のセシリア・オルコットにとって曲がりなりにも誇れるモノがあるとすれば、それはISに他ならない。

そしてISの特性上、自分が動けるに越したことはない。射撃型であるが故に『近付かせなければ問題ない』と思っていたが、では実際に近付かれた場合の対応策があるか？ と問われたら何もないことに気付いたのだ。専用IS『ブルー・ティアーズ』には接近戦用のショートブレード『インターセプター』が用意されているが、所詮は申し訳程度の代物である。……いや、自分が『申し訳程度の代物』にしてしまっているのだ。

近接戦闘の心得など、参考書に書かれているようなさわり程度しか持ち合わせていないのである。必然、イメージなど定まらず武装展開にも時間が掛かる。名称を口に出すことでようやく、といった有様だ。……そんな状態で近接戦闘装備など使えるはずがない。使われるのが関の山だ。

ハッキリ言って、それは問題だった。確かに射撃能力には自信があるが、それでも『決して相手を近接戦闘範囲には入れない』と言えるほどには高くないのだ。……であるならば、至急近接戦闘能力

を底上げする必要がある。少なくとも、口に出さずに武装展開出来るくらいにはならないといけない。

なにせ、今度の春からは『IS学園』に通うことが決定しているのだ。曲がりなりにも代表候補生である自分が、初心者同然の行為をする。……嫌だ。嫌すぎる。そして恥ずかしすぎる。

エリートとは、ある種の『理想』でなくてはならないのだ。そう思わなくてはならないのだ。

無論、気のおけない友人などが相手であればそんな必要はない。しかし、そうでない相手にはそうする必要が出てくるのだ。……立場故のしがらみ、というやつである。

それら諸々を加味すると、ブルーメール邸は格好の位置づけだったのである。

ブルーメールに赴けば、自然と北大路もついてくる。そしてここが重要なのだが、両家共に『武術』を奨励しているのだ。

ブルーメールの祖はバイキングである。荒れ狂う海に暮らし戦闘に意気を燃やしたとされるその気質は、今もなお変わることなく受け継がれている。貴族の誇りもまた然りだ。

一方の北大路は、男なら『日本男児』、女なら『大和撫子』であることを家訓にしている。……『男尊女卑』時代の名残と捉えることも出来るが、問題なのはそこではない。男は当然の如く、女であっても『いざというときには家を護る』という観点から武術を伝えている、この事実こそが重要なのである。

セシリアにはよく分からない考えではあるが、確かに神楽の所作は、同性である自分から見ても美しいと感じるモノだ。……ならば、一概に斬って捨てるのではなく、そういうモノだと認めてしまえばいい。

そう、当初はそうのように意気込んでいたのである。

しかし――――

「ぎゃ……っ!？」

「かふ……っ!？」

———そうそう上手く転ばないのが現実です。

「反応が遅い。ISに頼るのはいいが、頼り切るな。……そんなザマでは、ISを纏っていないときに襲われたらアツサリとやられるぞ?」

地面に這い蹲るわたくしの前で、散々打ち据えてくれた幼馴染み殿は溜息混じりにそう仰りやがりましたのです。

「おっしやり……はあ……たいことは……はあ……わかる……のですが……はあ……こちらからも……一つ……はあ……よろしいですか?」

呼吸を整えつつ問い掛け、何だ? と首を傾げる幼馴染み殿にわたくしは言ってやることにします。

「そんな棒きれで貫通ダメージを与えるって一体どういう事ですかああああ……っ!？」

そう、目の前の幼馴染み殿は正に理不尽でした。

如何なる現行兵器も『白騎士』には通じなかったからこそ『ISに勝てるのはISのみ』などと言われ、現在の『女尊男卑』の風潮を巻き起こしたというのに……。

リーヴァは何の変哲もない木の棒——何でも『コン』というらしいです——で、ISのバリアーはおろかシールドエネルギーすらも突破して、貫通ダメージを与えてきたのです。

それ則ち、人間の身でありながら兵器以上の攻撃力を有している、ということの意味します。……流石にこれはつつこまずにいられます。

せん。

「何を言うかと思えば……。いいか、セシリア？ この世の中、『絶対』なんてものは限られてるんだ。大多数がそうだったからと言って、決して全てがそうだとは限らないのが世の常だ。……実際にやってみて分かったが、ISの防御はある意味では物凄く堅いが、ある意味では物凄く脆い」

「……どういう意味ですか？」

「純粹な物理攻撃には限りなく強い、それがISだ。……その一方で、東洋で言うところの『氣』に代表される、ある意味でオカルトに分類されるモノには滅法弱い。現に、まあ『氣』とは別だが、そういうったモノを流しつつ攻撃したら御覧の通りだから……。これならば、神楽はおろか俺の知る限りあと数人は同じ事が出来る」

「一体何なんですか、その『力』とは？ 理不尽にも程があるのですが……」

「ふむ。言うだけならば構わないか……。？ 親友なればこそ言うが、他のヤツには言うなよ？ 頭がおかしいと思われるからな？ 一言で言えば『靈力』だ。精神エネルギーの一種、とも言われている。分かりやすく言えば、RPGで言うところのMPだな。MPを消費して攻撃する代わりに、相手のHPだけではなくMPにもダメージを与えている……と言えれば分かりやすいか？」

「それ……わたくしにも出来ますの？」

「出来るか出来ないかで言ったら……出来るだろう。女性は男性に比べて保有する靈力が高いからな。……また、ヒトは無意識に靈力を使うこともある。スポーツとかで『急に感覚が鋭敏になった』とか『不意に道筋が見えた』とか言われるのがその典型だな。……しかし、自在に使うためには己自身で靈力を掴まなくてはいけないし、それは多分に感覚的なモノだ。故に、出来るか出来ないかは己次第だ。……さて、休憩はもう充分だな？ 構えろ」

そして――

「あう……っ!？」

「いやあああああ……っ!？」

――再度、わたくしは打ち据えられたのでした。

それでも、人間の底力というやつは存外バカに出来ません。数日も繰り返されれば慣れるもので――寧ろ『痛み』に対する忌避感が強まったためでしょうか――ある程度は躲すなり防ぐなり出来るようになりました。

ですが……それは更なる地獄の始まりでした。

リーヴァだけでも手一杯だというのに、そこに神楽が加わって来たのです。しかも、神楽の得手は弓。則ち遠距離攻撃です。……『言に偽り無し』とはこのことを言うのでしょうか。神楽もまたアツサリと貫通ダメージを与えてくれました。

つまり、至近のリーヴァだけでなく、遠方の神楽にも気を配らなくてはならないのです。ハイパーセンサーによって位置を割り出すことは出来ても、操縦者であるわたくしがそれを認識できなくては意味がありません。

ええ。お決まりの如く地面に転がることとなりました。

それでも、この訓練は充分な益をもたらしてくれました。

やはり数日後には、ある程度躲すなり防ぐなりが出来るようになったのです。

どうやったのか？ 言葉で表すのは凄く簡単です。一言ですみません。『撃ち落としました』……これだけです。

そもそも、慣れない近接武器でリーヴァの相手をしているだけでも手一杯なのに、更に神楽の矢も近接戦闘範囲内に入ってから対応するから無理なのです。そんなこと、出来るわけがありません。

それよりは、まだ遠くにあるうちに撃ち落としてしまった方が遙かに楽です。幸いにして、わたくしにはそれを可能とするだけのス

ペックを持つ武器があります。……そう、特殊装備『蒼い雫』です。

とは言え、レーザーを放ったところで当てられそうにありません。そんなイメージは湧きません。……ですが、ぶつけるだけなら出来ます。イメージも浮かべることが出来ます。

痛みに対する忌避感のあまり、越えられなかった壁——『蒼い雫』を制御しつつの同時機動——をこうもアッサリと越えてしまつては、喜ばいいのか悲しめばいいのか……。我が事ながら複雑です。

ええ。それで調子に乗ったのが第二の罠でした。

通常時に『蒼い雫』を動かせば、やはり制御に集中しなければならず、相変わらず無防備になってしまったのです。……あの時の落胆といったら、それはもう言葉にすることも出来ません。

そこからはまた訓練内容が変わりました。神楽の放った矢を撃ち落とすのがメインとなり、時折リーヴァが仕掛けてくる攻撃を躲すことになったのです。

比重が変われば、やはり上手くはいかないもので、わたくしはまたも地に伏せることとなりました。

ですが、それでも利点というモノはあり、『蒼い雫』や『スターライトmk?』の扱い方が上昇する運びと相成ったのです。

結果、普通の状態でも同時機動が出来るようになりました。

その後はまた元の訓練に戻り、只管に躲して防いで撃ち落として……の繰り返しです。

そして、まだまだ荒削りですが回避能力は二人のお墨付きをもらえるようになったのです。

リーヴァ本来の得手は槍。そして神楽は弓。……両者に共通しているのは、その本領が直線攻撃という点です。特にリーヴァは接近戦を主とするので、攻撃から到達までの距離が短いのです。……つまり、判断する時間も少ないのです。

リーヴァほどの腕があれば、見て躲す、といった余裕もあるかも知れません。……ですが、わたくしには無理です。そんな余裕はありません。

だからこそ、なかでしようか。身体が勝手に反応するようになったのです。たとえば目を瞑っていても、それは変わりありません。…ある一定以上の危険には、という注釈が付きませんが。

なお、いずれの訓練も『ホワード技研』のパリ支部を借り受け、その施設内で行っていたのでIS運用協定に違反しているわけではありません。…わたくしの『ブルー・ティアーズ』も『ホワード技研』の協力を受けて開発された機体ですから、機密云々に関しても大丈夫でしょう。



「大丈夫か、セシリア？ 一体どうした？」

過去を回帰していたセシリアは、総一の心配げな言葉で現実へと戻された。

はてな、と首を傾げる必要もなく、総一の言葉の意味が分かった。…自分の身体が目に見えるほどに震えていたのである。ついさっきまでは何ともなかったのに、いきなりこうも震え出せば、そりやあまともな人格を有している者なら心配もするだろう。

「ええ、大丈夫ですわ。何の問題ありません」

他人事のように己の状態を捉えつつ、セシリアは答えた。――震えの理由など分かっている。『訓練』という名を借りて行われた恐怖までも思い出してしまったからだ。…けれど、それは確かな自負へと繋がっている。自分はあるの恐怖を乗り越えたのだ。

「さあ、油断無く参りますわよ？ セシリア・オルコット」

セシリアが自分にそう言い聞かせると同時。

威風堂々、『白』を纏った織斑一夏がアリーナにその姿を現した。

幕間：セシリア・オルコット 1（後書き）

今回、回想と言うこともあって実験的に一人称を組み込んでみたんですが、どうでしょう？

第6話

「さて……まずは準備運動といくぞ、一夏！」

「参りますわよ、織斑さん！」

開始の鐘が鳴るや否や、一夏は総一とセシリアの二人から攻められることとなった。

総一の二刀流とセシリアの射撃が間断なく一夏を襲う。端から見て、それは猛攻と言えるものだった。

「この……！ うわっ!？」

次から次へと送られるハイパーセンサーの警告に、一夏は対応しきれない。

総一の攻撃に気を取られればセシリアの攻撃が、セシリアの攻撃に気を取られれば総一の攻撃が迫っている。こちらから攻撃する暇などまるでない。護りに専念するだけで手一杯だ。

今もまた、総一の斬撃を防いだかと思えばセシリアの放ったレーザーが迫っており、それに気を取られた瞬間、総一によって蹴られたのだ。

（名は体を表す、って言うが……。まったく、『狼虎』とはよく言ったもんだ。しかし、色といい接近戦仕様といい、どこことなく親近感が湧く機体だな……）

崩れた体勢を戻しつつ一夏は思った。

一夏の『白式』と同じく、総一の『狼虎』もまた白を基調とした機体である。その武装は格闘戦を想定した手甲と脚甲、そして白兵戦を想定した刀が二振り。

ハイパーセンサーによると、刀はそれぞれの名を『剣狼』と『刃虎』というらしい。そして手甲が『狼牙』で脚甲が『虎爪』ときた。……まさしく『虎』と『狼』尽くしである。

また、それこそが近距離特化型の由縁といったところか。

白兵とは『刀・剣・槍などの武器』である。つまり、白兵戦とは『刀・剣・槍などの武器によって行われる接近戦』に他ならない。

……故に、『白式』の白兵専用型とは手にした得物で戦うことを主眼に置いている。

しかし『狼虎』の場合は、同じ接近戦タイプでも『白式』とはまた違う。更に密着した状態での戦闘も考慮されているのだ。

武器に大仰な名前が付けられているだけなら然程問題は無い。

しかし、それを繰り出しているのが総一となれば話は別だ。こと剣撃において、総一の技量が一夏に勝っているのは既に証明されているのだ。

そして、どうやら格闘においても総一の方が勝っているらしい。

(だが、それにしちゃ……)

一夏は疑問を抱く。――何故、未だに自分は健在なのか……？

シールドエネルギーは確かに減っているが、それでも六割以上は残っている。試合開始から既に二十分以上が経過しており、当然、何度となく危険な場面はあった。……しかし、依然として自分は健在。

その事実、とても幸運や悪運だけですまされることではなかった。



「……まったく。大神といいオルコットといい、揃いも揃って演技派な事だ」

一夏と同じ疑問を抱く者は当然おり、ピットからリアルタイムモニターで観戦していた千冬もその一人であった。……しかし、一夏と違って既に答えは見付けてある。

「どういことですか、織斑先生？」

千冬の言葉が聞こえたのだろう。隣に立つ真耶が質問した。

試合前に一夏の叫びを聞いていた真耶は、初めのうちこそ二人掛かりで攻め立てる総一とセシリアに憤慨していた。しかしそれも程なく収まり、同じ疑問を抱くこととなった。その答えは未だ出ておらず、分かるのはISの起動が二回目と思えぬほどに健闘する一夏の凄さのみ。

「なに、簡単なことだよ、山田君。大神もオルコットも、織斑に攻撃を当てる気など最初からない、ということだ」

千冬の説明を聞いた真耶は、それこそ信じられなかった。現に、一夏は何度となく二人の攻撃を喰らっている。

「納得できないか？ 無理もない。大神もオルコットも、当てる気はないが当たっても構わない、と思っているのだろうからな」

「当てる気はないが当たっても構わない、ですか？」

「ああ。剣で言えば、どこが悪いかを言いつつ寸止めをするところを、言葉には出さず寸止めもしないだけだ」

「あの……それは、当てる気満々、ということではないのですか？」

千冬の言葉を聞いて、真耶は余計に混乱した。

「いや、違う。なにせ自分の攻撃が当たりそうになってももう一人

が邪魔をするんだ。ならば、結果的に自分の攻撃が当たることはない。……ほら、当てる気など最初からないじゃないか？　そもそも、この試合はバトルロイヤルという体裁を取っている。最終的には誰もが敵であり、そこに連携など望むべくもない。……大神とオルコツトは、そういった意識の片隅を突いているのさ。だから、まるで示し合わせたかのように互いが互いの邪魔をしていても、観戦している大抵の連中は気付かない。誤魔化される」

.....

「とは言え、それが大神とオルコットの本領というわけではないだろう。二人にとって、試合が始まってから今までの流れは、織斑に對する指導でしかない。スポーツマンシップ云々に則って、織斑の準備が終わるのを待っているのさ」

その瞬間、まるで真耶に答えるかのように一夏が光に包まれた。

「ようやくか……」

その光景に、総一とセシリアは揃って溜息を吐いた。……それは正に二人の心中そのものである。

試合というものは平等な条件の方が望ましい。しかし、実際そんなことは不可能だ。身長体重腕力脚力その他諸々が個々人によって違うのだから当然である。

それでも、可能な限り近付けることは出来る。

では、どこにその条件を見出すか？ 総一とセシリアは一次移行にそれを求めたのだ。

稼働時間は論外だ。圧倒的にセシリアの方が勝っている。次点の総一との差もかなりのものであるというのに、専用機が届いたばかりの一夏とでは比べるべくもない。

だからこそ、一次移行に求めるのは当然と言えば当然の帰結であった。

しかし、ただ一次移行を待つだけでは意味がない。

正直な話、戦闘開始後に何もしていなければ、一夏機の一次移行はもっと早く終わっていた筈なのだ。余計な負担が掛からないのだからそれも当然である。……だが、ことISに限って言えばそれは意味がないのだ。

ISの意識が操縦者を理解していくのが最適化であり、言うなれば『大雑把に理解した時』に迎えるのが、その第一段階である一次移行だ。

しかし、ただ突っ立っているだけで理解できることなど如何ほどのものだろうか？ それにどれだけの意味があるだろうか？ ハッキリと言えば無意味に等しい。

ISに求められるのが『戦闘』である以上、いくら負担が掛かるうとも動き回った方が、最終的には遙かにプラスとなる。

また、それはISだけではなく一夏にも言えることだった。

一夏はISの稼働時間が極端に少ない。言い換えれば、ISを装着した状態での動き方が分かっていないに等しい状態なのだ。

そこを攻め立てればどうなるか？ 当然、一夏は嫌が応にもIS

の動かし方を理解せざるを得ない。

その上で一次移行すれば、その上昇幅は普通に移行するよりも遙かに大きい。

それはつまり、より試合を楽しむことが出来る、ということだ。だからこそ、総一とセシリアは共謀して一夏を攻め立てたのだ。

二人の戦闘タイプが異なるので、一夏の理解しなければならぬ量が増える、という利点もあった。

誤算があったとすれば、一次移行までの時間が予想以上に掛かったことである。……まあ、データが少ないのだからそれも仕方ない。そうは思っても、人間なのだから感情を抑えきることなど不可能である。

先の楽しみが増えた、と言えば聞こえはいいが、それは延々とお預けを食っている状態であり、欲求不満は募る一方だったのだ。

二人の溜息はそれ故のものである。

「一夏！ 準備運動はもう充分だな？」

「ここからは……本気で行かせてもらいますわよ？」

総一とセシリアの言葉に、しかし一夏は反応を返さない。……返せなかった。

この瞬間において一夏の意識は、ただその武器にのみ注がれていた。

近接特化ブレード『雪片弐型』。

形状と名称。この二つが組み合わせが、一夏の意識を掴んで話さない。——これは現役時代に千冬姉が使っていた物だ。『弐型』という点から考えるにそれその物ではないんだろうが、下地においているだろうことは間違いない筈だ。

「これを、俺が使う……」

本当に、俺に扱うことが出来るのか？　これは千冬姉の象徴だ。今まで、俺を護ってきてくれた人の象徴だ。それはつまり『守護』の象徴ということでもあるんだぞ……？　——畏れが一夏を怯ませる。

そしてそれは、一夏について先日のことを思い出させた。

他ならぬ自分が『この手で他人を傷付けた』という掛け替えのない恐怖が甦る。——自分の全霊を込めて繰り出した木刀。簡単に防げる筈のあの女性ひとはそれを無防備に受け。鈍い打撲音。吹き飛ぶ身体。

尋常な勝負の果てだったのならば、どうにか納得もできただろう。けれど、これは違う。

彼女は敢えて無防備になった。そして、自分はそれに気付いた。気付けた。……なのに、剣は止まらなかった。止められなかった。

彼女の自業自得、と割り切ることも出来ない。

何が起るのか分からないのが世の中だ。こういった『事故』、こういった『危険性』は、カタチを変えて日常のそこかしこに紛れ、溢れている。

彼女はそれを改めて気付かせてくれたのだ。……感謝こそすれ、無碍に扱うなど出来ようはずもない。

だけど、所詮それは注意点にすぎないのだ。

忘れていたわけではない。考えていなかったわけでもない。……だが、未だに答えは出ていない。乗り越えてなどいないのだ。

「あ、ああ——」

そう、詰まるところ、それが起るのは必然だったのである。……無論、剣を続けていれば、遅かれ早かれいずれは起こり得ることもある。

ただ、誰の想定よりも早く起こってしまったのだ。予想外に早く起こってしまったのだ。

結果的に、一夏に『護る』という信念を抱かせることになった千冬。

一夏に剣を執る『理由』を思い出させた総一。

相手を傷付ければ自分もまた傷つく、という——真っ当な人間にとっては——純然たる事実をその身で味わわせた桜華。

誰が悪い、というわけではない。

敢えて言うならば、タイミングが悪かった。

（護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた……）

想いと結果。相反する矛盾。『護る』ことは『傷付ける』こと。

識ってはいた。……しかし理解しきれてはいなかったそれが、ここにきて一夏を苛む。

一夏にとって『守護』の象徴である『雪片』。『護る』という、

一夏が剣を執る理由。……信念。

そして、自分がこの手で、剣で、悪意も何もない他人を傷つけた、という揺るがない事実。

これらが揃ってしまった以上、一夏は嫌が応にも理解せざるを得なくなってしまうのだ。『過去』とは違う、ということ……。

一夏は『過去』にも、その手で他人を傷付けたことがあった。

そいつらは寄って集って数人掛かりで箒を苛めていた。直接の暴力こそ振るってはいなかったが、間違いなく『言葉』の暴力は振っていた。

それに対して一夏はキレた。直接の暴力を振るった。千冬にも迷惑を掛けた。……けれどそれは、一夏の中の『正義』が相手に『悪』を感じたが故のこと。

そして、釈然としない思いもあったが——千冬に迷惑を掛けたく

ないが故に——結局、一夏はその気持ちを呑み込んだ。

これは——ある意味で——過去に自分が目を背けた事柄の再燃なのだ。

そして、これに決着をつけるのは『善悪』じゃない。そんなモノで決着をつけていい事柄ではないのだ。当たり障りのない言葉に流されてはいけないのだ。……そう思うものの、そう簡単に答えは出ない。

或いは、もっと時間があればまだマシだったのかもしれない。……だが、いくら何でも短すぎた。

一夏は至って普通の感性を持つ人間である。

そんな彼にとって——恐怖を乗り越えるにも、折り合いを付けるにも、答えを見付けるのにも——たった数日という期間は短すぎたのだ。

「————あああああ——————っ!!」

絶叫が上がる。

それはさながら魂の慟哭。

そして————

「————まずい!」

霊力が暴走している! ——いち早くそれに気付いたのは、当然の如く総一だった。

人は時として無自覚に霊力を用いることがある。それは不思議でも何でもない。自らの持てる力を使うのは至極当然のことだ。

しかし、所詮は無自覚の行為。用いられる霊力は基本的に微々たるものであり、結果、自らが霊力を使用したことに気付くことはない。

霊力に関する知識もない者がそれに気付くとしたら、それは気付

かざるを得ないほどの効果をもたらした場合のみだ。

その代表格が『危険回避』と『暴走』である。その共通点は二つ。一つは『感情の高まり』が引き金となっていること。そしてもう一つは『当人による制御など望めない』ということだ。

もたらされる結果はただ一つ。『破壊』である。……危険回避の場合は『救済』と言い換えることも出来るかもしれないが、所詮は言葉遊びの域を出ない。

「間に合うか……!？」

総一は一夏の元へと駆ける。……しかし、途中で止まらざるを得なかった。

「やれやれ、待機しておいて正解だったか……」

そんな言葉を発しつつ、それが降り立ったからだ。……霊的戦闘部隊『花組』の用いる現代の霊子甲冑。その名を『稟武^{りんぶ}』。総身を染める桜色と発された声が、操縦者が真宮寺桜華であることを示していた。

桜華、と叫びそうになるのを総一は堪えた。桜華の意図が分からない以上、下手に関係性を示すわけにはいかない、という判断からである。

「しかし、これはまた予想外だな。まあ、どうでもいいことか。どうせ、やることをやるだけだ。……さて、織斑一夏。どうやらそのザマでは宿題が出来なかったようだな？　まあ、分からないでもないよ。こちらとしても、よもやこんな短時間で起こるとは思ってもみなかったからな……。ともかく。これも縁だ。私の手でお前を止めてやろう」

言い捨て、桜華は構えた。

総一は動かない。……言い様から、桜華のやろうとしていることの目処がついたからである。付け加えれば一夏の霊力暴走も治まってきた。

この状況下で下手な横出しをすると、水泡に帰してしまいかねない。

しかし、それとて桜華をよく知る総一だからこそ可能な判断である。当然ながら、他の者にそのような判断は出来ない。出来るわけがない。

それを証明するかのように耳をつんざくような独特の音が鳴り響き、同時に奔った一条の閃光が桜華の前方空間を貫く。……セシリアの威嚇射撃である。

「突然現れてのその物言い……失礼にも程があります！」

「セシリア・オルコットか……。すまないが、部外者は黙っていてもらおう。……それと警告を。下手に動くな。仕掛けてくるのなら、こちらでも自衛のために攻撃せざるを得ない。だが、それは私の本意ではない。そもそも、この試合を楽しみにしていたのは私も同じであることだしな……」

セシリアの行動を目にして言葉を耳にしながらも、桜華はそう言うてのけた。……一夏を向いたままに淡々と。

「な……っ!? バカにしてっ!」

こちらの善意を無碍にするような相手に向ける慈悲など無い。

生来の気質も相俟って、セシリアはこの試合が始まってから一切使っていなかったそれをついに起動させた。

フィン状のパーツに直接特殊レーザの銃口が開いている、四つの自立機動兵器。

それこそが特殊装備『蒼い雫』^{ブルー・ティアーズ}。……機体名と同じ名のそれだが、正しくは順番が異なる。そもそもは武装の方が先であり、それを積んだ実戦投入機の一号目だからこそ、機体にも同じ名前が付けられているのだ。

そして手には二メートルを超す長大な銃器——六七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』——が握られている。

セシリアは『蒼い雫』を踊らせながら、『スターライトmk?』を乱入者へと向け——

「墜ちなさい！」

——怒号と共に撃ち放った。

「警告はしたぞ……！」

^{ターゲット}目標である桜華は何ら慌てることなくそう言い放ち、セシリアへと向かっていった。

ISと霊子甲冑の違いはあれど『稟武・桜華機』は一夏の『白式』と同じく白兵専用型だ。攻撃するためには接近する必要がある。

「自殺行為な……！」

それを確認したセシリアは、『蒼い雫』を『スターライトmk?』の射線左右に高低をつけて配置、発射する。

これにより相手の動きを阻むことが出来る。大きく迂回すれば簡単に回避されるが、相手が近接戦闘型である以上、それが自身の不利には直結しない。千日手になるかもしれないが、何も自分が仕留める必要はないのだ。なにせ相手は侵入者だ。時間をおけば教師陣が駆けつける。自分はそれまでの時間を稼ぐだけで良い。——これがセシリアの思惑であった。

弱腰と捉えられるかもしれないが、そんなのは知ったことではない。相手の力量も分からない以上、安全策を取るのは当然だ。なにせ世の中にはＩＳを用いずにＩＳのバリアーを破ることが出来る存在がいるのだ。しかもそれが自分の親友二人である。狭い範囲にそれだけいるなら、広い範囲にはどれだけいることか分かりはしない。そして、この侵入者は生身じゃない。……ならば、この相手もそれを可能とするだけの力量を持つ、と仮定して動くべきだ。――勇気と蛮勇は別物であることを、今のセシリアは理解していた。

「な……っ！？」

想定外であった。……あまりの出来事にセシリアは驚愕の声を漏らし、その思考を静止させてしまう。

動きを取り入れて、速度を落とさぬままに全ての『蒼い雫』を斬り捨てる。



とある経験からセシリアの回避能力は並ならぬ域に達していた。それは、たとえ忘我の内だとして発動してしまうほどである。……つまり、セシリアが己を取り戻したとき、既にその身体は初撃を躲し終えていたのだ。

かったはずである。為す術無く、アツサリと武器を破壊されていたことだろう。

しかし、セシリアは回避した。

こいつ、デキる！——相手の思わぬ実力に、桜華は本来の仕事
を脇に昂揚する。

しかし、それも束の間。セシリアの目に光が戻ったのを確認した
桜華は冷静にならざるを得ない。なにせ無意識のままでも回避行動
を取れる相手なのだ。

見て分かるほどに相手は射撃型だ。近接武装は極々限られている
だろう。だからといって、それが相手の近接戦闘能力に直結するわ
けではない。こうも見事な回避行動が取れる以上、近接戦闘に慣れ
ていたところでおかしくもなんともない。

そして、光が戻ったセシリアの瞳には不屈の闘志が透けて見える。
自分の不利を理解した上で、尚も現状を打開しようとしている。

まったくもって厄介な相手だ。しかし、だからこそ楽しい！——
——最早、完全に本来の仕事を忘れている桜華だった。

とは言え、仕事を忘れるほどに昂揚しても、戦闘に対する冷静さ
までは失っていない。

さて、この状況下で相手を取り得る手段は何だ？——桜華はあ
りとあらゆる情報と経験則から思考する。

セシリアは攻撃を選択している。そして自棄になったわけではな
く、確かな理性も残している。……ならば、自分の安全性も考慮し
た攻撃が選ばれるはずだ。しかし、ISには『バリアー』と『絶対
防御』とやらがあるらしく、安全性という面では全ての攻撃が考慮
されている、とも言える。だが、ISは人間が動かしているものだ。
当然の如く心理的側面が反映される。直前の行動から、セシリアは
『真宮寺桜華にレーザー攻撃は通用しない』と判断しているはずで
あり、そこに近接戦闘能力の高さも加味してくるだろう。故に、一
番可能性が高いのは意表を突いた攻撃だ。そして少なくともそれは、
この試合が始まってから一度も使っていない、と考えていいだろう。

先程のセシリアが良い例だ。自分にとって想定外の事が起これば、どうしても停滞してしまうのがヒトというものだ。結論としては暗器の類。それも隠しておくような物ではなく、堂々と存在を主張している物。そして、もしあるとするならば爆発物。私が斬り払うことを想定した上での選択ならば、それが最も効果的だろう。これならば『衝撃』というダメージを与えることが出来る。現在のセシリアの体勢からそれが可能そうな箇所は……腰部アーマーただ一つ！その思考は刹那の間に行われ、結論を出した桜華は――――

「見切った！」

――――裂帛の気合いと共に返しの太刀を繰り出した。



溜息と共に現れたその存在に、一夏は瞳を奪われた。

その存在を忘れたことはない。忘れられるわけがない。二年前のあの日から、それは一夏にとって『正義の味方』の象徴に他ならないのだから……。

しかし、それはおかしなことを言う。あの日以来会ったことなどないというのに、それ以外にも会っているかのような口振りだ。そして、自分に対して剣を向けてきた。『正義の味方』が、自分に対して……。

一夏は掠れるような声を出した。――その構え、その威圧、その言葉、その声……それら全てが、つい先日出会った、剣を交えその果てに自分が傷付けた少女と重なる。

その構えからあの時も、もしかして、とは思った。けれど、自分は気のせいだと思うことにした。思い込んだ。何故なら、『正義の味方』とは正体不明でなければならぬのだから……。

しかし、目の前の存在はそれを否定する。いかな『正義の味方』

とて世界の中では埋没する普通の少女にすぎないのだ……と。

そして、偶像は現実の前に碎け散り、一夏の精神は混乱する。

そも、ヒトが懂れるのは『自分には無理』ということを理解した上での場合がほとんどだ。

例えば神話や伝承に謳われる英雄たち。例えばテレビで華々しい活躍を見せる芸能人。例えばオリンピックに出場するようなスポーツ選手。

自分には出来ないことをやってのけるからこそ羨ましく、自分もいつかはこうなりたいと懂れる。

懂れで終われば問題ない。しかし、行き着くところまで行ってしまうえば、それは絶対視へと成り代わる。……『ヒトでは到底辿り着けぬ完全にして完璧な存在』として見てしまうのだ。

それが碎け散ってしまったのだ。一夏の混乱は当然と言える。

放たれるレーザー。振られる刀。壊れるビット。呆然とするセシリア。それに向かう『正義の味方』。……一夏の視界の中を流れ行く光景である。

今の一夏にはその意味を理解する事が出来ない。

しかし、それでも、その光景には一夏を動かすナニカがあった。

刀は何だ？ ——凶器だ。

凶器とは何だ？ ——傷付ける、道具だ。

では、何を傷付けようとしている？ ——セシリア・オルコット。

セシリアとは何だ？ ——自分の友人だ。少なくとも、自分ではそう思っている。

当たればどうなる？ ——斬られる。

斬られればどうなる？ ——血を流す。

血を流せばどうなる？ ——最悪、死ぬ。

それを防ぐ術はないのか？ ——ある。

それは自分に可能か？ ——可能だ。

それをやったとして自分はどうなる？ ——深く、傷付くだろう。

では、やめるか？ ——否だ。

何故だ？ ——それをやらなかった方が、自分はより傷付くだろうことが分かるからだ。

それでは最終確認だ。自分に可能な手段とは何だ？ ——斬る。

他ならぬ、俺の手で。懂れた、あの存在を……。

覚悟は決まった。

携えた『雪片式型』に想いを乗せて——

「やめろ——っ！」

——咆哮と共に一夏は駆ける。



「ちい……っ！」

状況の推移に総一は思わず舌打ちした。それぞれがそれぞれの行動を取り、入り乱れようとしている。

桜華の登場に一夏は呆然とし、セシリアが桜華へとレーザーを放った。

放たれたレーザーを桜華が斬り裂き、その光景を目にしたセシリアが呆然とする。

そのままアツサリと片が付くかと思えば、その状態でセシリアは桜華の攻撃を回避してみせた。

それに触発されて桜華が昂揚する。……バトル・ジャンキー戦闘愛好者の悪い癖だ。

既に当初の目的など忘却の彼方だろう。

セシリアは桜華に。そして桜華はセシリアに。

そこで完結すれば話は簡単だったのだろうが、桜華の登場から茫と突っ立っているだけだった一夏が咆哮と共に桜華へと向かった。

ご丁寧にもその手に握っている武器——ハイパーセンサーによると『雪片式型』というらしい——には霊力が込められている。

とても『洗練されている』とは言い難い靈力伝達だが、その威力は推して知れる。

しかし、だからこそ、危険だ。

一夏が桜華へと横合いからあの攻撃を繰り出せば、今の桜華は一夏を斬り捨てるだろう。

いや、桜華の台詞を聞くに、どうも桜華は一夏へと好感情を持っているようだ。『輪の外』には何ら関心を示さない桜華だが、ひとたび『輪の中』に認めてしまえばどこまでも真摯な態度を取る。…だとすれば、一夏は斬り捨てられないかもしれない。しかしそれは、桜華が斬られることを示している。

それにそもそも、桜華が一夏を『輪の中』に認めていたら、という仮定の話でしかない。

桜華が一夏を認めていなければ、やはり一夏は桜華に斬られるだろう。…普段であればそこまでの危険性はないだろうが、今の桜華はセシリアの思わぬ強さに昂揚している。普段があまりに淡泊なため、一度こうなってしまうと割って入るのは至難の業…と言うよりは『輪の中』の者しか割って入れない。

セシリアの心配は無用だろう。こと戦闘という一面で現時点での桜華とセシリアを比較すれば、総合的に見て桜華の方が優れている。そのことは桜華自身分かっているはずであり、そうでなければ『桜華が昂揚している』という現実が否定されてしまう。アツサリと決着がつくはずだった相手が思わぬ強さを持っていたからこそその昂揚だ。

熟さぬうちに果実を取ったところで、美味しくも何ともない。…多少の美味しさはあるかもしれないが、想像できるその後には比べるべくもない。

故に、自分の取るべき選択は一つしかない。

「狼虎滅却———」

総一は自らも武器に霊力を込めながら――

「――はあっ！――」

――桜華を庇うように一夏の前に立ち塞り――

「――金甌無欠！」

――護りの技を繰り出した。



――爆音が鳴り響く。神々しいばかりの光が迸る。爆煙と砂塵が巻き起こる。

それにより、観客席からはアリーナの一切が窺えなくなる。

また、それはアリーナにいる一夏たちにも同じ事が言えた。本来、ハイパーセンサーであればこういった状況下においても情報を得ることが出来る。それほどにハイパーセンサーは優れている。

しかし、今回はそれが仇となった。高感度すぎるが故に、この至近距離での爆音と爆煙は防ぐことが出来なかったのである。

一時的に目と耳がイカレてしまった形だ。失聴、失明の危険性こそないものの、現時点では視界は白く染まり、耳には何も届かない。だからこそ――

「……ではな、私はもう行く。……土壇場で取った行動だ。たぶん、一夏ももう大丈夫だろう」

「分かった。……しかし、今度からは予め知らせておいてくれ」

「可能ならな」

「報告は忘れるなよ？」

「加山に任すさ」

——総一と桜華の会話を聞き取る者もいなければ、見ている者もいなかった。

総一と桜華は持ち前の霊力で『靈子フィールド』を展開し、音と光を遮ったのである。

靈子フィールドとは、平たくいえば『物理エネルギー』と『精神エネルギー』の中間点だ。どちらの特性も併せ持っているが、純然たるカタチが定まっていなかったため——人によって向き不向きはあるが、攻撃性を持たせたり、逆に防御性を持たせたりなど——どうとでもカタチ創れるのが特徴である。

これは個人でも展開できるが、『霊力を持つもの同士がその波長を同調・共鳴させることにより増幅することが可能』という特性も持っている。

もつとも、現在の総一は生身でなければ靈子甲冑を纏っているわけではなく、ISを装着している状態だ。……故に、霊力を全力で行使することは出来ない。現時点でそんなことをすれば、ISが壊れてしまう可能性があるからである。

実際、直前に放った『金甌無欠』からして全力にはほど遠い。

靈子フィールドによる障壁を展開、障壁内の霊力を物理変換することで損傷の修復——生身の場合は怪我の治癒——をし、余剰の霊力を他者に分け与えることで霊力の回復を促す、といった工程を踏むのが本来の『金甌無欠』である。

しかし、先に放った『金甌無欠』は、前方に楯の如き小さな障壁を展開するので手一杯だったのが実状だ。

なので、靈子フィールドの展開も、実質は桜華がほとんどを受け持った形である。……霊力波長を同調・共鳴させることで多少増幅されてはいるが、それでも『破邪の血統』と謳われる膨大な霊力を保有しているが故に、そして他ならぬ真宮寺桜華だからこそ可能なことであった。

なにせ、霊力波長を同調・共鳴する際は、基本的に『触媒』の霊

一夏はIS学園の敷地内を走り回っていた。――確かめたいことがある。もういないかもしれないけど、その確証もない。……なら、いるかもしれないんだ。

その思いに駆られ、ただただ一夏は走り回る。

そして、不意に身体が震えた。瞬間、一夏は勢いよくある方向へと向き直る。――ああ。この感覚は覚えがある。殺気だ。あの日、あの時、あの人が放った殺気だ。

一夏は一目散にその方向へと走り行く。

果たして、その場にあの人はいた。どこかISスーツを彷彿させる装いで……。

「呼んでくれて……助かりました」

「最低限の説明はして然るべきだろうからな。それでも、お前が気にしない様子を見せたのならとくに帰っていただろうが……」

相も変わらずのその態度に、一夏はどこか安心感を覚えた。

「説明、してくれるんですか？」

「最低限はな。一言で言えば、お前は狙われている。『ISを起動させることが出来た男』というその立場故に……。そして、その身に秘めたる霊力故に……な」

「霊力……ですか？」

一夏は戸惑いがちに問い返した。――前者だけなら分からないでもないが、後者は流石にどうかと思う。わざわざここまで手の込んだことをして冗談だとも思えないが、その言葉の連想させるイメージは突飛すぎる。

「ああ。信じる信じないはお前の自由。私はただ語るだけだ。……

そもそも、お前がISを起動できたのもその霊力故だ。どうにも、ISというものは霊力を動力源の一つにしているみたいでな……。調べた範囲内だが、ISの起動者は軒並み一定以上の霊力を保有している。また、基本的に男性はその霊力値が低い。お前は数少ない例外というわけだ。……まあ、何だかんだと言ったところで、霊力もまた『力』であることに変わりはない。そして扱いきれぬ『力』ほど危険なものはない。……霊力というのは善性の表現でな。悪性表現にすれば『妖力』と言うんだ」

「ははっ。霊力の次は妖力ですか……。けど、言葉のもつイメージはおどろおどろしいモノを感じますね」

「まさしくその通り。世界征服だの世界崩壊だの、いつの世もバカげた考えを持つヤツはいるものだ。そいつらにとっちゃあ、お前は格好の獲物ってわけだな。なにせ上手い具合にお前の霊力を暴走させれば、爆発くらいは軽く起こせる。規模としては小さかろうが、何もないところで突然の爆発だ。当然、原因も思い当たるわけがない。怖いとは思わないか？ 特に『学校』なんてのは一つの小世界だ。恐怖はすぐに蔓延する。そして悪意と怪異を招き寄せる。……そうなればあとは終わりだ。悪意が具象化した存在に物理兵器など効きはしない。時間の経過と共に世界は闇の底へと一直線だ。……そうでなくとも、思いがけず『力』を手にしたヤツは吞まれやすい。軽くお前の思考を誘導するなり暗示を掛けるなりすれば、尖兵の一丁上がりだ。いつ男女間戦争が勃発してもおかしくはないだろうさ」

一夏は全身を震わせた。当然ながら、軽々と信じられる内容ではない。寧ろ、バカバカしい、と一笑に付してもおかしくない内容だ。しかし、それが真実正しいならば、幾らかは辻褄が合うのも紛う事なき事実なのである。

「まあ、そうと予想できてみすみす見逃す必要もない。対応策は練られている。……総一がこの学園に通っているのもその一環でな。」

ここまで聞けば予想もついているだろうが、総一も霊力保有者だ。そう……総一はお前の護衛であり、教導役であり、万一の時の防波堤なんだよ」

一夏は言葉が出ない。出せるはずもない。

「……悪いが時間だ。私は帰らせてもらう。あとは総一にでも確認してくれ。それじゃあな」

認識が追いつかない。理解できない。納得できない。……言葉の意味を整理するので手一杯だ。

そして一夏が気付いたとき、その場には自分しかいなかった。彼女がいつ去ったのかさえ分からなかった。

第6話（後書き）

ようやく『一年一組クラス代表選抜戦』が終了しました。
総一もようやく『狼虎滅却』を発動……長かったです。

今回は『サクラ大戦3』より『金甌無欠』をチョイスしました。まあ、その説明は独自解釈によるものとなってますので賛否両論あると思いますが……。

大神さんから『かばう』は外せませんけど、それだと盛り上がり欠けるのでこうさせてもらいました。

感想、お待ちしております

第7話

「えー、散々時間を取ってアレですが……結局、昨日の試合でうちのクラス代表は決まりませんでした！　なので！　いま！　この場で！　クラス代表を決めたいと思います！」

翌日のことである。

朝のSHRにて真耶は声高らかに言い放った。

しかし、そのテンションがおかしい。これ以上なくハイになっている。……よく見れば、化粧で隠されているものの目の下にクマが確認できた。

クラス代表が決まらなかったのも、真耶がハイなのも、その原因は同じであろう。……昨日の試合で乱入者があったためだ。

この様子では、朝まで延々と会議でもやっていたのだろう。

当然、生徒たちもその事には思い至っている。

故に――――

「せんせー！　結局、昨日の乱入者って一体何者だったんですか？」

――――生徒が言及してくるのも、当然といえば当然であった。

「機密事項だ。お前たちにそれを知る権利はない。……以後、その事について言及した場合はグラウンドを十周してもらう。分かったな？」

それを鎮めるのは、当然ながら千冬である。

その威圧を前にしては、如何に騒がしい十代少女といえども黙らざるを得ない。

もっとも、かく言う千冬として詳しく知っているわけではない。言及されても答えられない、というのが正直なところである。

千冬が知っているのは『件の乱入者は一夏の護衛の一人である』ということぐらいだ。

一夏は立場が立場故に、その護衛は一人だけでなければ一つの組織だけでもない。複数の組織、複数の人員が一夏の護衛に当たっている。

だが、当然ながら組織が違えば護衛の仕方も変わってくる。『命』を護ればそれで良しとする組織もあれば、『精神』を尊重してこそである、とする組織もある。……詰まる話、どこに重点を置くかの違いだ。

必然、組織同士で上手い連携など取れるはずもない。故に、身分を示す物さえ身に着けておけば、護衛方法は各組織に一任。報告書と口頭報告を挙げてもらえばそれで良し、というスタンスを取っている。……前例がない以上、この迷走振りも致し方ない。

そして、『昨日の乱入者は織斑一夏の護衛者であり、乱入理由は織斑一夏の行動指針の確認である』という報告が為されれば、その時点で千冬にはどうすることも出来ないのだ。

たとえおためごかしの理由であろうとも、一応のスジは通っている。確かに、自らに危険が迫った際に護衛対象がどのような行動を取るか――逃げるか、或いは立ち向かうか――を知っておくだけでも、護衛する立場の者にとっては大助かりだろう。

仮に、一夏が『立ち向かう』という選択をしたとして、護衛が『逃げの一手』を選択すれば、それだけで足の引っ張り合いが発生する。……結果、生き残れる筈が生き残れないかもしれない。

それを防ぐことを鑑みれば、こういった自作自演も必要だろう。……少なくとも、そう思わせることが出来る。

千冬が疑問を抱くのは、腑に落ちなさすぎるからだ。試合経過と共に録画された乱入者の言葉からしても、疑問を抱く

には充分だ。

あの言い回しでは『一応準備はしておいたけど、まさかこんな理由で乱入することになるとは』といった感じにも聞こえる。

あの乱入は突発的なモノである、とするならば、そうさせた理由は何だ？　そして、それを言わない理由はどこにある？　――千冬の心中では疑問が尽きない。

しかし、それを声高に追求することが出来ないのである。

結果、今の千冬はいつも以上にトゲトゲしい空気を纏っていた。



（霊力だの、妖力だの、挙げ句の果てには総一が俺の護衛で教師役で防波堤だあ？　あーもう、わかんねー！　何なんだよ、クソッ！）

一方、当事者の一人である一夏はこの状況を認識していなかった。……目には入っているし耳にも届いているのだが、考え事に集中しているあまり、その悉くを流^{スルー}してしまっているのだ。

昨日の桜華の言葉が、何度となく脳内で木霊する。

理解しきれるはずもなく、納得もまた然り。何度も自分なりに理解し納得しようとしているのだが、如何せん寝耳に水すぎた。

取り敢えず理解出来たところといえば『自分は男にしては強い霊力を持っているらしい』こと、『ISを動かすには一定以上の霊力が必要らしい』こと、そもそもって『霊力を悪用している組織が自分を狙っているらしい』こと、更には『総一が自分の護衛兼、「力」に吞まれないように導く教師役兼、「力」が暴走した際に抑える防波堤らしい』こと……くらいである。

とは言え、それも言葉の意味を理解しただけであって、立場を理解したわけではないのである。

当然、納得など以ての外だ。

総一や桜華ほどに強ければ『まあ、そういうモノか……』とすん

なり納得も出来る。……が、自分のこととなればその限りではない。霊力だのといわれたところで、自分がそれを認識できていないのだから当然だ。

総一曰く『霊力の発現形質は人によって千差万別。これといったカタチは定まっていない』である。……これでは納得も難しい。

いや、『霊力が実在している』ことには納得がいつているのだ。なんせ総一に実演してもらったのだから……。

総一が刀を握って何かしら集中すると、その刀が色を帯びて輝きだしたのである。刀に何か仕掛けがあるのでは、と思って見せてもらったがとくにそれらしいモノもない。念のため、と何の変哲もない木刀でもやってもらったら、これまた同じく色を帯びて輝きだした。……違いは一つ。木刀の方は内部から破裂をしたかのように砕け散ったのである。

総一曰く『こっちの刀――「神刀・滅却」と違って、木刀は霊力耐性が低いからな……。お前にも分かるように強く霊力を込めたんだから、こうなってもおかしくはない』……である。

これといったカタチにしない素のままの状態では、基本的に『霊力を認識できるのは霊力に目覚めた者のみ』らしい。

とは言え、あくまでも『基本的に』であって絶対ではない。……総一の取った手段はその一つである。

流石にこうなると、一夏としても霊力の存在を認めないわけにはいかない。

しかし、『霊力の実在を認める』ことと、『自分が霊力を持っていると認める』ことは別物なのである。

故に一夏は只管に悩んでいるわけなのだが――――

「それでは、一年一組のクラス代表は織斑くん。また、代表補佐として大神くんとオルコットさんが就任……。以上で問題ないですね？では、拍手をお願いします」

——やけに大きく聞こえた言葉に一夏は顔を上げた。
今、聞き捨てならない単語が聞こえたような……？ ——確認のため、一夏は挙手をする。

「はい、何ですか？ 織斑くん？」

「ちょっと考え事をしていて聞き取れなかったんですけど……今、俺がクラス代表と——」

「はい。多数決で織斑くんがクラス代表に決まりましたよ。大神くんやオルコットさんという意見もやはり出たんですけど、大神くんは芸能人としての仕事、オルコットさんも代表候補生としての仕事があるとのこと……。ただ、お二人とも『辞退をするだけでは応援してくれた方に申し訳がない』ということでクラス代表補佐——つまり、織斑くんのフォロー役ですね——を買って出てくださいました」

「———そうですか」

やけに説明的な真耶の言葉だったが、だからこそ一夏の逃げ道は無くなってしまった。

「一夏」

そこに、後方から聞き慣れた声が聞こえてきた。

「何だ、総一？」

向き直り、一夏は総一に問い掛ける。

「お前は護ると決めたんだろう？ なら、機会を逃すな。『強さ』に対して貪欲になれ。……でなければ、いざ護れなかったとき、辛いぞ？」

最後に付け足された言葉。

一夏は、その部分を話しているときの総一の瞳に、隠しきれない虚無を見た。

（総一、お前は……護れなかったのか？）

思わず訊きたくなるも、一夏は堪える。――人間、誰しも訊かれたくないことの一つや二つはあって当然だ。現に、俺だってそうだ。……なら、無理に訊くよりは、話してくれるのを待った方がよっぽどいい。よしんば訊くとしても、こんな大人数の中でやることじゃない。

「分かった。……ま、考え事に夢中になって話を聞いてなかった俺も悪いしな。……みんなも、こんな俺で良かったら、クラス代表を精一杯務めさせてもらおうよ」

総一の忠告を真摯に受け止め、一夏は頷く。……次いで、僅かに重苦しくなった空気を払拭するためにおちやらけたセリフを言い、最後にはクラス全員に対して了承の返事を返した。

そして、教室内に歓声と拍手の嵐が巻き起こった。



その日の放課後。アリーナに一夏とセシリアの姿があった。最早お決まりとなりつつある総一と箒の姿はない。……総一は相も変わらずの写真撮影で、箒は部活に顔を出している。

だからといって一夏とセシリアしかないわけではない。当然、他にも何人かの姿があった。……が、揃いも揃って二人と距離を取っている。

彼女たちは昨日の試合を見られなかった者たちだ。噂に名高い男のIS起動者。その片割れである織斑一夏の実力が如何ほどか知りがっている彼女たちは、これ幸いと一夏とセシリアにスペースを提供したのである。

「さて、皆さんが善意で距離を開けてくださったことですし、これ以上増えないうちに始めるとしましょう」

「善意で……ね。まあいいや。消化不良なのは俺も同じだし……初っ端から全力で行かせてもらうぜ？」

善意、という部分に対して疑問を覚えながらも、一夏は流した。この場において、そんなのは些末事である。

「構いませんわ。ただ、一つ言わせていただくなれば……わたくしもまた手加減はいたしませんわ！」

言い終わると同時に、『スターライトmk?』が火を放つ。

手合わせという形式こそ取っているものの、これは正式な試合ではない。当然、開始の合図などあるはずもない。……両者が良しと認めた時点で、既に勝負は始まっているのだ。

当然、一夏も準備は整っている。……であるならば、黙って喰らう道理もない。

「甘いぜ！」

セシリアの挙動に集中していた一夏は、放たれたレーザを軽々と躲す。……が、そもそも速射など余程の技量がない限りそうそう当てられる筈もない。

セシリアにとって、一夏に当たらないのは半ば織り込み済みのことである。

では、セシリアは何故そのような真似を行ったのか？ 一夏の機動を制限するためである。

開始当初、一夏の選択肢は多かった。攻撃も可能なら、防御で様子を見ることも可能だった。……しかし、セシリアの速射に反応した——反応させられた——一夏は、回避という行動を選択した。……してしまった。

それは咄嗟の行動である。予め、そうと決めていたのならばともかく、咄嗟の行動である以上、続く行動もまた限られる。

一夏は余裕をもって避けたつもりだが、余裕をもたせすぎたのが実状である。大きく移動してしまったのだ。

今回、一夏は左に避けた。それはつまり、続けて攻撃した場合、右への回避は潰れたと同義である。

当然ながら、やってやれないことはない。……しかし、それをした場合、身体に掛かるGは並大抵のものではない。

では、その状態で更に複数の方向から攻撃を受けたらどうなるか？ 一対一でその様な真似をするのは、通常なら不可能である。……しかし、セシリアにはそれを可能とする武器があった。

「そちらこそ」

セシリアの専用機、『ブルー・ティアーズ』の特殊装備『蒼い雫』ブルー・ティアーズが四方より一夏を襲う。……のみならず、セシリアがその手に握る『スターライトmk?』からも容赦なく火線が走る。

一夏には桜華がやったような『レーザーを斬る』などという器用な真似は出来ない。ワンオフ・アビリティ単一仕様能力である『零落白夜』を用いればその限りではないが、エネルギー消費がバカにならないし、そもそも昨日の今日で上手く扱えるはずもない。……それ以前の問題として、一夏は『零落白夜』の存在を知らなかった。

「ちい……っ！」

自然、一夏の選択肢は回避一択になった。……実際は防御も選択できるのだが、防御とはドッシリと構えてこそである。下手な体勢で受けに回れば、タダではすまないことがままにあるのだ。

曲がりなりにも剣を学んでいる一夏は、当然その事を知っていた。そしてそれ故に、無意識に防御を選択肢から外していたのである。

……ISの稼働経験の少なさが仇になった形だ。

「ぐ……ううつ！」

結果、一夏は回避に次ぐ回避を強制された。……身体に掛かるGはハンパなものではない。

遠からず一夏に体力の限界が訪れた。

そして、左右前後、一夏を囲むように『蒼い雫』を配置したセシリアは――――

「チェックメイト……ですわね？」

――――自身もまた上方から『スターライトmk?』を一夏に向けて宣言した。

「……参った。降参だ」

ゆっくりと周囲を窺った後、自身の体力を加味した一夏は、自らの敗北を受け入れた。

「いや、全力で行くだの言っというてこれだもんなく。スッゲー格好悪いんだけど、俺……」

終わってみれば、まともに剣を振ることさえ出来なかった。……

させてもらえなかった。

これでは、一夏としても素直に敗北を認めざるを得ない。
自然、深い溜息を吐いた。

「まあ、妥当な結果ですわね。……ところで、織斑さんはチェスとかなさいます？」

一方で、セシリアは当然といった調子で呟く。

事実、セシリアにとっては至極当然の結果だからだ。

一夏の専用機である『白式』は白兵専用型である。その装備も『雪片式型』一つしかない。……である以上、接近を許さぬ事を徹底すれば、この結果は当然である。

そう思う一方で、特化型の恐ろしさをセシリアは嫌というほど知っている。なにせ、昨日身を以て味わわされたばかりである。

さて、ISの勝負というものは、戦術の勝負であると同時に戦略の勝負でもある。……少なくとも、セシリアはそう思っている。

何故ならば、他のスポーツの試合とは違い、ISの場合は距離ごと体格ごとといった区分けがないからである。

如何にして自分の距離を保つか？ 如何にして相手の距離を侵すか？ ISの勝負の場合、こういった戦略要素が半ば必須なのである。……戦術がモノを言うのはその後だ。

貴族の生まれであるセシリアは、幼い頃からチェスを嗜んでいる。家族や貴族仲間を始め多くの者たちと打ってきた経験は、確かな戦略眼をセシリアに宿していた。

故に、こと戦略勝負の場合、セシリアの実力は高い。

その一方で、戦術素養は今ひとつである。今も向上させている最中だが、戦術に重きを置くタイプ——つまりは一夏である——と戦術勝負をした場合、セシリアの敗北は半ば確定事項だ。

また、戦略に重きを置く者の常として、セシリアは不確定要素に弱い傾向がある。ある程度なら経験則から対応できるものの、度が

過ぎていればそれも叶わない。……昨日の桜華が正にそれだ。

だからこそ、今回のセシリアは油断せぬことを第一としていたのである。

「チェスはあんまり……。将棋ならそこそこ……だな」

セシリアの問い掛けの意図が分からぬものの、一夏は素直に答える。この状況下での問い掛けが、無意味なものだとは思えないが故のことだ。

「ショウギ。……たしか、チェスと似て非なる遊技でしたわね？

でしたら、織斑さんには今まで以上にショウギを打つことをお勧めしますわ。……今回の勝負、織斑さんとしては腑に落ちないんじゃないでしょうか？」

「……確かに。良いように転がされたって言うか……。最初からセシリアの掌の上だったって言うか……。まあ、そんな感じだ」

「ええ。つまりはそういうことです。有り体に言えば、今回の勝負、わたくしたちは最初から違う土台で戦っていたんですよ。わたくしは戦略で勝負を仕掛け、織斑さんは戦術で勝負を仕掛けてきたんですの」

「戦略と戦術……」

「はい。戦略は全体の流れを決めるもの、そして戦術は個の結末を決めるものです。戦術勝負をしていた場合、十中八九わたくしの負けでしたでしょう。……ですが、わたくしはそれを認識していたからこそ、戦術勝負に持ち込ませないことを念頭に置きました。開始早々速射をすることで織斑さんから攻撃という選択肢を奪い、選択肢それ自体を狭め、その後も同様です」

「……なるほど。つまり、俺は『選択肢が狭められたことに気付かなかった』からこそ、良いように転ばされたと感じたわけだ」

セシリアの言葉を聞き、一夏は納得した。

言われてみれば、昨日の試合は『戦術勝負』での約束だったように思える。……まあ、実際はご破算になったわけだが。

そして、今日の手合わせにはそういった約束もない。互いに全力、手加減無し。……決めたのはそれだけだ。

結果、戦術勝負に持ち込む前に、セシリアの戦略に破られた。

「だから、チェスや将棋なのか……。分かった。アドバイス、ありがとう」

一夏はセシリアに感謝した。――これで、俺はまた強くなれる。……それが、いつか『恥じることのない強さ』へと繋がっていくはずだ。

昨日の試合で己の信念の難しさを再確認した一夏は、新たな階きざしを得られたことを歓迎した。

第7話（後書き）

割かし早く投稿。

一夏対セシリアはこんな運びとなりました。

そろそろ総一が撮影ばつかなことにツツコミが入りそうな気がしなくもない今日この頃です。

感想をください。貴重な動力源となります。ツツコミでもかまいません。コミュニケーションがとりたいです。

第8話（前書き）

パーティーの時系列を原作と変更してます。

原作を読むたびに『遅すぎじゃない？』と思うもので……。

というわけで『織斑一夏クラス代表就任パーティー』編です。

第8話

「織斑くん、クラス代表の就任おめでとうっ！」

「おめでとーっ！」

その日の夜――正確には夕食後の自由時間――寮の食堂にて盛大にクラッカーが打ち鳴らされた。

「これは……？」

一夏は呆けた声を上げるしか出来なかった。部屋でくつろいでいたところを呼び出され、ついてきたらコレである。……反応が弱くても無理はないだろう。

「一体……？」

再度、呆けた声を上げる。

周囲を見れば、紙で作った輪っかがこれでもかと言うほどに飾り付けられており、壁には『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と見事な達筆で書かれた紙が掛けられている。……であるならば、一夏の反応も当然と言えるだろう。

何故なら、一夏は少し前にここで夕食をすませたばかりなのである。――断言してもいい。その時には、こんな飾り付けなどされていなかった。

「驚いたか、一夏？」

「そりゃ、いきなりこうもなれば驚くだろ？」

横から掛けられた総一の声に一夏は逆に問い返した。これで驚か

ない方がおかしいだろう？ お前は違うのか？ ……と。

「なら、良かった。俺も筆を執った甲斐があったというものだ」

「って、あれ書いたのお前かよ！？」

一夏は思わず叫んでしまった。――何というか、こう、ハイスベックなヤツだとは思っていたけど、まさか書道まで出来るとは……。

「フッ……この程度、日本男児たる俺にとっては容易いことだ」

短い髪をかき上げつつ、いつもなら言わないようなセリフを吐く総一である。

流石の一夏も、この状態には疑問を抱いた。

（何か、様子が変わだな……？）

思いつつ、注視する。……よくよく見れば、その顔はいつも以上に赤く染まっている。

（風邪、じゃないよな……？ だとすると……）

ある推測を抱いた一夏は、用意されている飲み物やお菓子へと視線を転ずる。……案の定、アルコール入りのケーキやチョコレートで占められている一角があった。

まあ、考えてみればおかしくない。

これほどの準備、生徒だけで行えたとは些か考え難い。食堂勤務のスタッフにも手伝ってもらったと考える方が妥当だ。飾り付けや飲み物だけならばともかく、明らかにデキの違うお菓子があれば尚更である。

「……なるほど。カプリスさんたちにも手伝ってもらったわけだ」

口ではそう言う一夏であったが、その心中は驚きに支配されていた。――菓子に含まれてるので酔うなんて……総一のヤツ、滅茶苦茶アルコールに弱えてやんの。スッゲー意外だ。

だからだろうか、一夏はその人物の接近に気が付かなかった。

「あゝん、もう！ そんな他人行儀な言い方はなしですよ、一夏くん！ 私のことはカ・グ・ヤって呼んでちょうだいってば」
「か、カプリスさん！？」

突然後ろから抱きつかれ、耳元で囁かれた一夏は狼狽を露わにする。背中に感じる弾力が嬉しいやら恥ずかしいやらで何とも言えない。

「カ・グ・ヤ……OK？」

そんな一夏の反応が分かっているのか、カグヤは楽しそうに再度囁くだけで一向に離れる様子を見せない。

「カグヤさん、あまり一夏を苛めないでくれないか？」

流石に見かねた総一が横合いからたしなめるも――

「うゝん……？ 総一くんの頼みなら聞いてあげたいんだけど、こればかりはね。だって、こうでもしないと一夏くんってば、私のことを『カプリス』さんで定着しかねないんだもの」

――効果はなし。……その返答を聞いて、総一は一夏の救助をアッサリと諦めた。

「……だ、そうだ。一夏、構わないから名前で呼んでやれ。寧ろ、名前で呼ばん限りずっとそのままだぞ？　思えば、俺の時もそうだった……」

項垂れながらのその言葉には、これ以上ないほどの実感が込められている。

初対面の、それも年上の女性を会って間もなく名前呼びするのはどうかと思っている一夏としても、それを聞いてしまえば話は別である。

「か、カグヤさん？　すみませんが、離れていただけませんかでしょうか？」

「はい」

言った瞬間、何の躊躇もなく離れたカグヤである。

ちよつと惜しかったかな？　と一夏が思ったとしても罪はないだろう。

何故ならば、一夏も健全な男子なのだから……。

とは言え、その心境を理解できるのはこの場に総一しかいなかった。そして総一は好き好んで女子を敵に回す気など持ち合わせていなかった。

「一夏、その締まりのないツラは一体どういうことだ？」

肩に手を置かれ、おどろおどろしい声で囁かれた一夏は全身をギクシャクさせながらも振り向いた。……視線の先には案の定というべきか、箒の姿がある。

「い、いや、箒？　これはな……」

「ああ。何も言わんでいいぞ？　言わなくても分かっている」

「そ、そうか……。流石は箒、幼馴染みは伊達じゃないな」

言いつつも、一夏の声は震えている。

箒が――笑みを浮かべた表情や柔らかな声音とは裏腹に――肩に置いた手の握力を増しているからである。……。その威力たるや、肩に手が食い込むんじゃないか？　と思うほどである。

「ああ、伊達じゃない。だからよく分かっている。……。お前が年上の色香に惑ったことがなあーっ！」

笑みから一転。箒の表情は般若のそれへと変貌した。……。次いで、どこから取り出したのか木刀を構える。

末路を覚悟した一夏だったが――――

「まあまあ。箒さんも落ち着いて。今はめでたい席なんだから、血の雨を降らされるのは流石に困る」

――ここに来て総一の助けが入った。……。相変わらず、そのセリフはどこかおかしかったが。

しかし、そう言われてしまえば箒としても剣を納めるより他にな
い。

一夏のこととなれば見境が無くなりがちだが、礼儀というものは弁えている。……。篠ノ之箒、現在十五歳。恋する乙女の心境は中々に複雑だった。



そんなこんなでワイワイとやっているときである。
不意に、総一は身体に温かみを覚えた。

抱擁。……誰かが自分を抱きしめている。

（いや、『誰か』というのは適切じゃないな……）

ああ、自分はこの手の主を知っている。この香りの主を知っている。この気配の主を知っている。

「えへへ。楽しんでるね、そくくん」

——そして、この声の主を知っている。

「ああ、楽しんでるよ。……せっかく幼馴染みから誘われたんだ。楽しまないわけにはいかない。そうだろう、本音？ けどまあ、入学してから今まで、ちっとも話し掛けてきてくれなかったから、てっきり嫌われたのかと思ってたよ」

「ぶ。私がそくくんを嫌うなんて有り得ないよ。こう見えて私はTPOが分かる娘だから、気を遣ってたんです。……お嬢様と同じで、普段のそくくんは張り詰めすぎなんだよ。もっと楽にしたらってバチは当たらないよ？ ……まあ、言っても聞いてはくれないんだけどさあ」

相も変わらずの間延び口調に、マスコット然とした格好も相俟って、総一は自然と癒された。

大神家も更識家も『裏』の世界にこそ、その名を轟かせている。

……である以上、両家の付き合いがあるのは半ば当然であり、更識家に仕える布仏家と付き合いがあるのも必然であった。

年齢の近さも相俟って、幼い頃は更識姉妹や布仏姉妹と一緒に遊び回ったものである。

とは言え、それも以前の話。

最近では更識家も布仏家も年末年始の会合などを除けばそうそう

会うことはない。……けれど、こうして本音と話していると、それを感じることもない。——総一は幼馴染みの偉大さを実感する。

「そっか……。ゴメンな、本音。けど、こればかりは変えられない。たぶん、姉さん——十七代目『楯無』もそこは俺と同じだろう。……俺も姉さんも、甘えてるんだよ。家名や立場に縛られない、ただの総一であり、ただの……であることを知っている、知ってくれている本音たちにさ」

どこか遠くを眺めるような、在りし日を懐かしむような、そんな瞳で総一は宙を眺めつつ、言った。

幼い正義感に任せて力を振るった。『力』の意味、『正義』の何たるかを知らなければ理解もせぬままに……。そして、その果てに起こった結末。それを経てようやく自覚するに至った、己が剣を執る『理由』、己が靈力ちからを持つことの『意味』。……忘れたくても忘れられない、決して忘れてはならない、苦い、苦い記憶。

自然とそれが思い出され、総一は首を横に振るった。——今は、過去を思い出すときじゃない。

「まあ、今はただの総一として目一杯幼馴染みに甘えさせてもらおうとするさ。……と言うわけで、本音？ 取り敢えず座ろう」

しんみりとした態度を一転させた総一は、自らに回された腕を掴む。

それは有無を言わせない、けれど決して強すぎない、絶妙な力加減だ。

そして、そのまま回転。

男子の平均身長より僅かに高い総一と、女子としても小柄な部類に当たる本音だ。

「うわあゝ……!？」

自然、本音は宙に浮く形となった。

総一は絶妙なタイミングで停止。本音の身体を持ち替える。……俗に言う『お姫様だっこ』であった。

「目、目が回るゝ」

零す本音を慈しみの笑顔で見つつも、総一は椅子へと真っ直ぐ歩き出す。

当然、そんなことをすれば人目につく。

青春真っ盛りな十代の女子ばかり――当の本人と他一名を除く――とあって、瞬く間に歓声が響き渡る。

私も――、と言う声に対し、総一は総一で微笑みながら、この娘は特別でね、などと返すものだから、その輪は更に広がっていく。

「笑顔があふれてるのって、素敵だよな？」

「そうだねゝ」

にこやかに問い掛ける総一に――目の回りも治まったのか――本音もまた笑顔で返す。

非常に穏やかな空間であり時間である。……この二人を見るだけならば。

「ちょ、ちょ、まっ!？ 押すな、押すな、潰れる!？」

どこからか一夏のそんな声が聞こえたような気がしたが、総一は気のせいと流すことにした。



「はいはい、新聞部です！ 話題の男子新入生、織斑一夏君と大神総一君に特別インタビューをしましたー！ あ、私は二年の黛薫子。新聞部の副部長をやってます。よろしくー！」

そんな声と共にその人物が現れたのは、どれほど時間が経ってかわらだろうか。

一夏がクラス代表に決まったのは今日だというのに、なんともまあ情報を得るのが早いことだ。

ふと、そんな取り留めのない感想を覚えた総一だったが、すぐに忘れることにした。――今の俺は、ただの総一だ。本音とのまったり時間を費やしてまで、気にすることじゃない。

そして、よく冷えた紅茶を口に含み――

「同じく！ 私は新聞部所属の四季紗良^{いちとせ さら}！ みんな、よろしくー！
はい、これ名刺ねー」

「ぶーーーっ！？ えほえほっ、げほっ……」

――勢いよく吐き出した。……そして咽せた。

「そ〜くん、大丈夫〜？」

「あ、ああ。大丈夫。……と言うか、あの人は一体何をやってるんだ？」

背中をさすってくれる本音に礼を言い、総一は呆れ混じりに呟いた。

視線の先には四季紗良と名乗った人物。……十中八九、幼馴染みであり、当IS学園の現生徒会長である十七代目更識楯無その人である。

偽名を用い、軽い変装もしているようだが、見る者が見れば一発

で分かる。そもそも、『四季紗良』^{そのな}からして『更識』のアナグラムだ。……こんなお粗末な仕事は、彼女の柄ではない。

では、どういうことか？ と抱いた疑問はすぐに解決した。

これ見よがしに『フツフン、驚いたー？』と言わんばかりの目で見られれば流石に分かる。……ついでに言えば、その表情は『いやー、良い光景^えが見れたわー』と言わんばかりである。

「フ、フフ……。そうか、そういうことか……。良いだろう。その挑戦、受けて立つ……。！ お前が俺を弄るというのなら、俺もまたお前を弄ってやろう……。！ 弄っていいのは、弄られる覚悟のあるヤツだけだということを、その身に教えてやるぞ、更識楯無……。！」

本音とまったりした時間を過ごすことで、公人としての仮面を外して限りなく私人に戻っていたことに加え、アルコール入りの菓子を食したことで軽く酔っていた総一である。

やはり、どことなく壊れていたらしい。

その、やけに芝居がかった言動は――――

「あ、あのー、そーくん、大丈夫ー？」

――――隣に座る本音が思わず心配するほどである。……何が『大丈夫』なのか、本音自身上手く問い掛けることは出来なかったが、とは言え、流石は芸能人ということか、その振る舞いはこれ以上ないほどサマになっていた。

「フツ、大丈夫だ本音……。！」

「そーくん……。！」

その、聞く者に安心感を抱かせるかのような力強い言葉に、本音は顔を輝かせる。

「伊達に普段から女所帯で生活しているわけじゃない。弄られる術も心得ていれば、弄る術も心得ている……！」

「そ〜くん……」

そして次の瞬間、本音はその顔を曇らせる。……言葉に込められた力強さは変わらないのに、ちっとも安心することが出来なかった。

「さあ、いざ征かん！ 伊達にダークロード（かつい『黒い総一』、転じて『暗黒面を総べる』と為す。B y 加山雄輔（かいつしる）と呼ばれているわけではないことを思い知らせてくれるわ！」

ポーズを決め、やけにノリノリで叫ぶ総一である。

「そ、そ〜くんが壊れちゃったよ〜っ!？」

本音に出来るのは、頭を抱えて泣き叫ぶことだけだった。



一方、その頃。

このパーティーの主役である一夏は質問攻めにあっていた。

普段ならこんなとき頼りになるであろう総一は、今回に限っては違う。

その言動もどこかおかしかったし、ましてや今の総一は本音とまふたりのせかいたたり空間を形成しているのだ。

流石の一夏もそんな場所に近づく勇氣はなかったし、声を掛けるのは無粋だと感じていた。

そんなわけで、どうにかこうにか一夏は質問を捌いているのであった。

「クラス代表になったわけだけど、どう？ 自信のほどは？」

「そうそう自信なんて持てませんよ。今日もセシリアに為す術なく伸されたばかりですから……。けどまあ、選ばれた以上は全力で取り組みだけです」

「じゃあ、同じ男子である大神君のことはどう思ってる？」

「総一は強いです。剣の腕一つ取っても、俺より遙か上にいます。それ以外にも色々頼りになりますし……。ただ、普段から頼ってる俺が言うのもなんですけど、本当に大丈夫なのか心配に思うこともありますね……」

答えながら、一夏は朝に見た総一の瞳を思い出す。――普段の総一からは、あんな瞳をするなんて想像も出来なかった。けど、逆に考えればそれは、『隠しきれないほど疲れてる』ってことじゃないのか……。ああ、きっとそうだ。俺以上に色々やってる総一が、疲れないなんてことあるはずがない。

「……と言うと、織斑君も剣を学んでる？ もしもし、織斑君？ 訊いてる？」

「あ、ああ……！？ すみません。ちょっと考え事をしてました。……それで、何でしたっけ？」

「さっきの織斑君の言葉からすると織斑君も剣を学んでいるようだけど、それで間違いはない？」

怒った様子も見せずに質問を繰り返す薫子。……本来であればもっと弄って遊びたいのだが、同行者の存在がそれを許さなかった。いや、普段の性格を鑑みれば、この場に同行してもおかしくはない。けれど、『四季紗良』などという偽名を名乗ったり、軽い変装もしたり……と、その気合いの入れようが普段の比ではない。

生徒の中では親しい、と自他共に認めている薫子だが、それでも

IS学園という『広く小さな枠組みの中』における話でしかない。

藪をつついたらどうなるかは、藪をつつくまで分からないのである。……である以上、薫子としては『藪をつつく』という選択肢は選べない。なにせ対象が対象だ。何も出てこなければそれでいいが、下手をすると出てくるのが蛇ではまず龍ということも有り得るのだ。

少なくとも、そういう可能性があるだけで、薫子が尻尾をまくるには充分すぎた。

そんな薫子の心境など知る由もない一夏は――

（落ち着いた人だなく。やっぱ、上級生ってのはこうじゃなきゃな。うん、まさに『頼れる先輩』って感じだ）

――などという感想を抱いていた。……登場時のハイテンションなど忘却の彼方である。

「はい。正確には、学んでいた、ですね。小さい頃、箒――篠ノ之箒の家でやってる篠ノ之道場に通ってました。束さんの件があつて箒の家族が離散してからはそれっきりだったんですが……二年前、とある人の剣を見る機会がありまして、やけに心惹かれたんですよ。それで、そこからまた剣を再開しました。とは言え、千冬姉――織斑先生に教えてもらうのは気が引けましたし、他に教えてくれる人もいなかったんで我流ですけどね。まあ、そんなわけで、俺の剣は『邪道』と呼ばれるモノだと思いますよ。なんたって異なる流派の剣を勝手に組み合わせたわけですし……」

その言葉を聞いて、腑に落ちたのは箒である。

一夏の学んだ剣――篠ノ之流剣術に限ってのみにえば、箒の造詣は一夏以上だ。家伝剣術であることに加え、それを学ぶことを好みこそすれ厭いはしなかったのだから当然といえば当然といえるだろ

う。

そして、ここ最近専ら一夏と剣を合わせてきたのである。

彼女が一夏の剣に疑問を抱くのは必然であつた。

大筋は篠ノ之流剣術と重なる。……しかし、あくまでも『大筋』だけなのだ。一夏の剣は『個人の差』といえる範囲を明らかに逸脱していたのである。

篠ノ之流劍術ならば、そこで停止する。……だが、一夏の剣は止まらない。

篠ノ之流劍術ならば、そこで突きへと移行する。……だが、一夏の剣は足下への払いへと繋がる。

その一方で、篠ノ之流劍術の流れのままに終わることもあった。これで、疑問を抱くな、という方がおかしい。

であるからこそ、一夏の言葉を聞いた筈は、憤慨するよりも寧ろ納得してしまったのである。

それに、『他流の剣を組み合わせる』というのは、言葉にすれば簡単だが実行するのは難しい。……しかし、一夏はそれをやつてのけたのだ。

箒にとって、それが意味するところはただ一つ。『一夏が氣を入れて劍に取り組んでいた』という事実だけなのである。

たしかに、自分の流派以外にも手を出されたのは腹立たしい。…
…けれど、この喜びを前にしたら、そんなモノは路傍の石も同然だ。

「そうですか。……では、時間も遅くなってきましたので、最後に写真を撮ってよろしいですか？　最初は専用機持ちの個人写真。その後は組み合わせを変えてツーショット。それで三人写真を撮ったら、最後にクラス全員の集合写真ということで如何でしょう？」

薫子の言葉。否はなく、クラス全員がそれに賛同した。



後日。

「フハハハハハ……ッ！ さあ！ 余すところなく撮るがいい！」

そんな自分の醜態が流れる映像を見て、頭を抱えて身悶える総一の姿があったとかなかったとか……。

第8話（後書き）

楯無会長、颯爽登場です。……まあ、ほんの顔見せですが。

楯無の本名、早く出てくれないかな。……などと思いながら過ぎす今日この頃。

あと、総一が壊れました。やっぱり人間なんだから、こういう愛嬌もないとダメですよ？ ……第二次スパロボZの影響か福山ボイスで脳内再生されてます。

ホント、一夏然り総一然りでヒロインを誰にすべきか迷います。

一夏はISメインヒロイン五名＋1、総一は華撃団及び更識姉妹＋1、と候補は決まってるんですけど。……まあ、1からアルファに変わる可能性も無いわけではないですが。

感想、ツッコミ、ご指摘、お待ちしております。

ヒロインの件、よろしければ感想がてら記入ください。参考にさせていただきます。

幕間：風鈴音 1

「どうということだ？」

「簡易測定ではAランクを叩き出したんだろう？」

ガラスの向こうで行われている会話。

それをハイパーセンサーで聞き取りながら少女は思う。――いい気味だ。フン……何がISだ、くだらない。……さあ、もういいだろう？　これだけやれば、もう芽がないと分かっているはずだ。だから、さっさと解放してくれないか。

「やれやれ、大の大人が揃いも揃って何を言っているんだか……。そんなの、これ以上なく理由がハッキリしているじゃないか？　……ああ。まったくもって一目瞭然だ」

しかし、そんな声が聞こえてきては、少女としては堪らない。本当に理由が分かっているかどうかなどどうでもいい。ただ、その可能性が提示されるだけで彼らには充分なのだ。そうすれば、それを理由に留めておくことが出来るのだから……。

「あなたには理由が分かるというのですか？」

止めてくれ、と少女は切に願う。

それを聞き届けてくれたのか否かは分からない。だけど、確かに声の主はこう言ったのである。

「簡単じゃないか。彼女はISを嫌っているんだよ、これ以上ないほどにね……。まあ、考えてみれば当然の話さ。確かに、引き金となったのは彼女がISの簡易測定でAランクを叩き出したことだけ

ど……そもそも、ISなんて物がなければそれすら起こらなかったわけだからね。両親の離婚、友人との別離、そしてこうなることを予測できなかった自分自身。……それらに対する行き場のない怒りを、彼女はISに吐き出してんだよ。……君たちも、こんな簡単なことが分からないんならISの研究なんて止めることだね。ヒトの感情を蔑ろにしてしまえば、得られるものとてたかが知れている。それと、彼女の身柄はボクが引き受けさせてもらうことにするよ。これ以上君たちに任せていたら、彼女が壊れてしまうかもしれないからね」

果たして、それは救いか否か。
分かっていることはただ一つ。……これが、凰鈴音と李桃雫^{リタオナ}の出会いだったということである。



「……礼は言わないわよ？」

改めて個室に二人きりとなった鈴音は、開口一番にそう言った。
一方、言われた相手は不思議そうに首を傾げた。……中性的な顔立ちで眼鏡を掛けている。それだけならば男か女か分からないが、僅かな、しかし確かな胸部の膨らみが、女性であることを表していた。

「礼？ 君はおかしなことを言うね。そんなものは必要ないよ。ボクが君に示せる選択肢は彼らより多いけれど、そのどれもが君に苦痛を味わわせることに違いはないからね。……まあそれはともかく。自己紹介というか？ 円満な人間関係を築くのに自己紹介は必須だからね……。ボクは李桃雫。桃、もしくは雫を日本語読みにして『シズク』と呼んでくれると嬉しいね。日本語は出来るんだろう？」

「ズケズケと言ってくれるじゃない。けど、余計な気を遣わなくて済む分、その方が楽なのは否定しないわ。……ええ、確かに日本語は出来るわよ。知っているみたいだけど、あたしは凰鈴音。鈴と呼んでちょうだい、桃」

視線が交わる。互いに微笑を浮かべての挑発行為。

これは主導権争いだ。やりすぎも良くないが、易々と下手に出る必要もない。

「フン……取り敢えず、気概は上々だね。表立ってその態度を取っていなかった点も、まあ評価に値するよ。……彼らはデータだけを見て肝心の人間を見ていない。そのくせ『反抗的な態度』には目端が利く。君とはこれ以上ないほど相性が悪い。……考えてやったわけじゃないね？ 感じてやったのか。……ああ、まったくもって君は面白い。……さて、鈴？ 断言しよう。ボクと組むのが、君の欲しいモノを揃える上で最良にして最悪な道だ。……その上で訊ねるけど、ボクの手を取る勇氣はあるかい？」

最初に降りたのは桃雫だった。

しかし、その実態は違う。……降りたと見せかけての先手である。結果、鈴音の選択肢は狭まった。

鈴音は思考する。

手を取らなければ、恐らくはすぐに解放される。日本に行くことも出来る。父さんは分からないが、一夏や弾に会うことも出来る。……けど、そこまでだ。なにせ、生活基盤がないのである。曲がりなりにも自分がここににいるからこそ生活が出来ている、ということぐらいは分かっているのだ。簡易検査であれど、Aランクを出したからこそ政府から莫大な援助金が出ているのだ。ここから解放されるということは、その援助金も消えてしまう、ということの意味している。……場当たりのにもほどがある選択だ。

それから数日が経った。

（悔しいけど……調子がいい。一夏とも弾ともタイプは違うのに、桃とはなんでか馬が合う）

桃雫の姿を横目に捉えつつ、鈴音は心中で唸った。

あんなやり取りをした手前、すぐに認めるのは癪に障る。……けれど、認めざるを得ない。

未だ座学のみではあるが、桃の教え方は上手い。他にはどうか知らないが、こと凰鈴音にとってはこれ以上ない効果を示している。

また、桃の場合、表層の態度とは裏腹に、その内面は非常に細やかだ。

距離感、とでも言えばいいのだろうか。それを測るのが上手いだ。

曰く『その程度簡単に分からないようじゃ、人機一体なんて夢のまた夢だよ』……である。

どうも、桃の夢は『人機一体』と呼べるモノを創ることらしい。

篠ノ之博士が開発したISはその一つのカタチではあるが、万人向けとは言い難い。……桃が目指しているのはその先。ISの進化・発展型と呼べるモノだ。

それがどれだけ途方もない夢なのか、畑違いの鈴音にも想像はつく。

剣人が一代で剣の頂を目指すような……そう、言うなれば『見果てぬ夢』だ。

今の御時世、そんな途方もない夢を持って生きている者などそうはいない。……しかしだからこそ、敬意を抱くに値する。

「ああ、鈴？ 出掛けるから準備をしてくれるかな？」

「はあ？ 何だってあたしがアンタのために準備をしなくちゃいけないのよ？」

横目で見ていた気恥ずかしさも相俟って、鈴音は顔を赤らめつつ反論した。

「？ ああ、そうか……。うん、言葉の齟齬、というやつだね。確かにボクも出掛けるけど、君も一緒に行くんだよ。だから、君が出掛けるための準備をしてきてくれ。……と、これなら通じるかい？」
「分かったわよ。……で、出掛けるってどこに行くのよ？」

「ん？ カラオケ。君がどれだけ歌えるのか把握しておかなきゃいけないからね」

うん、行き先は分かった。歌うのは好きだし、その点も問題ない。それに何より気分転換にはもってこいだ。……けど、何で『あたしがどれだけ歌えるのか把握する必要がある』っていうのよ？ ——
鈴音は怪訝そうに桃雫を見やる。

「ボクと組んだ時点で、君は自動的に代表候補生になっているんだよ。そして、代表候補生の仕事はISだけじゃない。メディア露出も立派な仕事なのさ。何と言っても、一つの国そのものの代表になりうる可能性があるんだからね。いざそうなったときにナメられなためにも、自国内は勿論のこと、他国にも知名度を知らしめておく必要があるのさ。国家の顔が無名じゃあ、格好がつかないだろう？ ま、そうは言っても君は格別だ。何たって見栄えがいいからね。必然的に、それを活かした仕事が回ってくるのさ」

「……ってことは何？ あたしに人前で歌えと？」

「それは結果次第だね。問題ない力量なら歌ってもらうし、そうでなければ他に回すさ。今回の『代表候補生』の仕事であって『凰鈴音』の仕事ではないからね」

鈴音に答える桃雫。……この言い回しこそが言葉の妙であろう。

確かに歌唱力を調べに行くのは事実だろう。……しかし、続くセリフは要注意だ。何故ならば、『今回』ということは『次回』を始め別の機会もある、ということだからだ。そして、代表候補生なら誰でもいい仕事もあれば、凰鈴音でなければ駄目な仕事もある、ということも示している。

結局のところ、遅かれ早かれ凰鈴音が歌うのは確定事項なのである。

当然の如く、鈴音も言葉の裏に隠されたその事実を読んだ。

「まったく……。アンタってホントに言葉遊びが好きよね、桃。たった数日で、初めて会ったときの齒に衣着せぬ物言いが懐かしくなるとは思わなかったわよ」

「お望みならそうするのも吝かではないけどね。君だってこちらの方が好みだろう？」

「フン……。確かにね。それは認めるわよ」

まったくもってやり辛い。一夏ほど鈍感なのも正直どうかと思うが、桃ほど察しがいいのも逆に困りものだ。——そっぽを向きつつ、鈴音はそんなことを考えた。



あれから数ヶ月後、鈴音と桃雫は日本にいた。

そして現在——

（何でこんなことに……？）

——顔には笑みを浮かべつつも、鈴音の心中は暗かった。覚悟はしていたが、ここにきてビビってしまった形である。

「さうて、今週の『歌謡・Tuesday』！ ゲストはこちらのお二方！ 『BLOSSOM』を離れ、故郷でソロ活動をしていた李桃雫！ そして、そんな彼女の相手となった中国の代表候補生、鳳鈴音！ 二人揃ってその名も『音雫』！ 単純明快！ だが、それ故に覚えやすい！」

現在、彼女たちが出演している『歌謡・Tuesday』は、日本でかなりの人気を誇る、生放送の音楽番組だ。……日本にいた頃は、鈴音も欠かさず見ていた番組である。

普通であれば、もっとマイナーな番組から出演するのが妥当であろう。

しかし、彼女たちは普通ではなかった。……正確に言えば、桃雫が普通じゃなかった。

（コイツはく！ 何だってこんな大事なことギリギリまで言わないのよ！ いやまあ、長らく一緒にいて全然気付かなかったあたしもどうよ？ ってなもんなのは認めるけど……）

思い出し、桃雫に怒りを覚える一方で、鈴音は自分の間抜け振りに腹を立てた。

数年前にデビューした若手アイドルグループ。それが『BLOSSOM』である。そのメンバーは日本人だけで構成されているわけではない。……が、それ故に日本以外——厳密に言えばメンバーの故郷——でも人気を博している。実際、鈴音も好きなグループだ。ならばこそ普通は気付きそうなものだが、桃雫は公私がまったく別物であった。故に、鈴音は今回の仕事を持ちかけられるまで気付くことがなかったのである。所謂『同姓同名の別人』と認識していたのだ。

それはともかく。

桃雫は、暫く離れていたとは言えそんなグループの一員なのであ

る。

つまり、実績も十二分にある、ということだ。

今回の出演はそれ故のことである。

メインは桃雫で、鈴音はおまけだ。……少なくとも、それが番組側の意図だろう。

そのこと自体は、鈴音としても大助かりである。見掛けによらぬ度胸を持つ彼女といえど、流石に限度というものがあるのだ。

しかし——

「ところで、お二人の出会いはい体どういったものだったのでしょうか？ 差し支えなければ教えていただきたいのですが？ よろしいでしょうか、鈴音さん？」

——おまけといえども、決して映らないわけではないのである。……それだけならまだしも、このように話を振られることもあるのだ。

「出会い、ですか……。そうですね、正直に言えば睨み合いです」

「は？ 睨み合い、ですか？」

「はい。睨み合いです」

満面の笑みで答える鈴音。……当然の如く、会場は静寂に包まれた。

「補足すると、互いの立场上仕方がなかったんですよ。前にも言ったかもしれませんが、ボクの実家は会社をやってるんですね。名前は『李総合機械保障』っていうんですけど、欧州の『ホワード技研』や日本の『神崎重工』と技術提携したり、結構幅広くやってるんですよ。そんな中で新しく代表候補生に選ばれた娘がいるとなれば、やっぱり確認しないわけにはいかないじゃないですか？ 何と

言っても貴重なISコアを提供するわけですからね。こっちも技術屋としての誇りがある以上、生半可な相手に提供したくはないですから……。まあ、その結果が睨み合いなわけです。言わば『誇り』のぶつけ合いですね」

機を見計らい、桃雫が口を挿む。当然ながら、口から出任せの嘘八百。何とも見事なフォローである。……が、今気にするべきはそこではない

気にするべきなのは『何故、鈴音はこのような目立つ真似をしたのか？』……である。

目立ちたくないのなら、話を振られた際に当たり障りのない返答をしておけばいいのだ。……しかして、実際に鈴音が取った行動は真逆。結果、これ以上ないほどに悪目立ちしてしまった。

つまりは、それこそが答え。鈴音は目立つために敢えてあの様な返答をしたのである。……初めこそ若干ビビっていたものの、持ち前の負けん気で乗り切ったのだ。

どのような話題を振られるかなど分かったものではないのだから、あの返答もその場で考えてのものである。

そもそも、今回の出演を持ちかけられた際に、鈴音は桃雫から――推測ではあるが――裏事情を聞いているのだ。……まあ、その場では軽い口喧嘩が始まってしまったが、治まるところに治まったのだから、結果的に問題はない。

そして、その際の治めどころが、鈴音はとにかく目立つことを第一にする、桃雫はそれを全力でフォローする、の二点である。

鈴音にとって、これは父親探しの一環なのである。悪目立ちだろうと何だろうと、とにかく目立ってしまったえば人々の口端に上る。そうすれば、父親から何らかのアプローチがあるかもしれないのだ。……一番いいのは以前の住所にそのままいてくれることだったが、残念ながらそちらはダメだった。

つまるところ、二人共が有言実行したにすぎない。……同時に、

それは二人の信頼・信用関係の表れである。人柄、能力共に信を置いていなければ、怖くて実行など出来るものではない。

「な、なるほど。『誇り』のぶつけ合いですか！ うーん、格好いいですねー！ さて、どうやら準備が出来たようです。それでは歌っていただきましょう！ 『音零』でデビュー曲、『オトノシズク』です！」

司会の言葉に押され、ステージに立つ。

間もなく、軽快なメロディーが流れてきた。

それに合わせ、二人は歌う。時に跳ね、時に左右対称に身体を動かしながら……。鈴音など、軽々とバク宙を決めている。

そして、曲の終わりと共に、二人は盛大な拍手に包まれた。



更に月日は流れた。

「何で父さんからの便りがぜんっぜんこないのよ！？ いや、元々長期的な視野においてのことだからそれはまあいいわ。それに比べて……。ああ！ 一夏！ 一夏！ やっぱり一夏はあたしを見てくれているのね！ だってそうよ！ 毎回欠かさずファンレターを送ってきてくれるんだから！ ……だけど、何だって一夏がISを起動させてんのよ！？ しかも、IS学園に通うってなんなのよ！？ どーなってんのよ、桃！？ これじゃあ、入学話を蹴った意味が無いじゃないのよ！ こうと知ってたら間違いないく賛成してたわよ！」

コロコロとテンションを変えて、最後には、うがー、とばかりに鈴音が叫ぶ。

元より鈴音は活発な少女であるが、今現在はその枠組みに当て嵌

まらない。寧ろ不気味である。情緒不安定もかくや、といった有様だ。

いい加減に見かねた桃雫が、溜息を吐きつつ、声を掛けた。

「落ち着きなよ、鈴。……まったく。ファンレターは勿論、織斑一夏の記事や報道を見る度にそうやって荒れ狂うんだから……。これで何回目だい？」

「知らないわよ！」

「ま、そりゃそうだろうね……。寧ろ、そのザマで数えていたりしたら、その方がよっぽど怖いよ、ボクは……」

「……で、何の用よ？」

「まあ……。ね。君の荒れ狂う様を見るのは確かに楽しいんだけど、それでも限度というものがあるのさ。いい加減、ボクの精神的安寧のためにも君には落ち着いてもらおうと思ってね。……というわけで、はい」

「何よ、これ……。？　なになに『IS学園転入試験概要書』……。つてこれ！？」

桃雫に手渡された書類のタイトルを読んだ鈴音は、目に見えて分かるほどに態度を一転させた。

「ボクもボクでやることがあるからね。……その為には、IS学園に通うのが手っ取り早い。本当は一人でも入学するつもりだったんだけど、君との約束もあるし、それはそれでヒトとしてどうかとも思っただけ。結果、諦めていたわけだけど、君の気が変わったのなら何も問題はない。……寧ろ、万々歳、というものだ」

「ありがとう、桃！　愛してるわ！」

「感謝はありがたいけど、しっかりと勉強も頼むよ？　受からなければ何の意味もないんだから……」

「フン……。！　あたしを誰だと思ってるのよ？　誰があたしをここ

まで引っ張り上げたと思ってんのよ？ 自信を持ちなさい！ あたしたちにとって、この程度はなんでもないわ！」
「だからさあ……。『自信を持つのは結構だけど、過信はしないでくれ』って言ってるんだよ、ボクは……」

桃雫は頭を抑えて深い溜息をつくのだった。



そして、後日。

桃雫は受話器を耳に当てていた。お決まりのコール音が鳴ること暫し。

「はい、もしもし、大神です」

「ああ、総一かい？ 桃雫だけど？」

「シズク？ 一体どうした？ こんな急に電話なんかよこして？」

電話の相手——大神総一は驚きを露わに問い返してきた。

それを聞きながら、無理もないな、と桃雫は思う。

なにせ桃雫が総一の個人電話に掛けたのは数えるほどしかない。中国に来てからは一度として掛けていないのだ。……そんな相手から突然電話が掛かってくれば、驚くのも当然だろう。

そう思いつつも、桃雫が言葉を返そうとしたときだった。

「おや？ 君はまたおかしな事を言うね？ 電話など突然掛かってきて当たり前じゃないか？ ……とでも返してくるんだろう、お前は？」

総一が、そんな風に言ってきたのだ。……しかも、ご丁寧に自分の口調まで真似をしてである。

「は、はは、ははは……」

思わず、桃雫は笑ってしまった。――まさしく、自分が返そうとしていたセリフである。……ああ、やはりこうでない。

「すまないね。あまりに嬉しかったものだから思わず笑ってしまったよ。……それで用件だけだね？　今度、ボクたちもそっち――IS学園に通うことになったんで、取り敢えず知らせておこうと思つてさ」

「……待て。IS学園に来るのは分かったが、たちって何だ？　たちって？」

「ボクと、今現在ボクと組んでる中国の代表候補生、凰鈴音。……それと、リーヴァだね」

さて、どんな反応を返してくるかな？　――桃雫は心中で面白がっていた。

「……そうか。日程は？　迎えに出た方がいいか？」

「おや？　驚かないんだね？」

リーヴァの名前が出たことに。……言葉に出さぬその言葉を、総一は的確に受け取ったようだった。

「驚いてるよ。……けど、雫たちと一緒に来る点だけだ」

総一の返答に、そうかい、と桃雫は頷いた。

貴族らしいというべきか。リーヴァは常日頃から『民の護り手』たらんとしている。義務でも責務でもなく、ただただ自分がそうありたいと願って……。

しかし、実際そう上手く事は運ばない。

リーヴァの霊力は霊子甲冑を起動するには至らない。

ならば、軍人として、と思ったところで、今の国防はISが幅を利かせているのが実状だ。……つまり、男はお呼びじゃないのだ。

それでも自分に出来る範囲で色々と手を出していたリーヴァだが、所詮そんなものは間接的な支援にすぎない。……直接の護り手たりえないのである。

そんな中、ISを動かした男性が現れ、そこから得られた推測を総一が実証したのである。……であるならば、リーヴァがISを起動しようと試みるのは至極当然であるはずだ。そして、リーヴァもまた霊力を保有するが故にISの起動に成功する。

リーヴァをよく知る者であれば、この程度の推測は簡単にできる。

「迎えはよろしくお願いするよ。できれば、件の織斑一夏君も同席してほしいね？ ボクの相方が彼にホの字なものでね。……日程はまだ決まっていないから、決まったら改めて連絡するよ」

「……分かった。一応、一夏には聞いてみるが、多大な期待はするなよ？ それじゃあ、また」

「ああ。それじゃあね」

久し振りの会話。……けれど、時の流れを感じさせない、極々自然の会話。

受話器を置いた桃雫は——自分でも気付かぬまま——これ以上ない満面の笑みを浮かべていた。

幕間：暗躍する者たち

「……お待たせしてしまったかしら？」

部屋に入った女性は、ソファに腰掛けている相手の姿を認め、その口火を切った。

女性は長い金髪を靡かせており、その年頃は二十代後半、といったところか。豊満な胸と相俟って、溢れんばかりの色気を放っている。

一方、待ち人は緑の長髪をした長身の男性だ。その髪型は過激なまでのソバージュが掛かっている。

その髪を見た女性が――――

（まるでワカメみたいね……）

――――と思ったのも仕方がないだろう。

しかし、愉快的髪型とは裏腹に、決して侮ることは出来ない相手である。

何故なら、相手は自分の正体を知っているのだ。『表』の顔に隠した『裏』の顔を……。

「別に構いません。急に押しかけてきたのは私です。……非がこちらにあることを鑑みれば、こうも早々にお会いしていただけただけで、感謝を抱かずにはいられません」

男は立ち上がり、そう言って一礼した。

「どうぞ、楽になさって下さい」

言って、女性もまた対面のソファへと向かう。

「下がっていいわ。……それと、指示があるまで近付かぬように」

給仕を務めている女性に厳命することも忘れない。

自らもソファに腰掛け、給仕が立ち去ったのを認めてから心中で三十を数える。

「さて、早速本題に入りましょうか？ 自称『極めて近く、限りなく遠い世界からの来訪者』……さん？」

「そうしていただければ、こちらとしても手間が省ける。……さて、我々があなたに求めるのは地盤だ。我々には目的があるのだが、如何せん確固たる地盤がない」

男は膝の上に肘を乗せ、やや前のめりになりながら組んだ手の上に顎を乗せて――男の背丈に比べソファが低すぎるので、自然とこうせざるを得ないのだ――言い放った。

「これはまたおかしいことを言うわね。私のアドレスに直接通信を入れられるほどの者が『確固たる地盤がない』とは……」

「言ったろう？ 『極めて近く、限りなく遠い世界』からやって来た……と。そんな状態では、持てて『寝るだけの場所』が精々だ。……まあこちらとしても、言葉だけで信じてもらえるなどとは思っていない」

「では、証明できるものがある……と？」

女性は妖艶に問う。

「無論だ。……これを見れば、そちらとしても認めざるを得んだらうよ」

男が出したのは――容量値こそ大きいものの――何の変哲もないメモリディスクである。必然、重要なのは中身、ということだ。

「少し調べさせてもらうわよ？」

「ご随意に」

女は内線をコール。

「ああ、私よ。サブPCを持ってきてもらえる？」

ISの登場は技術の発展をも促した。……結果、処理速度や諸々の関係で、普通のPCなど今現在では骨董品も同然になっている。当の女性とて、普段はもっと高性能なものを使用している。

だが、PCにも利点がないわけではない。骨董品も同然だからこそ、買い換えも安くすむのだ。

つまり、処理速度の遅さにさえ目を瞑れば、こういった怪しいデータを開くには打って付けなのである。

「……………これは!？」

女性は思わず驚愕の声を上げた。

中身は兵器のデータだ。

しかし、断じてISではない。騎士団ナイツの用いる虚鎧ホロウ・メイルとかいうモノでもない。……全く別物の、しかし今ある技術で創ることの可能な『パワード・スーツ』の設計データである。

無論、実際にはどこか穴があるだろう。……それを見つけて出して創れなければ意味が無い、ということであり、『それが可能』だと相手は評価しているのだ。

軽い挑発であり、軽い賞賛だ。

それをハッキリと認識した女性は、手元に紙を引き寄せ、サラサラとペンを走らせる。

「取り敢えず、ここをあなたたちに貸し与えるわ。……本契約は出来上がった後、ということではないかがかしら？」

「是非もない。早々にその日が来ることを期待している。……刻が来たら連絡を。宛先はそこに入っている」

「ええ。それでは、またお会いしましょう」

「……また」

男は去った。

部屋に残った女性——スコール・ミューゼルは静かに嗤う。

「フ、フフ……。機体名『ゲシユペンスト』。通称『パーソナル・トルーパー』……か。これは、ひょっとしたら予想以上に『計画』^{プラン}を短縮できるかもしれないわね」

部屋の中、スコールの嗤い声が静かに響いた。



彼女がそれを気に留めたのは、或いは偶然であり、或いは必然だった。

彼女は世界各国の各所に自製の盗聴器を仕掛けており、流通している技術ではまず見破られることなどないだろう。……しかし、果たしてその効果は『無い』と断言しても過言ではなかった。

まず、盗聴内容はあるデータ領域内に纏めて保存される。よって、聞こうと思えば領域内から消していない限りいつでも聞くことが出来る。

だが、基本的に彼女はそれを再生することがない。故に、順次古

い方から消えていく。……これが第一点。

次に、たとえ再生したとしても、それだけなのだ。所謂、気分転換のBGM代わり、といったところか。感じ入るところがあれば耳にも残るだろうが、そうでなければ聞き流すだけ。

そして彼女が関心を持つ事柄など非常に限られている。故に、大半は記憶に留まることもない。……これが第二点。

理由としては以上の二点であるが、それだけでも充分すぎる。

偶々再生し、偶々その内容が彼女の関心を買った。……言葉にすればこれだけであるが、これが起こる可能性は果たして如何ほどのものか。

だからこそ、偶然であり、必然である。

「うーん……？ 何て言ってたっけ……？ たしか『近くて遠い』に『ゲスト』に『パルーパー』……だっけ？ まあ、そんなのはどうでもいいや。重要なのは『箒ちゃんやいっくん、ちーちゃんが巻き込まれる可能性がある』ってことだけだし。……よし、決めた！嫌われたくないから時間の流れに任せるつもりだったけど、ちょっといかけて目醒めを促しちゃおう！」

そして彼女——篠ノ之束は行動を開始した。

幕間：暗躍する者たち（後書き）

今回は短いですが、現時点で明かせるのはこの程度で精々です。

第9－A話

（なんでだ……？　なんで、こんなことになってるんだ……？）

一夏は現状を上手く認識できないでいた。――ここに至る経緯は理解している。休日の今日、特に用事という用事もなく、日課にしてある剣の素振りでもしようとしたところで彼女に呼び出されたのだ。

彼女、という言葉からも分かるように一夏は今現在一人でいるわけではない。呼び出した人物――真宮寺桜華と一緒にいる。

少々付き合って欲しい、と呼び出されたわけなのだが……。

「ふむ……。甘味は苦手だったかな？　すまない。仲間内で出掛ける場合は毎回寄るものだから、ついつい今回も組み込んでしまった」

出された品に手を付ける様子が見られなかったためだろう。……

桜華はそう言って頭を下げた。

無論、それは桜華の勘違いである。

「あ、いえいえ。甘味は別に嫌いじゃないです、はい」

故に、一夏は否定した。……しかし、その言葉遣いはどこかおかしい。

率直に言って、一夏は非常に緊張していた。

桜華を直視することが出来ない。

てつきり買い物か何かの荷物持ちだと思っていたのだが、そういった様子も見られない。もしくはこれから行くのかもしれないが……。――などと、現実逃避をする始末だ。

「なら、いいのだが……」

一方の桜華は、一夏の言葉にそう返しつつも釈然としないものを感じていた。――電話に出たときは前と遜色ない口振りだったのに、実際に会ってからはこの調子だ。これが、甘味が苦手だからではない、というのか……？

桜華は気付いていなかった。……しかし、それで彼女を責めるわけにもいくまい。彼女にとって、それは日常のことなのだから……。

そう、真宮寺桜華にとって『和服を着る』のは至極当たり前のことなのだ。……当然ながら、付き合いの長い総一たちはそのことを知っている。

しかし、一夏は違う。

桜華と一夏が会った回数は僅かに三度。

その内の一回にして初めての出会いには霊子甲冑を纏った状態であり、そもそも言葉すら交わしていないのだ。

他の場合にしても、二回目は洋服で三回目は霊子甲冑と戦闘服だ。……初回とは違って言葉こそ交わしたものの、和服からはほど遠い格好である。

そして、桜華は服に着られているわけではなく、ものの見事に着こなしている。……違和感がないのだ。

しかしだからこそ、一夏はより一層緊張しているのだ。

こう言っただけだが、一夏の周りには美形が多い。教室内だけでも千冬、箒、セシリア、真耶を挙げることが出来るし、男であるが総一と一夏自身もそうだ。……みな方向性の違いはあるにせよ、一夏の美形である。

全員が全員とも、着れば和服も似合うだろう。それでも、目の前にいる桜華ほどには着こなせない。――少なくとも、一夏はそう思った。

時折、雑誌やテレビなどで『和服美人』という言葉を見聞きする

が、その実物を初めて見たような気がする。少なくとも、似合うだけでは該当しない。この『違和感のなさ』を生み出すことが出来て初めて『和服美人』たり得るのだ。――緊張のあまり、一夏の思考はおかしな方向へと発展していた。

「あゝ、何て言うか……今までの人生で和服を着こなしている人って見たことがなかったし、桜華さん自身、和服姿に違和感がないんで驚いたと言いますか……上手く言葉に出来ないですけど、そんな感じですね」

しかし、いつまでも現実逃避などしてられるはずもなく、取り敢えず釈明をする一夏。

一夏自身、別に女の子は嫌いじゃないし、一緒にいると気分が華やぐのも事実なのである。そして、そんな相手の表情を曇らせているのが自分と分かれれば、いつまでも緊張などしてられない。如何に相手が自分より強いとしても、そんなことは関係ないのだ。

IS学園のように周りが女子だらけとあれば、仕方のない部分も出てくるだろう。万人全てを喜ばせることなど一夏には不可能だ。

例えば箒とセシリアから同時に頼まれ事をしたとして、それが並行できることなら、或いは並行できなくても時間さえあれば可能なことなら一夏は請け負う。……そうすれば、結果的に箒もセシリアも顔を曇らせることはないだろう。

しかし、一方を引き受けた場合どうしてももう一方を引き受けることが出来ない、となれば話は変わってくる。片方、或いは両方が顔を曇らせることになる。一夏の知る限り箒もセシリアも人格者である。どちらを引き受けた場合でも『後ろめたさ』を感じることは間違いないだろう。

（翻って今の状況はどうだ……？ 桜華さんの表情を曇らせている理由は俺にあり、それは俺の緊張によるものだ。要は、俺がさっさ

と桜華さんの和服姿に慣れれば良いだけの話。緊張から解放される、という点でそれは俺にも利のあることだし、桜華さんに『後ろめたさ』を覚えさせることもない……はずだ」

結論を迎え、その理由に納得がいけば、一夏の行動は速かった。

「それとこう……同年代に敬語って苦手なんで、言葉を崩しても構わないですかね？」

一夏自身自覚はないが、そのコミュニケーション能力は高い。千冬によって身につかされた『諦観能力』から来るものではあるが、大抵の場合において、それが長所として機能しているのだ。

諦観能力が高い、ということは、相手をそっくりそのまま受け入れる、ということにも繋がるのだ。

そこには相手の肩書きも何も関係ない。それすら含めての『個人』であるし、そんなものがなくても『個人』であることに違いはないからだ。

一夏はあまり幻想を抱かない。……世間からは『完璧超人』として謳われる千冬の実態——家事はサッパリです——を知るが故のことである。

しかしだからこそ、一夏が幻想を抱いた場合、それは非常に堅く、同時に非常に脆いものとなる。

あの『一年一組クラス代表選出戦』でのがそれを証明していた。

一夏は初めて桜華に出会った際、彼女に憧れた。……桜華が霊子甲冑に身を包んでいたために、その正体を知ることが無かったためでもある。

そこから間をおかずにまた出会うことがあれば、もしくはその正体を知ることがあれば、一夏の憧れは『憧れ』で止まっていただろう。

しかし、実際には二年もの間、再会することはなかった。

初めて目にしたのはほんの僅かな間だったことも相俟って、一夏の中で彼女の存在は美化され理想化され、その果てに絶対視するに至った。

そう、正体不明だったことも相俟って、文字通り『正義の味方』として一夏は桜華を認識した。そして時の流れの中で、より『正義の味方』らしく補正が掛けられていったのだ。

だが、所詮そんなものは『想像の産物』であり、実際には綻びだらけだ。現実の前に現れたなら、その差異の重さでアツサリと瓦解する。

そして一夏は、二度目にはそうと知らず桜華と出会い、三度目には彼女と『正義の味方』が繋がった。……結果、一夏は混乱した。もつとも、その点に関して言えば、今はもう大丈夫である。

だからこそ今の状況——呼び出され、アツサリとそれを了承した結果——があるのだから……。

「ああ。こちらとしても、敬語なんぞよりそっちの方がよっぽどやりやすい。……しかし、服装、ねえ。言われてみれば、確かに、と思わなくもない。私が和服を着ていたら、初見のヤツは大概驚いていたような気がする」

一夏の言葉に桜華は微笑を浮かべて返答する。……そして、合点がいったように頷いた。

「ま、甘味が嫌いじゃないって言うんなら何よりだ。ここのは特にお薦めだからな」

「ああ。確かに美味しいな、これ……」

老舗の称号は伊達ではない、ということだろう。——ここに来て初めて手を付けた一夏は、笑みを浮かべて同意した。



「それで、まあ、今日呼び出した理由を改めて説明するとだ。早い話が現状確認だな。……お前、自分のおかれた状況を理解しているか？ それに納得がいつているか？」

甘味屋を辞して暫く歩き出したところで、おもむろに桜華は言った。

「それは……」

一夏は答えに窮する。理解できている部分もあれば、そうでない部分もある。納得している部分もあれば、その逆もまた然り。

どちらともに中途半端で、だからこそ、どちらとも答えることが出来ない。

「……だろうな。あの時は時間の都合もあって伝え忘れたが……なに、それでいいのさ。別に何もかもを理解する必要がなければ、納得する必要もない。人間、独りで出来ることなんぞさして多くはないからな。無理に呑み込もうとすれば溺れるだけだ。——私みたいにな」

桜華の言葉、その最後の部分に対し一夏は疑問を覚え——

「それって、どういう……？」

——気付けば口に出していた。

「どうもこうもない。そのままさ。……『破邪の血統』。そう謳わ

れる血を継ぐが故に、身を護るためだ、と私は幼い頃から剣を学ばされた。だがな、そんなんで長続きなど出来るはずがない。毎日毎日、クタクタになるまで剣を振るわされ、打ちのめされたんだ。今となっては、それも親の愛情故だと理解も納得も出来ているが、当時の私はそうじゃなかった。理解しようとしても理解できず、納得しようとしても納得できない。……結果、疲れ果てた私は自殺を図った。死ねば救われる。この苦しみからも痛みからも解放されるってな……。だがまあ、解放されたいが故なのに、刺殺や首つりといった痛みや苦しみを伴う方法を選択するのはどうかと思ってな。最終的に選んだのは飛び降りだった。目を閉じていれば高さなど気にならず、だからこそアツサリと逝けるだろう。そう思ってた選択だった」

滔々と語る桜華の口振りとは裏腹に、その内容は重い。

「……………」

一夏は何も言えない。言うことが出来ない。

「ククッ……だがまあ、ダメだな。高いということはそれだけ距離があるということで、目を瞑っていれば尚更測る術など無い。まだかまだかと思う内に、とうとう私は目を開けてしまった。そして思った。『嫌だ!』、『死にたくない!』ってな……。しかし、既に私は飛び降りている。最早どうすることも出来ず、私が死ぬのは確定事項だ。……その筈だった。だが、幸か不幸か私にはそれを覆すだけの『力』があった」

分かるか、と目線で問い掛けられ、一夏は口を開く。

「……霊力」

「そう、霊力だ。『死にたい』と思つての飛び降りだったのに、『死にたくない』と霊力に目覚めてしまった。謳われるだけあつて、その力は流石に強力だったよ。……けど、多分。そこで私は壊れたんだ」

「壊れた？」

「ああ。……取り敢えずこうしてぶらついているわけだが、お前にはこの風景がどう見える？」

いきなりの話題転換に首を傾げながらも一夏は答える。

「どうって言われても、普通に街並みと歩く人たちがいて……ってそんな感じだけど？」

「色は？ その景色は色づいて見えるか？」

「そりゃまあ、当然」

「当然……か。私は違うんだ。私の瞳に映る世界に色はない。認識できないわけじゃない。あの看板は青だし、あの車は赤だということも分かる。けど、それだけだ。だから何だ？ それに何の意味がある？ といった具合に世界が色づいている意味を見出せないんだよ。……周りの者には色鮮やかに映る風景で、カラフル実際、私の瞳にもそう映っているんだろうが、それでも私にとっては白黒と同じなんだ」モノクロ

「な……！？」

一夏は愕然とする。――何だそれは……！？ そんな状態でヒトは生きていけるというのか……！？

「勘違いしないでほしいのは、そんな私の世界にも色は存在している、ということだ。お前や総一たち、そして『荒鷹』。……私の世界は極々狭いんだ」

話を戻そう、一端言葉を切って桜華は言った。

「私が総一と会ったのはそんな時だ。まあ、私が飛び降りる敢行できたのも、客人が来るとかで両親が準備に追われ、私から目が離れたからなんだから、それに関してはおかしくも何ともない。……おかしいのはその時の総一の言葉でな。私から説明を聞いたアイツはこう言ったんだ。『なら、俺がお前を護ってやる。その代わり、お前もまた俺を護れ。そしていつかは、俺以外にも護ってくれるヤツと護るヤツを見付けろ。……それがお前の世界となり、剣を執る理由となる』ってな。……私と変わらぬ年齢のヤツがそんなことを言っただ。あまりのおかしさに思わず笑ってしまったよ。本当、久し振りに笑ったんだ……。そしてそれ以降、剣を振ることに打ちめされることにも苦痛を感じなくなった。いや、この言い方では語弊があるな。痛みも苦しみもあったが、それ以上に喜びがあった。これを取り越える度に私は強くなれる。そうすれば、その分総一を護ることが出来る。私の生きる意味がある。私の世界があるってな……」

その言葉には、懐古の念が含まれているように一夏は思った。それを証明するかのように、桜華の表情は笑みを浮かべている。

「まあ、そんなわけで私は救われたんだ。……話を変えるが、お前は私にとって『弟子』も同然だ。知らずの内とはいえ私の剣がお前に大きな影響を及ぼしたんだから、お前が否定しても私は肯定する。そして、『師』とは『弟子』を導く者だ」

表情を変え、鋭い瞳で桜華は一夏を見つめる。

「こんなことを言ったところで、何がどう変わるわけでもないだろう。だが、知っておいてほしかった。ヒトはどこまでも強くなれる一方で、どこまでも弱い存在である……ということにな」

そして次には微笑に変え。

「さっきも言ったが、ヒトが独りで出来ることなどたかがしれている。だから、無理に理解する必要もない。納得する必要もない。ただ、知っておけば、それが何かの助けになるかもしれない。こういう人がいた。こんな事が起こるかもしれない。……そんな風に、軽く受け止めておくだけで良いんだ。大切なのはただ一つ。自分を自分たらしめる『ナニカ』を抱き続けていることだ」

「……ご指導、ありがとうございます！」

自然、一夏は頭を下げていた。——同年代だろうと、会った回数が僅かだろうと、そんなことは関係ない。真宮寺桜華は確かに自分の師匠だ。

「おいおい、大げさだな。軽く受け止めておくだけで良いと言ったろう？ ……まあいいや。用件はもう一つあってな。……受け取れ、織斑一夏」

桜華が差し出してきたのは、一振りの刀だった。

受け取る。ズシリと重い。けれど、どこか手に馴染む。

「これは？」

「銘は『閃刀・煌威』。俗に靈剣だの神刀だのいわれる物の一振りだ。私の『靈剣・荒鷹』や総一の『神刀・滅却』みたいな……。太正時代、その功績を認められたご先祖様が与えられた物だ」

「そんな物を……俺に？」

「ああ。……と言うか、そいつは私の『荒鷹』と同じく担い手を選ぶんだ。おかげで、与えられたご先祖様自身そいつを扱うことは出来なかったらしい。……しかし、それがここ最近——お前と剣を合

わせた日から――妙に哭^なくんだよ。もしかしたらと思って持ってたなら、案の定だったというわけだ」

「こいつが俺を……」

一夏は『閃刀・煌威』に視線を移し、ゆっくりと抜く。……その刀身は刀と思えないほどに透き通っており、光輝いている。

「これから先、お前の周りには様々なヤツらが現れるだろう。それこそ、敵意を持つ者、悪意を持つ者、利用しようとする者、好意を持つ者、無関心な者……本当に様々な。そんな中で、こいつが何かしらの役に立てば幸いだ。……だがまあ、そいつの力に吞まれるなよ？　もしそうなった場合、状況によっては私や総一がお前を斬ることも有り得るし、そればかりは流石の私も勘弁願いたいからな……。さて、私の用件はこれで終わりだ。ああ、電話やメールは好きに入れてくれて構わないよ。その場で出られるとも、すぐに返せるとも言えないがな……」

そう言って桜華は歩み去る。

遠ざかっていくその背中に、一夏は頭を下げ続けた。

第9－A話（後書き）

そんなこんなでオリ剣登場。名前はサクラっぽく頑張ってみました。総一や一夏をメインに据えてる場合は、オリ話であっても『幕間』扱いにはしません。

サブタイトルからも分かると思いますが、今回はとある休日の一夏編。

次回は総一編になります。

新しく原作に組み込んだスパロボキャラの登場は数話先になりますね。……急遽『幕間』を思いついたりすればその限りじゃないですが。

感想、お待ちしております。

第9―B話

「さて、どうしたものか……?」

総一は一人、部屋で頭を悩ませていた。

元々入っていた仕事は土壇場キャンセルを喰らい、日曜日だけあって同室の一夏も出掛けている。……書き置きによると桜華に呼び出されたらしい。

まさしく降って湧いた休日であり、それ故にどうという過ごし方も思い浮かばない。……と、そこで先日受けた電話を思い出した。

「ああ、そう言えばシズクたちが転入してくるんだったか……」

日付や振り分けられるクラス、寮室など確認しておいて損はない。……こちらの意向が完全に反映されるとは思わないが、織斑一夏の護衛として、そして生徒会副会長——自分では覚えていないが、本音によると『過日のパーティーの際、売り言葉に買い言葉でそうなってしまった』とのことである——として、幾らか汲んでもらうことは出来るだろう。

思い立ったが吉日である。総一は早速、生徒会長である楯無の部屋へと赴くことにした。

「はい、少々お待ち下さい」

——が、それを遮るかのようにドアがノックされる。

（一体誰だ……?）

思いながら、総一はドアへと向かう。

IS学園において、総一の人間関係は未だ浅い。親しい相手など限られている。更識姉妹に布仏姉妹、一夏にカグヤ、セシリアと箒くらいのものだ。

その中で、一夏は同室であり、そもそも今は外出中だ。

カグヤはカグヤで職員寮住まいなことだし、わざわざ訪ねてくる理由も思い浮かばない。華撃団関係での用事ならば、まずは連絡の一本でも入れて不在かどうかを確認するだろう。

セシリアと箒も同様に、この休日に訪ねてくる理由が思い浮かばない。

（——いや、待て。何も俺を訪ねてきたとは限らないじゃないか……）

そう、大神総一は織斑一夏と同室なのだ。……ならば、一夏が出掛けていることを知らない者が訪ねてきたとしても不思議はない。特に箒は一夏の幼馴染みなことだし、その可能性は高いといえる。

（結局、開けてみるまで分からない、ということか……）

埒の明かない推察に見切りをつけている間にドアへとついた。

「今、開けます。——つとお！？」

ドアを開けると同時に、総一は身を逸らした。

目で見ただけではない。ただの勘である。

だが、果たしてその勘は正しかったようだ。眼前で弦が収縮していく様を見れば、誰であれそう思うことだろう。……身を逸らしていなければ、ちょうど首元が絞められている位置とあれば尚更である。

突然の急襲を退けたとあれば、誰しもが安堵の息の一つも吐くだ

ろう。

「まったく……。危ないなあ」

事実、総一もまた安堵の息を吐いた。……しかし、決して気を抜かなかった。油断しなかった。

それが功を奏した。

安堵の息を吐く間にも、再度弦が迫り、巻き付いたのである。……最初の弦を躲すと同時に懷から取り出していた小太刀へと。

それを目で確認するでもなく感覚で捉えた総一は、そのまま抜刀。更に迫る弦を断ち切る。

二、三、四……数えるのがバカらしくなるほどに次から次へと弦が迫る。

ようやく弦が止んだとき、総一は感嘆の息を吐いた。

「たしか、一度だけ見せてもらったことがあるよな？ 『更識流奏^{げんきりゆう}弦曲^{げんきよく}』の極意が一つ。その名も『万華鏡』……だったか？ いや、それをここまで操るとは……腕を上げたなあ」

視線を向ける。

そこには、中空——正確には中空に渡した弦——に腰掛けている少女が一人。

髪は空色のセミロング。瞳は真紅で、長方形レンズの眼鏡が覆っている。……総一の幼馴染みが一人、更識姉妹が妹の方、更識簪その人であった。

たとえ原理が分かっているとしても、人間が中空に身を預けていれば普通は驚く。しかし、更識の名と技を多少なりとも知っている総一にすれば、別段驚くには値しない。

更識流奏弦曲。……それは『暗部に対する暗部』と謳われる更識家に伝わる技の一つ。狭い場所での運用と、相手を捕らえることの

両立がその発端とされている。

繰り出す方は繰り出す方で、指のみならず身体全体で弦を操らねばならず、一方の相手は防ぐにしろ躲すにしろまるで踊っているかのようにあり、一度喰らってしまえば術者の意のままに踊る操り人形と化す。^{ット}……それ故に『奏弦曲』の名がつけられた、と云われている。

「しかし、何だってまたこんな真似を？　俺じゃなかったら……いや、俺でも紙一重でグルグル巻きだぞ？」

「……ずるい。……ムカついた」

問う総一に対する、簪の返答がこれであった。

「は？　……いや、簪？　もうちょつと、こう、分かりやすく言ってくれないか？」

流石の総一もそれだけでは理解することなど出来ず、首を傾げざるを得ない。

「本音から聞いた。写真、見た。……お姫様だっこ。本音ばかり……ずるい。……挨拶にもこなかった。ムカついた……」

言葉少なに簪は告げる。……それでも、総一にとって察しをつけるには充分すぎる答えだ。

「オーケー、分かった。挨拶が遅れたのは素直に謝ろう。すまなかった。だっこ云々は……正直言って簪相手だと気恥ずかしいが、それでお前の気が治まるのなら吝かでもない。……が、その前にまず、この散乱した弦を片付けるのが先決だ」

「……分かった。片付いたら、お姫様だっこ。……約束」

「ああ、了解した」

総一が頷いた直後である。

弦が走り、踊り、散乱した弦を束ねる。……それはまさしく瞬時の出来事。

「……お見事」

総一は力なく呟いた。……どうやら、先程までの随分と加減されていたらしい。最初から今の速度でこられていたら、まず間違はなく捌ききれなかった。

互いが全力であればタダではすまないし、軽いスキップみたいなものだと分かっているが、それでも心にくるものがある。……総一とて年頃の少年なのだ。

「ん……」

地に降りた簪は一つ頷き、両手を伸ばす。

「はいはい」

頷き、総一は簪を抱き上げる。

フワリ、といい香りが総一を包み込んだ。

（軽いな……）

総一は心中で驚いた。本音もそうだったが、女子とはこうも軽いものなのか……と。

そのまま部屋へと戻り、さて降ろそうか、という段になってようやく総一は気付いた。——身体が上手く動かない。己の意志通りに

動いてくれない。視野が狭まる。動悸が激しい。

「これは……？」

どうやら声は出せるようだ。——などと総一が思っている間にも事態は進んでいた。

「な……っ!？」

目の前に赤い瞳があった。レンズ越しに盪惑な輝きを放つそれが、徐々に近付いてくる。……つまりは、顔全体が近付いている、ということであり、当然、唇もまた然り。

ゆっくり、ゆっくり、焦らすかのように距離が狭まる。

(まずい。まずいまずいまずいまずい……何がまずいって、それが分からないほどにまずい!)

焦燥とは裏腹に、その身体は頑としていうことを聞いてくれない。

そして——

「ちよおおつとまったあああ——っ!」

——轟音をBGMに咆吼を上げる小さな影が突入してきた。影の動きは止まらない。なおもその勢いを増していく。

「チッ……!」

それを確認した簪が、グイ、と総一との距離を縮めようとする。……しかし、影の方が速かった。

衝撃。

「ぐう……っ！」

「キャ……ッ！」

「みゅ」

三者三様に崩れ落ちる。

「たたたた、一体何が……？　　っと、身体が動く……？」

一番復活が早かったのは——やはり男ということか——総一である。

身体がいうことを聞いてくれなかったため受け身も何も取れなかった。幸い、ベッドに倒れ込んだためその痛みも大した事はないが、一歩間違えればどうなっていたことか。——などと恐怖を抱きながら立ち上がり、その時になってようやく身体が意志通りに動くことを認識した。

「そくん、無事？」

次いで起き上がったのは突入者——本音である。

「チッ……。いいところで邪魔が入った。せつかくの既成事実が……」

僅かに遅れ、簪が立ち上がる。中々に黒いことを言いながら……。無事を確認した総一は改めて周囲を確認し——

「ってああああ——っ！？　　ドアが！？」

———絶叫した。……部屋のドアがものの見事に壊れている。

「どうすんだよ、これ……」

総一はガックリと項垂れた。……責めようにも責める相手がいないためである。

直接ドアを壊したのは本音だが、おかげで総一は助かったため文句を言うことなど出来るはずもない。

では簪を責めるかといえば、それもお門違いである。色々と忙しかったとはいえ、入学してから今日までの間に総一が一度でも簪を訪ねていれば、簪も強硬手段を取ることはなかっただろうからだ。最終的な責任は自分にあるのだ。……早い話が自業自得である。



「それで、本題は一体何だ？ まさか本気でだっこ云々のために訪ねてきたわけではないだろう？」

取り敢えずの応急処置をすませ、修理の要請をだしたあと。ベッドに腰掛けた総一は——組んだ指に顎を乗せつつ——同じく対面のベッドに腰掛けている主従へと問い掛けた。

「意見がほしい」

「意見？」

「そう。知っての通り、私は日本の代表候補生。専用機を与えられることが決定しているのだけど……困ったことに現時点で専用機がない。いや、本来ならもう持ってるはずだったんだけど……」

そこまで言って、簪は俯いて歯を鳴らした。

本音が引き継ぎ続きを語る。

「ここで絡んでくるのがおりむくなわけですよ。かんちゃん専用機の開発元は倉持技研なんだけど、おりむくの専用機である『白式』の方に人手を全員回しちゃってるらしくて、一切合切手付かずなんですな」

「ちょっと待て。人手を全員回している、と聞こえたが？」

聞き捨てならない部分があったので、総一は待ったを掛ける。聞き間違い、もしくは言い間違いではなからうか……と。

しかし――――

「そうだよ。倉持技研は『白式』の方に人手を全員回しちゃってるんだよ。流石の本音さんも、聞いたときは耳を疑っちゃったよ」

――――聞き間違いでも言い間違いでもなかったらしい。

「悪いがちょっと待ってくれ。確認を取る」

言って、総一は携帯電話を操作し耳に当てた。

呼び出し音が続くこと暫し、相手が出たことを確認した総一は口を開く。

「あ、花小路さんですか？ はい、総一です。少々、花小路さんに調べて欲しいことがあるんですが……。あ、大丈夫ですか。日本の代表候補生、更識簪の専用機についてなんです……。ええ、はい。今、本人と会っているんですけど、聞いた話では開発担当の倉持技研が『白式』の方に人手を全員回しているそうでして、その真偽の確認をお願いしたいんです。私情が加わるので恐縮なんですが、簪は幼馴染みでして……。ですから、もし真実そうだった場合は黙っ

てみていることなど出来ませんので……。ええ、はい。よろしくお願ひします」

電話の相手に――見えないと分かっている――ペコペコと頭を下げながら総一は告げた。

それから暫く。

用意したお茶を飲み干した頃、総一の携帯電話が鳴り響いた。

表示される名前が、待っていた相手からの電話であることを教えてくれる。

それを確認した総一は、携帯電話を直ぐさま耳へと押し当てた。

「……一体何を考えているんだ、倉持は？ いや、急なことだし『白式』の開発に人手を全員回す分にはまだ分かる。……が、既に『白式』は作られた。なら、急ぎ後回しにした方へと人員を割くのが普通だろう？」

電話の内容は、簪たちの言葉通りの内容だった。……総一は呆れて溜息を吐かずにはいられない。

「そうなんだけどね。その普通が行われてないわけで……。まあ、諸々の原因は『白式』の欠陥具合にあるようなんだけど」

「その点については理解できなくもないし、我慢できなくはなかった。……けど、謝罪の一本もない！ 挙げ句の果てには私が専用機持ちという噂が一人歩きしちゃってクラス代表にされる始末！ こうなったら、もう待ってなどいられない！ 自らの手で創り上げるのみ！」

拳を握り、簪は気炎を吐く。

ここは総一の部屋であり、人目を気にする必要もない。……故に、素の自分をさらけ出しても問題はない。

簪は人付き合いが苦手だ。別に人間嫌いというわけではないが、空想や妄想に浸っている方がよほど楽しめる。

現実にはあまりに夢がなさすぎる、というのが簪の持論だ。

彼女の生まれ育ちを考えれば、そうなるのも致し方ないだろう。

ヒトの反射のどこまでも裏を読み、ヒトの思考のどこまでも裏を読む。……『暗部に対する暗部』と謳われる更識家に生まれ落ちた以上、妹とはいえそういった教育から逃れることなど出来るはずもない。

そして、そういった教育を施すのとは裏腹にプライベートでの両親はどこまでも優しいことが、簪を更識家に繋ぎ止めた。

結果、簪は他人との繋がりを忌避するようになった。……普段の態度はその表れである。ああいう態度を取っていれば、進んで近付いてくる者もごく僅かですむからだ。会話くらいで終わるならばまだしも、この世代というものはひょんなことから友人認定されかねないのである。

また、そういった思いを抱く傍ら、簪は見下されることを嫌う。

妬み嫉みを受ける分には構わない。……それは『自らが下である』と思えばこそ抱く感情だからだ。

しかし、侮蔑や嘲笑はまた別だ。……それは『自らを上置く』からこそその行為に他ならないのだ。

そして、このままいけば嘲笑されることは確実である。

専用機持ちなのに専用機がない、という事実はそれだけの価値を持つ。加え、代表候補生という立場がそれに拍車を掛ける。

あうー、とばかりに頭を抱えながら簪は言う。

「———と意気込んだはいいものの、実際に創となると問題が山積みな実状。そもそも、自分に向いたタイプが分からないから、最初の一步が踏み出せない。自慢じゃないけど、近中遠距離と一通りこなせるし……」

なるほど、と総一は頷く。

基本的に専用機というものは与えられるものだ。

企業が目的に沿って機体を創り上げる。そして、その機体のポテンシャルを一番引き出せそうな者にこそ、専用機は与えられるのだ。……すなわち、専用機持ちとはあくまでも受動的な立場でしかない。全部が全部そうだとは言わないが、大概において操縦者の意見が汲み取られることはない

一夏や総一が例外なのである。

一夏は悪い意味での例外である。『白式』の欠陥振りにそう仕上げるしかなく、それがたまたま一夏に適合したにすぎない。……そして、一夏の意見を汲み取ろうにも『白式』の欠陥によって汲み取れないのが実状だ。

対し、総一は良い意味での例外である。『狼虎』は初めから総一向けに創られた機体だ。稟武の運用データも転用されている。……だからこそ、急な開発にも関わらず格段に速い仕上がりを見せたのだ。

そして、簪は急遽例外となってしまったのである。

いきなり受動から能動へ切り替われば、混乱の一つもして当然である。

「だから、意見か……」

自分を訪ねてきた理由こそ分かったものの、正直に言えば頭を抱えずにはいられない。

何故ならば、総一と簪はそもそもそのタイプが違うのだ。……総一が正道を征く侍だとしたら、簪は裏で動く忍である。

修めている術理からしてそうだ。

総一の剣術『二天一流』は——こと日本に限っては——広く名が知られている。……まあ、実態が知られているかはまた別の話となるが。

開祖である宮本武蔵自体が有名なのだからそれも当然であろう。誰しもが、一度は宮本武蔵対佐々木小次郎を描いた『巖流島の戦い』を話で聞いたり本で読んだりしている。……少なくとも、それだけ宮本武蔵の名前は知名度が高い。

故に、『宮本武蔵が扱う剣術』ということで、二天一流もそれだけ名が知られている。

そして、時の流れにも負けず現代まで継がれている剣術なればこそ、その有用性は高い。

たとえ欠点があったとしても、それを補ってあまりある長所がある。

もしくは、欠点を無くす動きが組み込まれているからこそ、現代までその名が残っているのである。……事実、総一の『二天一流』として『それが元祖オリジナルと遜色ないか?』と問われたら、首を傾げずにはいられない。

一方、簪の扱う『奏弦曲』を始めとした『更識流兵法』は——家伝であることに家の立ち位置も相俟って——その名を知る者は少ない。……実態を知っている者は更に少ない。

知られぬが故の強さ、である。

だからこそ、IS戦を始め表立った場所で用いるわけにはいかない。……より正確に言えば『大多数の目に触れる状況下』で扱うわけにはいかない。

もしそんなことをしてしまえば、それは更識の強みを一つ失ってしまうことを意味している。

逆に、表立った場所で披露することにより他の技の存在を隠す、といった考えも出来るが、それもあまり望ましいことではない。……今は良くて、後々を考えると問題が出てくるのである。

基本的に『更識流兵法』はどれもこれも癖が強いのだ。

自分に合ってさえいれば、習得はそれほど難しいことではない。

……しかし、自分に合っていないければ、どうやっても習得できない。そう断言できるほどに『更識流兵法』は癖が強すぎるのだ。

実際、更識姉妹は修めている術理を異にする。……二人が共通して修めているのは、基礎となる体術くらいなものである。

では体術で立ち向かえばどうか？　と思わなくもないが、それもまた却下だ。『更識流体術』は『基礎』であると同時に『最後の砦』でもあるのだ。表の世で連綿と受け継がれてきた術理にそう何度も通用するものではない。

なまじ、そういった更識家の裏事情を知っているからこそ、総一は上手い考えが浮かばない。

（まったく……。恨むぞ、倉持技研。裏事情を知らないお前たちがきちんとやっていたら、こんなことには……）

心中で倉持技研への恨みごとを呟きながら、総一は気付く。――そうだ。裏事情を知っているからこそ、こんなにも悩むんだ。……なら、いつそのこと裏事情を知らないヤツに任せた方がよほどいい。生半可なヤツなら任せるわけにもいくまいが、幸い、ベストなヤツがもうじき都合良く転入してくるじゃないか……。

ククク、と総一は笑みを浮かべる。……それはそれは黒い笑みだ。ニヤリ、と唇が曲がるその様は、対面に座っている簪と本音が思わず冷や汗をかいてしまうほどである。

そして、総一は言い放った。

「なあ、簪？　もうじき俺の仲間が転入してくるんだが……いつそのことソイツに任せてみる気はないか？　腕は保障するぞ？」

総一の思わぬ黒さを直面したためだろうか。

簪は己でも気付かぬうちに頷き――――

「お願い」

———と言葉に出してしまっていた。

「まあ、そうは言っても当の本人が頷かなきゃどうにもならないんだがな？　けどまあ、たぶん大丈夫だろう」

今度は人好きのする笑みを浮かべて、総一は言ったのであった。

第9－B話（後書き）

とある休日の総一編。

何でだろう……？ 一夏編に比べて物凄くシリアス味が無い。

簪登場。……まあ、やっぱり改変してますが。あんな大仰な称号を持つ家系なら、このくらいはおかしくも何ともないと思います。感想、お待ちしております。

第10話

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。専用機持ちは試しに飛んでみせろ」

遅咲きの桜の花びらが消え去った四月の下旬。蒼天の下に千冬の声が響き渡る。

言われ、総一、一夏、セシリアが前に出る。……ちょうど、一夏を中心とする形だ。

そして、刹那の間をおかずセシリアの身体を光が包む。

光が止めば、そこには『ブルー・ティアーズ』を纏ったセシリアの姿。

「上手いものだ。流石、というべきか……」

それを見た総一は思わず呟く。……総一と同じように、一夏もまた感嘆の眼差しをセシリアに送っている。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

男性陣に動きが見られなかったためだろう。

千冬がせかす。

正論である。……が、一夏はともかくとして、総一は黙って頷くつもりなどない。

何故なら、千冬の言葉は確かに正論であるが、そもその前提条件が間違っているからだ。

「お言葉を返すようですが、俺も一夏も未だ熟練者の域には至っておりません。遠く及ばない、と言っても間違いではないでしょう。」

……その事実を、織斑先生はどう捉えていらっしやるのでしょうか？」

真っ正面から千冬を見つめ、総一は淡々と言い返す。

不幸なのは、その現場に居合わせた周りの者たちである。一夏を始めた生徒のみならず、副担任である真耶までもが青い顔をしている。

「なんだ？　泣き言か？」

唇をつり上げ、挑発するかのように千冬が言う。

「別にそんなつもりはありません。……ただ、その事実を踏まえた上で言っているのか。それとも、その事実ですら気付いていなかったのか。……返答如何によっては、織斑先生を信じることなど到底出来ません。IS操縦者としての織斑先生の実力を疑うつもりはありませんが、それが教師としての実力と結びつくわけではありませんので……」

表情を歪めることもなく、なおも総一は淡々と言い放つ。

ゴクリ、と誰かが唾を飲み込んだ音が、一夏にはやけに大きく聞こえた。

暫しの静寂。

「ハッハッハッ……！　いや、小気味いいくらいにハッキリと言うヤツだ。ただ文句を言うだけのヤツなら腐るほどいたが、芯を持って言ってくるヤツなどそうそういなかった。……大神、お前に免じて正直に答えよう。信ずればこそ、だよ。そもそも、教師が生徒を信じないようでは終わりだろう？　この間山田先生にも言われてしまったし、自分の言動が教師として問題ありだと認識してはいるが、

それでもこれが私だからな。そうそう器用に変えることなど出来ないよ」

周囲の思いとは裏腹、千冬の答えは怒号ではなく呵々大笑であった。

「了解しました。……信には信を以て返すが礼儀です。これからも苦言を呈するとは思いますが、何卒、ご指導のほど、よろしくお願いいたします」

千冬の言葉を聞き、総一は頭を下げる。

上辺だけの言葉には何の意味もない。大事なものは、その心根が信ずるに値するかどうか、である。……そして、千冬は信ずるに値する、と総一は判断した。

であるならば、頭を下げるに否はない。

もっとも、『教師』という千冬の仕事を考えれば、宣言通りに度々苦言を呈することになるだろうが……。

生徒に言い返される教師、というのもしかと思わなくもないが、問答無用で生徒を従わせる教師、よりは遙かにマシだろう。

少なくとも、外から見た場合、前者はコミュニケーションの一種として捉えられる可能性が無くもないのだ。

「フン……。では、早速返してもらおうか？　今のやり取りだけで結構な時間を消費してしまったからな」

「承知。……さあ、行こうか？」

千冬の言葉に総一は微笑を浮かべて応じ、誘うように手元へと視線を流す。

その手に握られているのは、鞘に納められている小太刀だ。幼い頃、とある人物に託されて以来、総一が常日頃から持ち歩いている

物だ。『神刀・滅却』に勝るとも劣らない霊刀としての性質を持っており、未知の物質で形成されているのが大きな特徴である。

さて、総一がISの展開時まで——堂々と晒して——小太刀を持ち歩いているのには、無論のこと理由が存在する。

柄の部分を巻く帯状の細い紐——『柄巻き』と呼ばれる——こそが、総一の専用機、『狼虎』の待機形態に他ならないからである。

正直、これは総一にとってありがたいことだ。待機形態が待機形態であるだけに、持ち歩いても説明が格段に楽なのである。……もつとも、余計な威圧感を持たれないために普段は制服の中に隠し持っているが。

そして、総一に答えるかのように、刹那の間をおかずその身を光が包む。

その展開形態は全体的にスリムな印象で、白を基調に所々が青に染まっている。

背面には二基のブースター。

武器を呼び出すまでもなく、両腰には最初から鞘に納められた刀がセットされている。……しかし、それとは別に更に一振りずつ鞘ごと刀をセットする部分がある。

頭部の兜からは三本角が延びており、それが雄々しさを醸し出す。両目はバイザーに覆われ、口元はバイザーと連結したマスク。開閉式のように、閉じてしまえば素肌が露わになる箇所は一つたりと存在しない。

全体的に、ISとしてはどこか異質な感を持つ機体だ。

ISの装着が終わった総一は、その手に握っている小太刀を左腰に収めた。

「織斑、何を呆けている。お前もさっさと展開しろ」

総一のIS展開を見届けた千冬は、未だ展開を始めていない一夏へと催促の言葉を掛ける。

「は、はいっ！」

言い、一夏は右腕を前方に突き出す。

右腕にはガントレット。……それこそが一夏の専用機、『白式』の待機形態である。

基本、ISの待機形態は操縦者が身に着けるアクセサリーの形状を取る。

その点において、総一と一夏は異質であった。

一夏のガントレットは――確かに身に着ける物ではあるのだが――アクセサリーというよりも防具である。

一方の総一の待機形態である柄巻き。飾り付け、という点においては確かにアクセサリーと呼べなくもないだろう。……しかし、飾り付けられているのが操縦者ではなくその得物である。

何故、両者に限ってこうなのか？ その理由までは誰にも分からない。……が、説明だけなら簡単だ。『男だから』の一言ですむ。ともあれ。

一夏は突き出した右腕のガントレット部分を左手で掴んだ。

そして、光が一夏を包み込む。

「よし、飛べ」

三者の展開終了を確認した千冬が告げる。

慣れ、というべきか。真っ先に上昇を始めたのはやはりセシリアであった。その上昇速度は流石に速い。

次いで、上昇を開始したのは一夏である。その速度はセシリアに劣るものの、十分に速いと言える。

そして、総一は中々上昇を開始しない。

見かねた千冬が口を開く。

「どうした、大神？ さっさと——」

飛べ、という言葉は続かなかった。……総一のISに変化が見られたためである。『狼虎』の所々から、緑色の粒子が放出されているのだ。

（何だ、これは……？）

千冬は心中で呻く。

コレは違う。武装の展開時などに放出されるモノとはまた別だ。

——長い間ISに関わってきた千冬だが、こんな現象は見たことがなかった。

千冬が疑念を抱く間にも、粒子の放出は止まない。……寧ろ、その勢いを増していく。

そして、粒子が完全に『狼虎』を覆い隠したときである。

「よし、掴ん——」

総一の声が聞こえたかと思えば、その場から消え去ったのだ。
では、どこに？ と探す必要もなかった。

「——だ！」

「キャ……ッ!？」

インカムから、総一の声とセシリアの悲鳴が聞こえたのである。

「お、大神さん？ いつの間に現れましたの？」

「セシリア？」

なおもインカムから流れる声を聞きながら、千冬は上空を見上げ

る。

確かに総一の姿があった。キヨロキヨロと左右を見回している。

「どういことだ……？ 俺はいつの間に飛んだ……？」



囁くほどに小さな声を、千冬は確かに聞き取った。

総一と同じ疑問を、まさに千冬も抱いていた。

（……アレは飛翔ではない。あつて然るべきの、空気の乱れがなかった）

空を飛ぶ、ということは、空気を裂く、ということだ。

ヒトがゆつくりと動く分には、空気の乱れもほんの僅かですむだろう。それこそ、普通は気付かないくらいに……。

しかし、今の総一はISを纏っている。それだけで、空気の乱れも大きくなる。

そして、総一の姿を見失ってから再び見付けるまでの時間である。

……まさしく『刹那』と呼ぶに相応しい短さだった。

それほど一瞬で移動したのなら、空気の乱れは膨大だ。風が刃と化して襲ってきてもおかしくはない。……だが、そういった現象は一切起こっていないのだ。

では何なのか？ と問われると、千冬には皆目見当もつかない。

どう考えても、オカルトじみた答えになってしまうのである。

（バカバカしい……。科学全盛のこの時代に、オカルトなどあるものか……）

故に、千冬は頭を振る。

ISに関しては東に次ぐ知識量を誇る千冬とて、その全てを知っているわけではない。起動条件やISコアについてなど、知らないことも当然あるのだ。

そして、総一は男の操縦者である。一般に女性だけが起動できるISを起動させた、現時点では三名だけしか確認できていない例外なのである。

だとすれば、先の現象もそれ故のこと、と考えられなくもない。……寧ろ、男であるからこそ起こった現象、と説明付けるのが妥当である。

ISが世に広まってから、かなりの年月が流れているのだ。……にも関わらず、先のような現象は一度として確認されていない。その事実が、千冬の推測を後押しさせた。



（今のは、まさか転移か……？）

一方、総一の出した結論は千冬とは真逆である。

総一はドップリとオカルトに浸かっているのだ。……故に、寧ろ突飛なことほど答えを出しやすい。

実際、総一の同僚であるリリィは、その持ち前の霊力を以て転移することなどザラである。

（しかし、どうやってだ……？）

答えが出ても、その式が分からない。

転移、というものは、そうそう簡単にできるモノじゃない。自分一人の力だけでは、総一にだって不可能だ。……個人の力だけでポンポンと転移できるリリィこそが例外なのである。

にも関わらず、総一は転移した。

そして、現状、霊力は有り余っている。……というよりは、今の転移に霊力は使用していない、といった方が正しいだろう。

だからこそ、その理由が分からない。原因が分からない。

IS側に原因があるのは確かだろうが、その肝心要の部分が分からないのだ。

転移する前、総一は『狼虎』の波長を探っていた。

なにせ、総一には『空に留まる感覚』など分からないのだ。

空中戦をやったことはあるが、それは『時間制限あつてのモノ』なのである。総一の感覚で飛行した場合、遠からず地に降りるであろうことは想像に難くない。……しかし、それでは周りに迷惑が掛かる。

だからこそ、総一は『狼虎』に頼ることにした。

基本的に、ISは宙に浮くことが前提として創られている。

ならば、『狼虎』もまたその感覚を知っている、ということになる。……である以上、『狼虎』に頼るのは何らおかしいことではない。

そもそも、ISとは相棒パートナーなのだ。頼りすぎは良くないが、時と場合によっては頼ることこそ正当である。

しかしそのためには、その旨を伝えなくてはならない。……わけであるが、いくら相棒と言ったところで、ヒトとISは別物だ。そう簡単にコミュニケーションなど取れるわけがない。

だが、総一は数少ない例外であつた。『稟武』然り霊体然り——正否はともかくとして——ヒトならざるモノとのコミュニケーションを取るなどしよっちゅうである。

また、『触媒』という稀な性質を持ったためか、総一は——こと、人外相手の場合——そのテの感覚を掴むのに長けていた。

そして、『狼虎』の波長を探り当て、内容を伝えた。……そこまでは良い。

だが、気付いたときには中空にいたのである。

転移と相成った理由、転移を可能とした原因、双方共にサッパリ

と分らない。

（ISとは、一体何なんだ……ッ！？）

心中にて、総一はISに対して深い戦慄を覚えた。



だが、いつまでもそうしているわけにはいかないのも事実である。今は授業中なのだ。一人の遅れが全員の遅れに繋がることとなる。故に、総一は気持ちを切り替えた。

「それにしても、この感覚はどうにも慣れないな。空中停止に関しては、今暫くの間『狼虎』に頼らざるを得ない……か」

手を握ったり身体を軽く揺らしたりしながら総一は零した。

やはり、足下の感覚がない、というのがネックである。これを常態とするにはちよつとやそつとの時間ではすまないだろう。……そう、改めて実感した。

「三人とも、次は急下降と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十c mだ」

そこに、通信回線から千冬の声が届く。

それを聞いた総一は、意識を僅かながら戦闘時のそれに切り替える。

実戦において、動揺は好ましいモノではない。個人のみならず仲間へも被害を拡大しかねないからだ。

故に、戦闘時にはあくまでも冷静に対処できるよう、総一は意識を切り替えている。

だが、何も『機械』になるわけではない。……それでは意味がないのだ。

自らの意志で、自らの為したいことを為す。

それこそが人間である、と総一は考えている。……である以上、為したいことを為すために心を凍らせてしまつては、それこそ本末転倒である。

心は熱く、頭は冷静に。……それが総一の戦闘態勢だ。

つまり、下降時に同様の現象が起こったとしても対処が容易になる、ということである。

「了解です。ではお二人とも、お先に行かせていただきますわね？」

言つて、セシリアは急下降を開始。……ピタリと停止した。

「次は俺が行かせてもらう」

それを確認した総一は一夏に断りを入れ、実験することにした。内容は簡単だ。

セシリアの隣に自分の姿をイメージし、それを同調した『狼虎』に伝えるだけである。

瞬間。

「うお……っ!？」

一夏の悲鳴を置き去りに、総一はその場から姿を消した。

「キャ……ッ!？　またですよ!？」

そして、セシリアの隣に現れた。

（成功……か。さて、コレの意味するところは一体何だ……？）

IS に対する戦慄は確かにあるが、『力』というものは使いようである。

この転移能力は、恐ろしくも非常に便利である。
なにせ、瞬間的な移動を可能にしておきながら消費エネルギーは微塵もないのである。

そう、普通に移動するよりも消費しないのだ。
悪用されたら堪ったモノではない。……が、時と場合によっては、この力に助けられることもあるだろう。

（もっと、IS のことを知るべきだろうな……）

総一は改めてそう思った。



「さて、最後は俺か……。頼むぜ、『白式』？」

総一とセシリアを見届けたあと、一夏はそう呟いた。

一夏自身、空を飛ぶ感覚など未だあやふやだ。

それがこうして浮かんでいるのは、やはり『白式』に頼っているからに他ならない。

また、稼働時間、知識面においても一夏は大きく後れを取っている。

ならば、頼って何が悪いか。——今の一夏は良い意味で開き直っていた。

見栄を張っている余裕などない。千冬、箒、総一、桜華、セシリア等々、今の一夏は色んな人たちに支えられているのだ。……である以上、一刻も早く皆に追いつくこそが、現時点で出来る最

上の恩返しに他ならない。

それに、と一夏は自室の方へと視線を移す。

部屋に置いてある『閃刀・煌威』の鼓動が、こうして離れていても感じられる。『早く自分を執れ』、『自らを抜け』……とひっきりなしに催促してくる。

だが、今の一夏はそれに答えることが出来ない。非常時ならまだしも、平時から持ち歩くわけにはいかない。そんなことをすれば容易く吞まれてしまうだろうことが、否応なく分かるのだ。

今の一夏にとって『閃刀・煌威』は分不相応な力なのである。

無論、時と場合によってはそれに頼らざるを得ないこともあるだろう。

しかし、それは今じゃないのだ。

そうは思うが、一夏としても『閃刀・煌威』に早く応えたいのである。

(悪い、『煌威』。もう少し、もう少しだけ待っていてくれ……)

心中で謝罪し、一夏は集中する。

ISもまた『兵器』であり『力』だ。

故にこそ、皆に追いついたときには『閃刀・煌威』をその手に執ることが出来る。

少なくとも、そう易々と吞まれはしないだろう、と信じて……。



急下降、完全停止は問題なく終わった。

次は武装展開である。……が、そうなるに総一にはやるのがない。

なにせ『狼虎』の武装は最初から展開されているのだ。

基本武装である手甲と脚甲、そして刀。……これが『狼虎』の武

装の全てである。

手甲の『狼牙』と脚甲の『虎爪』が初期装備に当たり、二振りの刀、『剣狼』と『刃虎』が後付装備に当たる。
プリセット
イコライザ

見事なまでの接近戦仕様だが、寧ろ総一にとってはありがたい。最初から展開されているのは、総一の戦闘スタイルを慮つてのことだろう。普段から重さを感じていないと、調子が狂って仕方ないのである。

刀は鞘に納められているが——素人ならばともかく——総一にとって抜き放つことなど造作もない。

「大神、取り敢えず抜いてみせろ」

千冬から指示が下ったのは、さてどうしたものか、と総一が考えているときであった。

「了解です」

返答し——周囲とある程度の距離を取った後——総一は両腰の刀を抜刀した。

「……うん、問題ないな」

「大神くん、こちらへ」

呼ばれ、総一は真耶の横へと並び立つ。

「織斑、まずはお前からだ」

「はいっ！」

総一の視線の先、一夏が取るのは居合の構え。

抜刀の動作が終わったとき、空手だった一夏の手には『雪片式型』
モーション

が握られていた。

「ふむ。まあ、問題なし……か」

千冬は頷く。

剣術において、居合は確かな技なのである。

その動作をしなければ武装展開できない、となれば問題だが、現時点ではそこまで言う必要もない。

「では、セシリア」

「はい」

左手を肩の高さにまで上げ、真横に突き出す。……それだけで、セシリアの手には『スターライトmk?』が握られていた。

「流石だな、と言いたところだが……」

「何か問題が？」

口を濁す千冬に対し、首を傾げるセシリア。

通常、真横に銃を向けたところで敵はいない。

包囲されていれば別だが、その段になって展開するようでは、そもそも遅すぎる。

故に、敵は真正面にいるものとして、普通ならば矯正させるところである。……しかし、セシリアの専用機である『ブルー・ティアーズ』の特性がそれを覆す。

真横に手向けなければ展開できない、という事実も、ある種の油断を誘えるからだ。

これで、特殊装備『蒼い雫』ブルーティアーズの操作が覚束なければ問答無用で矯正させているところである。……のだが、セシリアは問題なく『蒼い雫』を操作できている。

要は、油断を誘い、そこを『蒼い雫』で撃ち抜く、といった手段が可能かどうかなのである。……そして、セシリアにはそれを可能とするだけの實力がある。

一種の戦術であるために、それに気付いているかを堂々とする場で訊くわけにもいかない。

また、『スターライトmk?』は光線銃であるが、実弾銃の場合は曲射や跳弾といった技——危険極まりないが、技として使える者がいないわけではない——が考慮される。

有り得ないと思うが、セシリアがそれを可能とする場合、長所を損なうことにも繋がりかねない。

結果、千冬としては口を濁さざるを得ない、というわけである。しかし、黙っているわけにもいかないので千冬は口を開く。

「……いや。セシリア、仮に実弾銃を握ったとして、曲射や跳弾を技として使えるか？」

まあ、無理だろう。

そう思っただけの言葉だったが——

「……場合によっては」

——千冬の思惑は否定された。

しかし、そう答えたセシリアの身体は面白いように震えている。ブルーメール家所有の森林の中。先端が吸盤となった矢がどこからともなく飛来してくる。しかも複数。申し訳程度に銃を握っているとはいえ、生身の自分は防ぎきれない。結果は化粧でも隠しきれない現実である。——セシリアの脳裏には忌々しい思い出が飛来していた。

「そうか……。まあいい。次は近接用の武装を展開しろ」

「そうですわ。この時間に外出が許されるとしたら、基本的にアリナくらいでしょう？」

ここに着いてから、かれこれ五分は経過している。

一緒に来てくれないか？ としか言われてない二人が疑問の声を上げるのは当然であった。

とはいえ、そもそも誘われたときに確認するべきことであるのだが……。

何だかんだで、三者の間に信頼関係が生まれている証拠だろう。

「いや、人を待っているんだが……な。まあ、多少時間がズレるのは仕方ないだろう。すまないが、もう少しだけ我慢してくれ」

時計を見た総一は僅かに渋面を浮かべ、溜息を吐いた後、二人に謝罪した。

「いや、別に謝られるようなことじゃあないんだけどよ……」

「ところで、待ち人とは一体……？」

一夏が頬をかき、セシリアが首を傾げる。

「一言で言えば転入生だ。人数は三人。全員、というわけではないが、二人にも関わりのある人物がいるからこうして同席してもらったわけだ。……実際、出迎える必要はないんだが、ここは初心者に優しくないからな。それこそ『他人』であるなら俺もここまでしないんだが、見知ったヤツらが相手となるとそうそう無碍には出来ん」

壁に寄り掛かり、腕を組みながら総一は言う。

「それで、相手の名前は教えてくれないのか？」

「お楽しみ、というやつだ」

「左様ですか……」

そんなやり取りをした後、全員が微笑を浮かべる。

他愛のないやり取りではあるが、こんな機会もそうそうない。

待ちぼうけを食らっている現実を脇に置き、三人共に『いま、この瞬間』を楽しんでいた。

「つと、どうやら来たようだ」

言って、総一は勢いよく壁から背を離す。

その言葉に一夏とセシリアが耳を澄ませば、確かに足音と話し声が近付いてくる。

これだけなら、そうである確証はない。

しかし――――

「あれ？ この声って……？」

「あら？ この声は……？」

――――思わず零してしまうほどに、一夏とセシリアは声に聞き覚えがあった。

そして、足音を刻む速度が上がったことを鑑みるに、どうやら向こうも気付いたようである。

「すまない。どうやら待たせてしまったようだな、朋友^{とも}よ。……うん？ セシリア、か？ そうか、君も待っていてくれたのか。重ね重ねすまない」

まず口を開いたのは金髪青眼の美男子である。
名をリヴァイアス・ブルーメール。通称、リーヴァだ。

「あーっ！？　一夏じゃない！　なになに！？　わざわざ迎えに出てくれたの！？」

次に声を上げたのは左右の髪の毛の高い位置で結んだハイテンションガールだ。

凰鈴音。通称、鈴。……一夏曰く『セカンド幼馴染み』である。

「やあ、お疲れ様。どうやらきちんと連れ出してくれたようだね。おかげで助かったよ」

最後は中性的な顔立ちをした少女。

李桃雫。通称、桃。もしくはシズク。……総一と同僚である。

「さて、積もる話もあるだろうが、時間が時間だ。先に用件をすませよう。受付に案内する。……っと、忘れていた。お三方、IS学園にようこそ」

まるで芝居がかった仕草で、総一は優雅に一礼した。

第10話（後書き）

第10話投稿です。

スパロボとクロスした理由の一端がここに……。上手く伝われば良いんですが。

それにしても便利な言葉ですよ。『ブラックボックス』って。

また、本作の千冬は原作よりも幾分か丸くなっています。少なくとも、自分ではそう思っています。

そして、いよいよ鈴たちが合流しました。

というか、長いですね。10話も使って原作一巻分が終わっていないって……。

しかも、まだまだ掛かる始末です。

見捨てず、応援いただければ幸いです。

感想お待ちしております。

第11話

「ねえねえ、二人とも！ 転入生の噂、聞いた！？」

翌朝。教室に着くなり総一と一夏は女子に詰め寄られた。

（まったく……。昨日の今日なのに情報の回りが早いな。やはり、女性の情報網は侮れん）

心中ではそんなことを思いつつも、総一はそれを表に出すような真似をしなかった。

なにせ、諸々の手続きが済んだ後、日付が変わるまで色々と言ひ合っていたのである。……若さ故に体力面では問題ないが、それに胡座をかいていると後々手痛いしっぺ返しが来かねない。

なので、今は少しでも休息に当てたい、というのが総一の本音である。……かといって、無視をするわけにもいかない。

普通なら中々に困る状況だが、総一には策があった。

「ああ、知ってます。……と言うか、俺は曲がりなりにも生徒会の一員ですよ？ 他学年ならともかく、同学年のことですし、その程度の情報は持っていて当然だと思いませんか？」

総一は真っ向から肯定し、同意を求め、有無を言わせぬうちに席へと向かう。

ただ肯定するだけならば、次から次へと会話が続く可能性が高い。しかしこうすることにより、相手はそれについて思考せざるを得ない。

転換内容があまりにもかけ離れていたりの外れだったりすれば通用しないが、総一は『生徒会の一員』という点を強調している。

加えて、知っていて当然、という態度を取っているのである。…であるならば、十中八九成功する見込みがあった。

こういう場合、相手は——事実か否かは二の次に——憶測混じりの会話を楽しみたいのである。

なのに、事実を知っている相手と会話を続けたのでは、意味がない。……楽しみが無くなってしまうのだ。

つまり、総一は相手の思考を誘導することにより、逆手に取ったのである。

リヴァイアスや桃雫のことであれば、総一もかなりのことを知っている。……しかし、残る転入生、凰鈴音に関しては当たり障りのないことしか知らないのである。

昨夜においても、総一は専らリヴァイアスや桃雫を相手にしていたのだ。

流石に六人——総一、一夏、リヴァイアス、セシリア、鈴音、桃雫である——もいれば、会話をしないではなかったが、どちらかと言えば間接的な会話である。

人となりを知る一つの目安にはなるが、あくまで目安止まりだ。そこまで詳しく知ることなど出来はしない。

しかし、話し掛けてきた女子がその真実を知っている筈もない。故に、総一は悠々と席に向かうことが出来たのである。

「じゃあじゃあ、織斑君はどう？」

結果、一夏が割を食うはめになった。

一夏とて就寝時間は総一と然程変わりない。……である以上、やはり休みたいのだが、一夏は生徒会役員でなければ、クラブにすら入っていないのである。

必然、上手い言い訳など出来るはずもなかった。

「あゝ、俺が知ってるのは転入生が三人で、うち一人が俺の幼馴染

みってことぐらいだ。……俺も総一も昨日は遅くまで起きてたから眠くてしょうがないんだ。だから、悪いけどこれで」

言うだけ言って、一夏は席へと向かう。

意図したことではないが、一夏の取った方法もまた思考の誘導であつた。

一夏のセリフは、ちょうど女子たちの煩惱を刺激する形だったのだ。

「やっぱり、織斑くんと総一くんって……」

「けど、だとしたら加山くんはどうなるの？」

等々、その勢いはいやにも増していく。

当然、その会話は一夏にも届いていた。……のだが、如何せん彼にとつてその内容は理解の外にあつた。

それが幸せなことなのか、それとも不運なことなのか。

それを知る者は誰一人としていなかった。



「はい、皆さん。席についてくださーい！ でないと、皆さんのお楽しみタイムが刻一刻となくなっていくですよー？」

「りょーかい、山ちゃん」

「だから早く紹介してー、マヤマヤー」

一年一組の副担任、山田真耶の号令が下る。その言葉は、婉曲的に転入生がこのクラスに入ることを告げていた。

それ故だろうか、比較的素早くめいめいは席に着いた。……が、ただ席に座るだけではなかった。生徒たちは生徒たちで、真耶へと軽口を返しながら席へと着いているのだ。

これも、親しみやすさの表れ、ということなのだろう。千冬相手では決して起きない現象である。

真耶としても、こういった雰囲気は嫌いではない。ギスギスした空気よりは和気藹々とした空気の方が好みである。

しかし、だからといって流されてはいけない。流されるわけにはいかないのだ。

何故なら、真耶は副担任。……つまりは教師なのである。

である以上、締めるところはキッチリと締めなくてはならない。

「はい、いま『山ちゃん』とか『マヤマヤ』とか言った人は誰ですかー？ 挙手してください。自己申告した方が罰は軽いですよー？ ……返事はなし、ですか。では、仕方ありません。連帯責任ということで全員グラウンドを十周してきてください」

親しみやすい声音と笑顔を生徒たちに向け、真耶は決して歓迎できないことを言い放った。

その途端――――

「はい、茜さんが『山ちゃん』言っていました！」

「緑さんも『マヤマヤ』言っていました！」

――――教室内で、次から次へと同朋クラスメイトを売り払う声が巻き起こった。

素直が大事、とは言うが、如何せんこれは素直すぎる。

「はい、では大神くん、織斑くん、オルコットさん、篠ノ之さん、布仏さんを除く全員は至急グラウンドを二十週してきてください」

「えー、なんでよ山Pー？」

再度真耶が笑顔で言うと同時に、教室内から沸き上がるブーイン

グの嵐である。

「いいですか、皆さん？ 皆さんはクラスメイトです。お友達です。お仲間です。悪いことを『悪い』と言うのは大変結構なことですが、そこに利益を絡めてはいけません。目先の欲だったら尚更です。今回、皆さんは私が連帯責任を言いだしてから、声を上げました。：つまり、言い方は悪いですが『自分のためにお友達を売った』んです。……これはよくありません。ろくな大人になれません。……なので、戒めるためにも走ってきてもらいます。これも私からの『愛の鞭』です」

その言葉を受け、全員が感動した。
ジーン、と涙ぐんでいる者もいる。

ここで終われば『お涙頂戴劇』的一幕だったのだろうか――――

「あ、それといま『山P』言いましたので、更に十週追加です」

――――やはり、そう簡単には終わらない。

最後に、笑顔で爆弾を投下する。……騒がしく、同時に濃い面々に囲まれて、着々と成長している真耶であった。

「ええええー！ーっ!？」

一部を除いたクラス全員が、驚愕の声を張り上げた。

「……と言いたいところですが、それだと転入生の方にも迷惑が掛かるので今回は見逃します。でも今回だけですよ？ プライベートタイムならともかく、学校にいる間、もしまた次に『山ちゃん』だの『マヤマヤ』だの『山P』だの言った場合は問答無用で走らせますからね？」

しかし今回、転入生によって生徒たちは救われた。……生徒たちがまだ見ぬ転入生に感謝の念を抱いたのは言うまでもない。

「それでは転入生の方を呼びますからねー？」

真耶の言葉に――――

「はーい！」

――生徒たちは唱和で答えるのであった。

「……それでは入ってきてください！」

扉が開く。

そこから入ってきた姿に、生徒たちは、ホウ……、と溜息をついた。

歩を進めるごとに、腰元まで延びる金色の髪が風に靡く。歩く姿も優雅ならば、佇む姿も優雅そのもの。青い瞳はどちらかといえば鋭角的であり、微笑を浮かべた口元と相俟って、蠱惑な輝きを放っている。……一切の誇張を必要としない、紛れもない『美少年』である。

改造された制服からはローブが広がり、右腕の袖口から時折ブレスレットが顔を出す。

その顔立ちと相俟って、まさに『貴公子』と呼ぶに相応しい。

「それでは、自己紹介をお願いします」

「了解しました」

声もまた魅惑的である。男性としては割と高めなその声が、この

人物にはよく似合っていた。

「それでは、名乗らせていただく。名はリヴァイアス・ブルーメル。リーヴァ、と呼んでくれると嬉しい。フランスはパリからやって来た。そこにいるセシリアの幼馴染みであり、総一とはかつて^{とも}朋友の契りを交わした仲でもある。また、暫定的ながら部屋は総一及びムツシュ織斑とシェアしている。……このように一部例外もあるが、おおよその面々とは初対面であるな。これより三年間、共に学舎で過ごす仲だ。よろしくお願いする、マドモアゼル。……それと、最後にもう一つ。私は国許に婚約者がいるので、そういったアプローチは遠慮する。……こう言っておいた方が良い、と昨夜セシリアに言われたのでな」

挨拶を終え、リヴァイアスは最後に一礼した。……その様もまた気品が溢れる。

リヴァイアスの言葉に対する反応は実に様々だ。

「へえ、やっぱり実際にいるものなのね」

ある者は芝居やお話じゃなしに『婚約者』という言葉が使われたことに対する感嘆を……。

「くう、つ、セシリアったら余計なことを……！」

またある者はセシリアに対する理不尽な怒りを抱き……。

「略奪愛。……ふふつ、燃えるわ！」

そしてまたある者は静かに気炎を上げ。

「まさかの三人プレイ……ッ!? 気になる……! 気になるわ」
……っ!」

中にはこんな者もいた。

「では、ブルーメールさんは席についてください。皆さんも、これにてHRを終わりますので一時間目の準備をしっかりとお願いしますね……!」

そう言って真耶は教室から去っていった。

皆が皆、授業の準備を進める。……千冬が姿を現さなかったことに気付いた生徒は、ほんの僅かにしかいなかった。



「一夏、すまないがリーヴァの案内を頼めるか? 俺は他に迎えに行かなくちゃならないヤツがいるんで、案内できないんだ」

「あゝ、わりい。ちっと無理だ。俺、昨日の夜——というよりは今日になってからだけど——鈴から昼飯誘われてんだよ。だから、迎えに行かなくちゃ……」

昼休みのことである。開始を告げるチャイムが鳴って然程間も経たない内に、そんな会話が行われた。

当然ではあるが、寮の食堂と学園に設置されている食堂は場所が異なる。

そして、IS学園の内部構造は初心者に対して非常に優しくない。……その事を鑑みれば、迎えに行った方が安心だろう。親切なクラスメイトに案内されている可能性がないではないが、その確証も無い以上、楽観視することなど出来るはずもない。

「なら、そっちの方は俺が案内しよう。俺が迎えに行くヤツも同じ四組だしな」

「ああ、なら俺が行くよ。どうせ李さんを迎えに行くんだろう？」

昨日の今日である。鈴と同じクラス、ということで一夏が真っ先に思い浮かべたのは、やはり桃雫であった。

しかし――――

「シズクも、と言った方が正しいな」

――――総一の返答は曖昧だった。肯定には違いないが、同時に否定でもある。……そうになると、一夏には他に思い浮かぶ人物などいなかった。

「シズクはあれで要領が良いから然程心配していないんだが、もう一方は……アレだ。こう、周囲に壁を張ってるんだよ。それこそ、キレた時の桜華並みに近付けるヤツが限られてるんだ。無論、俺以外にも近付けるヤツはいるんだが、そうすると今度はシズクとの接点がない。……結果、俺が行かざるを得ない、ということだ。親しい、と言うほどではないが、凰さんとの接点も出来たことだしな……」

こう言われてしまえば、一夏としても頷かざるを得ない。

「そっか……。分かった。じゃあ、リーヴァは俺が案内しとくよ。その代わり、鈴のこと頼むな？」

「忝ない。手間を掛けさせるな、ムツシュ」

一夏の言葉に対し、リーヴァが礼を言い――――

「ああ」

——総一が頷く。

一夏とリヴァイアス間における互いの呼び方については、昨夜の内に決着がついていた。その際、一夏からリヴァイアスに対する呼称については問題なく終わったのだが、その逆は結構もめたものである。……三者の寝不足はこの口論も関係していた。

生来の気質に北大路家との付き合いも相俟ってか、礼儀作法や何やらについて、リヴァイアスは非常に厳しい。他者に強要することはないが、その分自分への締め付けが大きかった。

そうになると、一夏としても黙ってられない。彼とて一応の礼儀は弁えている。『相手が格式張った呼び方で自分に対するのなら、自分もまたそれに倣う』……これも一つの礼儀である。

両者の間で水掛け論が続き、見かねた総一が割って入るまで、決着がつかなかったのである。

なので、実際のところ二人の仲——友愛、という意味で。決して恋愛ではない——はかなり狭まっている。

リヴァイアスとて既に一夏のことを名前で呼んでも構わないくらいに親しみを覚えているのだが、そんなやり取りをした手前、そう簡単に呼んでは格好がつかなかった。……一般に『頑固』と呼ばれる性格のタチの悪い部分である。



そして食堂。

八人が向かい合って座っていた。

「さて、初見の者もいることだし、名前だけでも名乗っていいどうか」
始めに口火を切ったのは総一である。大概において、彼は舵を取

ることが多い。……帝国華撃団・花組隊長、という中間管理職に就いて以来の技能であった。

「そうだな……？ 取り敢えず、一夏から頼む」

「俺からかよ！？ 言い出しっぺのお前からやれよ！」

「まあ、普通ならそうなんだろうが……この位置関係を考えると、な？」

食って掛かる一夏を総一は笑顔で封じる。

ちなみに席順は右端から一夏、リヴァイアス、総一、簀と流れ、簀の向かいに桃雫、そこから鈴音、セシリア、簀と流れていく。

こういった場合、確かに端から順にやっていった方が都合は良いだろう。

「お前……始めから狙ってやがったな？」

改めて席順を認識した一夏はある事実に気が付き、ジト目で総一を見やる。

ここ最近、食事を取るときは総一、一夏、簀、セシリアの四人で固まるのが日課となっている。そしてそこに、急遽四人増えることになった。

ポイントは、人数が揃うのに時間差がある、ということだ。片や一組であり、片や四組なのだから、それも当然である。

そして更に、四組のメンバーを迎えに行くために総一が一時抜けた、という点もポイントである。……五対三が四対四になったのだ。その中で割り振る場合、まずは見知った者同士で固めようとするだろう。

しかし、簀とリヴァイアスは同じクラスであるものの、その接点は無いに等しい。……故に簀とリヴァイアスの配置は、自然と対角線上になる。

そこに、更に四人加わるのだ。……そして、一部例外がいるものの、ここは基本的に女子校である。

ならば、男の列と女の列に分けよう、と思いつくのは極々自然なことである。

人数的に女子の一人が男子の列に加わることになるが、四組のメンバーの内、一人は『気難しい』とのことなので、総一の横にその人物を宛がえば然程問題はない。

付けて加えて、『日本人の気質』故かお客様には一歩退いた態度を取る傾向が一夏にはある。……と同時に『男の矜持』もしっかりと持っている。

それらの事実を踏まえた上で、改めて席順を見てみると、見事なまでに一夏に白羽の矢が立っているのだ。

端に座るのは一夏、簪、桃雫、箒である。

そこから『お客様』てんにあうしたばかりということで桃雫を除外。

残る三人は元から通っているのだが、一夏以外は女子である。

故に『男の矜持』に引っ掛かり、一夏が先陣を切らざるを得ないので。……ついでに言うところ、箒も簪も『協調性』というものが一夏に比べて格段に低い、という点もあった。

一夏はその事実気付いたからこそ、総一へとジト目をくれたのである。

しかし、総一は慌てず騒がず反論する。

「おいおい、言い掛かりはよして欲しいな一夏。……確かに自己紹介の必要は認めていたし、画策していたことも認める。……が、席順に関してはお門違いだ。予測はしていたが、必ずしもそうなるわけじゃないだろう？ お前の位置にリーヴァが、そして箒さんの位置にセシリアがいた可能性だってゼロじゃないし、それこそ全く別の席順だった可能性もなくはないんだ」

終始笑顔で言う辺り、総一は一夏が食って掛かってくることも想

定していた可能性が高かった。

「くっ……！ 確かに……！」

そう言われると、一夏も認めざるを得ない。……あくまでも『可能性』は『可能性』でしかないのだ。

「はぁ……。分かったよ。俺からやればいいんだろ？ ……俺は織斑一夏。一応、一年一組の『クラス代表』なんてのも務めている。……はい次、リーヴァよろしく」

溜息をついた後、一夏は簡単に名乗り、隣に座るリーヴァイアスへとバトンを回す。

そのあとは特に問題なく順々に巡っていった。

「……で、だ。何でこの面子になっているのか改めて説明すると……だ」

食事を済ませた後、おもむろに総一が口を開いた。

自然、メンバーの誰もが耳を傾ける。……特に、簪が加わっている理由が分からないためだ。

「シズク、悪いが簪の専用機を請け負ってくれないか？ 本来なら倉持技研が開発を担当していたんだが、信じられないことに人手の全てを『白式』の方に回しているらしくてな……。花小路さんにも確認を取ったからそこは間違いない。……で、俺としてはそんな幼馴染みを放っておくことなんて出来ない。しかし、ISの開発云々に関しては、俺が直接力になれることなどありそうにない。俺に出来ることなどコネを使って心当たり頼むことぐらいだ。そして『クラス対抗戦』までに仕上げる事が出来るようなヤツは……シズク、

お前ぐらいしか心当たりがない。頼む、この通りだ」
「お願い」

総一と簪が揃って桃雫へと頭を下げる。

「ふうん、なるほどね。まあ、他ならない総一の頼みだ。引き受けても構わないよ。……けど、いいのかい？　ボクは高いよ？」

「構わん。お前のことは信頼していれば信用もしているからな」

「嬉しいことを言ってくれるじゃないか。これで商談成立だ。……それじゃあ今度デートをしよう。恋は戦い。こういう機会は逃さないに限るからね。……ついでに織斑くんと鈴でダブルデートなんてどうだい？」

「まあ、そのくらいならな」

「さんせー！」

総一が頷き、鈴音が諸手を挙げて賛成する。

このまま、万事上手くいくかと思われた。

「ちょっと待て……！」

「ちょっと待った……！」

——が、そうは問屋が卸さなかった。

二人の恋する乙女が立ち上がる。

言わずと知れた簪と簪である。……目当てとする相手は互いに異なっていたが。

「なんで総くんとデート!？」

「なんで一夏がデートしなくてはならないのだ!？」

噛み付かんばかりの勢いで吼える二人。

「なんで、と言われてもね。言っただろう？ 『恋は戦い』 ってさ。耳が遠いのかい？ まあ、そんなことはどうでもいいんだ。いい機会だからハッキリと言っておこう。織斑くんとは知らないが、総一と結ばれたいんだったら、まずは寛容な精神を身に着けることだね。なにせ、総一はこれ以上ない『人たらし』だ。年上年下人種性別の区別無くモテる様を見ていれば、一々張り合おうとしてもムダだと気付く。……厄介なのは、本人にその自覚がないことだ。いや、この言い方は正しくないな。総一の場合、自覚していても『色恋沙汰』に対する優先度が低いんだ。『武士道』だの『未成年』だのを理由にして、まともに向き合おうとしないのさ。だからまあ、結局は積み重ねがモノを言うことになる。……そら、機会を逃すわけにはいかないだろう？ 織斑くんに関しては、鈴が彼に惚れてるからね。親友としては、後押ししないわけにいかないだろう？」

それに対して、桃雫は慌てるでもなく悠々と反論する。

流石、というべきか。中々に口が達者である。

箒と簪は桃雫に吞まれ、言葉が出ない。

「まったく……。本人を目の前にして言うことか？」

「本人が前にいるから言っているんだがね？」

溜息を吐きつつ総一が言うも、やはり桃雫は言い返す。

「いや、その……。うん、まあ、すまん」

桃雫の言葉は間違っているわけではないので、そう返されれば総一としても謝るより他にない。

「まあ、そういうわけだ。ゴールデン・ウィーク黄金週間にでもデートをしようじ

やないか。……ああ、簪さんだったかな？ 黄金週間は何も一日限りじゃない。そんなに落ち込んでないで、君もデートをすればいいじゃないか？ それは簪さん？ 君にも言えることだよ？」

桃雫のその言葉を聞いて――――

「本当……！？」

「本当か……！？」

――――意気消沈していた乙女二人は復活した。……何とも現金なものである。

そして、当事者である男二人を置き去りに、黄金週間にデートをすることが決定したのであった。

第11話（後書き）

そんなわけで、鈴は二組ではなく、桃雫とセットで四組と相成りました。

総一が頑張った結果ですね。……早い話が、生徒会副会長としての立場や更識姉妹の幼馴染みという立場を利用した『公私混同』です。うちの総一は一郎さんほどキレイじゃないんです。黒くなる時はどこまでも黒くなるんです。

何気に真耶も改変です。こんな真耶はどうでしょうか？

次話はオリジナルですね。GWに何もないのはどうかな？　と思っただ次第です。

感想お待ちしております。

第12話

「なあ、これは一体どういうことだ？」

一夏は思わず問い掛けた。相手は総一、鈴音、桃雫の三人。答えてくれるのなら誰でもよく、だからこそ、特に個人を指定することはしなかった。

今日は五月初頭。一般にゴールデン・ウィーク黄金週間と呼ばれる日である。

流された感是否めないが、今日は前からダブルデートをする事になっていたので、このメンバーに異論はない。

しかし。……しかし、である。

「いくら何でも、デートでこの場所はおかしいんじゃないか？」

一夏は再度問い掛けた。

ここはどこかのスタジオである。名前は知らない。入るときに見たかもしれないが、生憎と一夏は覚えていなかった。……それでもよく週刊誌で見かける女性がパシャパシャと写真に撮られてる様を目の当たりにすれば——芸能方面に明るくない一夏であっても——そのくらいは流石に分かる。

一夏はデートなどしたことがない。以前の桜華とのそれは、一夏の中でデートと認識されていなかった。

そんな一夏にしても、コミックやライトノベル、アニメやゲームなどでそこその知識はある。数え上げればキリがないほど候補はあるが、一般的にはカラオケやショッピング、遊園地や映画館などが妥当であろう。

その点を踏まえた上で考えても、流石にこれはない。

一体どこの世界に、デートコースに有名人が跋扈するスタジオを組み込む者がいるというのか？

(―――って、ここにいるのか……)

一夏は力なく自分にツツコミを入れた。

そんな一夏に追い打ちを掛けるように三者が口を開く。

「まあ、俺たちは立場が立場なんだから……。完全な休日の方が逆に珍しい」

「ついでに言うところ……一夏、アンタ自分の立場を理解してる？ し
てないでしょ？ いい？ アンタは有名人なの。専用機持ちなの。
美形なの」

「まあ、あまりに無愛想だったり協調性がなかったりすれば話は別
だがね。基本的にここまで条件が揃えば、これは必然というモノだ。
……寧ろ、君の立場で、今まで写真撮影の一回もやったことがない、
という方がおかしいのだよ」

「ここまで言えば察していると思うが、今日はお前も撮られるんだ
からな？」

ビシ！ ビシ！ ビシ！ と言葉が矢となって一夏を貫く。

「うあ……っ！？ やっぱりそうなのか……」

思わず呻く。……小市民を自認する一夏にとって、これは中々に
キツかった。

「そろそろ準備をお願いします」

スタッフであろう人物に声を掛けられ―――

「はい」

「オッケー」

「了解だよ」

——笑顔で応じる三人が別世界の存在に思えてならない。…
…少なくとも、そう感じるくらいに一夏は緊張の最中にあった。

「行くぞ。…こっちだ」

何の反応も見せなかったためだろう。…総一は一夏の腕を掴み、
引き摺るように連れて行く。

歩くこと暫し。

総一たちはとある部屋へと辿り着いた。

中には『これでもか!』と言わんばかりの多種多様な衣装。文字
通りの『衣装部屋』である。…ちなみにここは男性専用であり、
鈴音たち女子は別の部屋だ。

「取り敢えずはオーソドックスにスーツからだな…。一夏、これ
を着ろ。更衣室は向こうだ」

衣装を手に取り、総一は一夏に渡す。…しかし、一夏は反応を
返さない。

「一夏? おーい、一夏? ……天然スケコマシ」

声を掛けても、目の前で手を振っても、一夏は何の反応も返さな
い。

面白いと言えば面白いが、これでは困る。…そのため、総一は
禁断とも言える一言を呟いた。

「だーれが天然スケコマシだあつ! ……ってあれ? ここは…

$$\begin{matrix} \vdots \\ ? \\ \perp \end{matrix}$$

瞬間。物の見事に一夏は復活を遂げた。

「うん、気付いたようだな。やはり、自分が言われて嫌なことは効果抜群らしい。……まあ、それはともかく。気付いたんなら早くこれに着替えてこい。更衣室は向こうだ」

キヨロキヨロと周囲を見回す一夏を見て頷きながら、総一は促す。

「あ、ああ……。はあ、何でこんなことに……」

有無を言わせぬその態度に、一夏は溜息を吐きつつ更衣室へと向かう。



「あー、終わった終わった。お日様が気持ちいいなあ」

外に出るなり、一夏は思い切り伸びをした。

散々着せ替え人形になり、コメントまで求められたのである。…

…一夏はもう一杯一杯だった。

「まあ、少しばかりズレ込んでしまったが、だいたい予定通りに終わったな」

時計を確認した総一が言う。

現在時刻は正午を僅かに回ったところだ。

「それで、昼食は君たちにアテがあるんだろう？ さっさと向かおう」

うじゃないか？」

「まあ、大衆食堂なんだけどね。デートには向かないけど、ダチの家でもあるから何だかんだで気楽なのよ」

言いながら、鈴音が先導する。

「行くって伝えてあるから、席はとつといてくれるはずだけどな……」

そう言つて一夏も鈴音に並ぶ。……一夏に限り——自身は理由を知らないが——行くときは前もって連絡を入れることが半ば義務付けられているのであった。

和氣藹々と他愛のない会話をしながら一行は進む。
どれくらい歩いた頃だろうか。

「なあ、一夏？」

「いいかい、鈴？」

おもむろに総一と桃雫が口を開いた。

「何だ、総一？」

「何よ、桃？」

それに対する一夏と鈴音の返答である。……まるで答えになっていない。加えて、その声音はどこか疲れているように感じる。

「あまりこの辺りは詳しくないんだが——」
「—————なにか名物や名店でもあるのかな？」

口々に問い掛ける。

その気持ちも分からなくはない。

なにせ行列が出来ているのだ。

世間の多くが休日であろう事を考えれば、人が多いのは理解できる。……しかし、行列となるとサッパリ理由が分からない。

しかも、不思議なことにその行列は基本的に同性で固まっているのである。挙げ句に中高生と見受けられる若年層がやたらと多い。

例外など、それこそ『子供と連れだったお父さんお母さん』くらいなものである。

だからこそ――――

「いや、分からん」

「あたしもちょっとわかんない。仕事の一環で日本に来ることはあったけど、ここいら辺には足を伸ばせなかったし……」

――――一夏にしろ鈴音にしろ、まるで心当たりがなかった。……いや、この道筋を考えれば、心当たりがないわけではない。

だが、よく知っている店だからこそ、逆にそうは思えないのである。

目的地へと向かって、時に直進し、時に曲がる。……行列もまた、同じように続いている。

「押さないでください！　押さないでください！　見ての通り、大変混雑しております！　当店で食事を求められる方は、今しばらくお待ちくださいませ！」

そして、着いた。

目的地である『五反田食堂』の前では、一夏と鈴音の親友兼悪友にして、その家の息子である五反田弾が声を張り上げていた。

「なあ、弾？　一体どうしたんだ？」

「そうよ。何だってまたこんなに混んでるわけ？」

一夏と鈴音が問い掛ける。

「あ、申し訳ありません、お客様。当店で食事をご希望でしたら、列の最後尾にお並びください」

しかし、弾の返答はつれないものである。

「聞けよ！」

「聞きなさいよ！」

思わず、一夏と鈴音は吼える。……親友にこんな態度を取られては、それも仕方ないだろう。

「申し訳ありませんが、どこかでお会いしたことがありましたでしょうか？」

しかし、やはり弾の言葉はつれない。

一体何があった！？ と見るからに肩を落とす二人の袖口を掴み

「ウィッグに眼鏡」

——と総一が声を掛ける。

その言葉を聞き、ようやく二人は自覚した。

髪色、髪型、付け毛に眼鏡等々、ちょっとした小細工で意外と気付かれないものである。

鈴音の場合、普段から私用で出掛ける際には——代表候補生になってからではあるが——簡単な変装を怠ったことはない。

故に、変装をしていることは覚えていた。
しかし。……しかし、である。

「この程度で分からなくなるなんて、アンタほんとに親友なのーっ
！？ それともアレか！ アンタはあたしをツインテールで認識し
ているのか!？」

眼鏡を外した鈴音は、勢いよく弾に飛びかかった。そして胸ぐら
を掴んで揺らす。……体型的に、鈴音自身も振り子のように宙で揺
れている。

「落ち着けよ、鈴。……これでどうだ、弾？」

自身もまたカツラと眼鏡を外した一夏は、鈴音を宥めながら弾へ
と声を掛けた。

「げえっほ、えほ、えほ……！ 何だ、一夏と鈴かよ？ けったい
な格好をしているから、サッパリ分からなかったぜ。まあ、いいや。
席は用意してあるから入れよ。ついでに手伝ってってくれ。御覧の
通りなんぞな……」

胸を押さえて呼吸を整えたあと、弾はそう言った。

店員としてその態度はどうかと思う総一であったが——

（こういった大衆向けの食堂の場合、それもまた一つの持ち味……
か。そもそも親友同士らしいしな……）

——思い直す。

また、弾の言葉を受けて改めて現状を思い出したのだろう。……
一夏が勢いよく口を開く。

「そうだよっ!？ 何でこんなに繁盛してるんだよ!？ いや、繁盛してるのは喜ばしいことだから別にいいんだけど、いくら何でも急激すぎんだろ!？ この一ヶ月の間に一体何があったんだよ!？」
「あゝ、理由だけなら色々あんだけど、一番の理由は人目当てだな……。正直、味目当てじゃないのが悔しいところではあるんだが……」

弾がそこまで言ったときである。

扉を開けて、店の中から一人の男が出てきた。

「交代だ、弾。お客さんの整理は俺がやるから、お前も一緒に飯をすませてきな」

男は弾へとそう告げ、親指で店内を指し示す。
年の頃は二十歳を越したあたりか。赤い髪が風に靡いている。自然と取っているその身のこなしから、ただ者ではないことが窺える。首からは『五反田食堂』とロゴが入ったエプロンを提げられており、それが妙に似合っている。

「了解っす、アクセルさん。そんじゃ、すみませんけどお願いします」

「あいよ。久しぶりに会うダチなんだろ？ ゆっくりと過ごしてきな」

どうやら、男の名はアクセルというらしい。

「うっす。そんじゃ、行こうぜ。……っと、そう言えばそっちの二人が例の？」

「ああ。ま、取り敢えずは中に入ってからな？」

弾、一夏、鈴音、桃雫が店内に入っていく。
総一もそれに続こうとしたところで――――

「悪いけど、アンタばかりは素通りさせるわけにいかないんだな、
これが……」

――――アクセルによって遮られた。……ピシャリと扉も閉じられる。

「何故、と伺っても？」

「理由としては懐の中の物だね。記憶喪失だからかねえ……？　どうもそこら辺は敏感なんだわ、これが……」

視線が交差する。

（チッ、まずいな。どうも口八丁でどうにかなる相手ではなさそう
だ）

総一は心中で舌打ちした。

アクセルは口調こそ軽いものの、その身体はいつでも動ける用意が調っている。自然体でそれが可能なあたり、こと格闘戦においては総一以上の実力を有しているだろう。

「許可証を提示しても？」

「ダメだね。一つの目安にはなるだろうけど、俺自身は君を知らないから。ここには世話になってるし、何より、俺が今厄介になっている家の連中も中で働いている。危険を及ぼす可能性がある以上、そう易々と通すわけにはいかないのさ。アンタはかなりデキるらしいから尚更ってmond。基本的に、俺は分の悪い賭けをするつもり

はないんだな、これが……」

その顔には笑みさえ浮かべながら、しかしアクセルの言動は正反對だ。

（懐の小太刀を離さない限り、どうあっても入れてくれそうにないな……）

そう思う総一だったが、そればかりは出来なかった。

何故なら、これはただの小太刀ではない。『戒め』であり『形見』であり『預かり物』なのだ。

そしてそれとは別にして、そもそも離せない理由があった。

何故なら、ここは往來の真ん中なのである。人目が激しいのである。……こんな所で懐から小太刀を取り出そうものなら、目立つことの上ない。

アクセルとのやり取りもあって、ただでさえ人目が向いているのだ。いつ変装がバレるかヒヤヒヤものである。

バレなくても目立つし、バレれば尚のこと目立つ。

付けて加えて、バレた場合は紙面を飾りかねない。『意外な事実！？ あのアイドルは刃物マニア！？』とかなんとかいう見出しで……。

流石の総一も、それは御免被りたかった。

総一が訪れる——かもしれない——未来を思っ
て悲嘆に暮れたときである。

「何をやっているんですか、アクセルさん……！？」

扉を開けて幸運の女神が現れた。

黒い髪を短く切り揃えた、落ち着いた雰囲気
を醸し出す少女である。その眼光は、鋭い刃とな
ってアクセルに向けられていた。

アクセル同様、首元からエプロンを提げているところを見ると、五反田食堂の従業員なのだろう。

「あらま、カティアちゃん。どったの？」

「どったの？　じゃ、ありません。早く彼をお通ししてください。お連れの方も困惑していらっしやいましたし、何より、こんなことをされるとお店の信用に関わります。ここは用心棒を雇っているような場末のバーじゃないんですから……」

「いや、そうは言うけどねえ……」

「目が離せない、と言うんでしたら、ここは私が受け持ちますからアクセルさんも一緒に行ってください。見て、会話して、それだけでも印象は変わるものですよ？」

飄々と食い下がるアクセルに、カティアと呼ばれた少女は諭すように告げる。

それに折れたのだろう。……アクセルは頭を掻きながら、総一へと口を向けた。

「やれやれ……。それじゃあ、ま、行こうか、少年？　こっちとしても、男を見つめる趣味なんてないんだけどねえ……。感性和裏腹、理性がそうはしてくれない。何より、美少女のお言葉とあればそうそう逆らうつもりになれない。我ながら困ったものなんだよね、これが……」

「女性に逆らえない、という点には同意します。……記憶喪失、とのことでしたが、俺としてはあなたの『人となり』に興味が湧きました。言葉を交わすことで、それが少しでも掴めることを期待しますよ」

軽口を交わしながら、二人は店内へと入っていく。

こうして総一は——自身でも気付かぬうちに——『極めて近く、

『限りなく遠い世界』から来た者との一時接触を果たしたのであった。



いや、スタッフと思しき人たちは店内を所狭しと動いている。……しかし、それが慌ただしく感じられない。慌ただしさを感じさせない。

「あれ？ アクセルさん、どうかしたんすか？」

客整理を受け持つ、と言ったアクセルが総一と一緒にやって来たからだろう。……弾が訝しげに口を開いた。

「まあ、色々とあつてねえ……。言い方は悪いけど、監視役、つてところかなあ。危険人物から目を離すわけにはいかないでしょ？」

「うん？　この少年。懷に刃物を隠してるんだよ？　それもカッターとかハサミとか、所謂『日常の道具』として捉えられるものじゃない。まず間違ひなく『凶器』として捉えられるものだ。……そして、それを大部分の者には氣付かせることもない。それはつまり、日常的に扱ってる、ってことを表している。……ほら？　立派に危険人物だろう？」

「記憶喪失のくせにアツサリと気付くあなたはどうか、と俺は
 思いますけどね？」

溜息を吐きつつ、総一は言った。……それは婉曲的な肯定である。

一夏も桃雫も総一が常に小太刀を持ち歩いていることは知っているのだ。また、先程までと違って、今現在ここにいるのは一つのグループだ。鈴音然り弾然り、むやみやたらとこの事実を広げるような真似はしないだろうことが、一夏と桃雫を見ていれば分かる。アクセルに関してもそこは同じだろう。

ならば、この期に及んで隠す必要もない。――総一はそう判断したのである。

「違うない」

一方、総一の言葉を受けたアクセルはそう言って笑った。

気付いたときには見知らぬ部屋にいた。……いや、それだけじゃない。自分の経歴や世界の歴史といった、およそ『過去』と呼べるものの大半を覚えていなかった。例外はそれこそ『アクセル・アルマー』という自分の名前くらいである。

普通なら不安になるだろう状況も割とすんなり受け入れることが出来た。

身体が勝手に動くことだってしばしばある。……そして、こと『危険』といえるモノについてはそれが顕著だ。

理性で感情を抑え込める精神といい、並外れた身体能力といい、おおよそ『凡庸』という言葉からはかけ離れている。

そんな人物を前にすれば、まず間違いなく自分でも怪しいと思うだろう。

しかし、そんな相手（かたがへ）を、彼ら彼女らは黙って受け入れてくれたのである。

（ああ、そういうことか……）

カティアの言葉の意味を、アクセルはようやく理解した。

要は『確率』と『可能性』と『嗜好性』の問題だ。

受け入れた上で安全を手にする、受け入れて騙される、疑って安全を手にする、疑うことで危険を招き寄せる。……大雑把なこの四択——いや、一番と二番がセットで、三番と四番がセットであることを鑑みると、実質は二択でしかない——の中から、どれを選ぶか、ということである。

そして、カティアや弾たちはアクセル・アルマーじやうまーに対して前者を選択した。

他方、自分は総一に対して——無意識の内に——後者を選択していた。

早い話がそういうことだ。

しかし、それはよくない。

自分はいい年齢をした大人である。……記憶喪失だから定かじゃないが。

ならば、選択には責任を持たねばならない。

お客さん四人の内、二人と弾は親しいようである。そして、その二人と残りの二人も親しいようである。

弾と直接の関係こそないようだが、言ってみれば、間接的な関係は持っている、ということである。

それを踏まえた上で考えると、先程までの自分の態度は、間接的に恩を仇で返している、ということに他ならない。

時と場合にもよるだろうが、基本的に、恩には恩で、信には信で返すものだ。……少なくとも、その方が気分はいい。

だったら、自分もそうしてみるべきだろう。——思い至ったアクセルは口を開く。

「ま、取り敢えずは謝っておくよ、少年。不愉快な思いをさせて悪かったね。……俺としても、まずは君の『人となり』ってヤツを確かめさせてもらうことにするさ。そっちの一夏くんとやらの君に対する態度を見れば、そうそう分の悪い賭けでもなさそうだしね、これが……」

総一が席について一息吐いたときである。

「どうぞ、お水です」

言葉と共に、コトリ、と音を立ててテーブルにグラスが置かれた。少年である。やや紫がかった赤い髪が特徴か。年の頃は、総一たちと変わらないように見受けられる。……やはり、店名の入ったエプロンを着けている。

「すみません。なんかアクセルさんが迷惑を掛けちゃったみたいで……」

少年はそう言って頭を下げた。

「いえ、別にそれほど気にしてはいません。……ああ、挨拶が遅れました。初めまして。自分は大神総一といいます。一夏と同じ、I S学園の一年生です」

総一は微笑で返しつつ一夏を指し示す。

ここで働いているのなら一夏とも面識があるだろう。——そう思っていることだった。

「どうも、初めまして。織斑一夏です。今さっき弾から聞いたんだけど、紫雲統夜くん……で間違っていない？」

「ええ、合ってますよ。初めまして、紫雲統夜です。俺も一夏くんのことば弾から聞いてました。総一くんも初めまして。君のこともリリィから伺ってますよ」

「リリィから？」

思いも寄らぬ名前が出てきたことで、総一は聞き返した。

「ええ。彼女はちらほらここに来てますよ。先月の半ば頃、弾の妹である蘭——彼女ですね——と友人になったようでして……。ちなみに、あっちのおとなしい感じの娘がメルア——メルア・メルナ・メイア。向こうの澁刺とした感じの娘がテニア——フェステニア・ミューズです。カティア——カティア・グリニャールとはもう会ったんですよね？」

手で指し示しつつ、統夜が説明する。

「カティア、テニア、メルア、アクセルさん。あと、ここにはいませんがもう一人。……血こそ繋がってはいませんが、全員とも俺にとって大切な家族です」

「その気持ち、分かりますよ。リリィを始め、俺にもそういうヤツらがいますから……」

統夜の言葉に総一は同意する。

華撃団のメンバーは、総一にとって『血の繋がらない家族』だ。

「よければ、もっとざっくばらんに話しませんか？　まあ、俺はバイト中なんでそうはいきませんが……」

「俺は構わないぜ。同年代のヤツに敬語を使うのって、どうにも慣れないからな」

「俺も構わない。……改めてよろしく、統夜」
「よろしく、一夏、総一」

握手を交わす。

大神総一、織斑一夏、そして紫雲統夜。

この日、出会うべくして彼らは出会った。

その意味を、当人たちは何一つとして知らぬまま……。

第12話（後書き）

明けましておめでとうございます。

お読み下さりありがとうございます。

スパロボより彼らが登場です。……それに伴い、五反田食堂が大繁盛しております。

総一と一夏も着々と友人関係を築いており、段々と遠慮がなくなってきました。

内容はさておき、今後は更新が遅くなるかもしれません。

仕事は勿論のこと、積みゲー積み本の消化に加え、今月も魔装機神やマジ恋Sが出ますから……。

それでも、一定間隔で投稿するよう心掛けてはおりますが……。

感想、お待ちしております。

第13話

風が吹いている。

蒼天が広がり、陽光が降り注ぐ。

彼方に見えるのは艦だろうか。

どこかで見たことがある景色。

妙な既視感。

（ああ、またこの夢か……）

総一は思った。

ここ最近、いつからか頻繁に見るようになった夢だ。

しかし、今回はいつもと違うところがあった。

「それでは、これにてお別れでございます、姫様」

誰かの声が聞こえたのである。

「本当に征くのですか？」

目の前から、今度は別の声。

しかし、音はすれども姿は見えない。

「ハ……ッ！ 我等はこの地に融け込みます。……次に御身が目覚めたとき、我等の血が遍くこの地に広がっていることでしょう」

再び、最初の声。

「意志は……堅いのですね？」

「申し訳ありません。御身をお護りすることこそが、我等が責務であるというのに……」

今度は、また別の声だ。

やはり、その姿は見えない。

（一体何なんだ……？）

総一は疑問を浮かべる。

景色は見える。風が肌を撫でる感触もあれば、陽光が肌に刺さる感覚もある。

そこはいつもと変わらない、はずだ。

はずだが、今回は——全てではないにせよ——声が聞こえたのだ。ならば、自分が気付いていないだけで、最初は何も見えなかったのかもしれない。何も感じなかったのかもしれない。……その可能性は、否めない。

そして今回の夢において、ヒトの姿だけは杳として確認できない。

（繰り返し、同じ夢を見ているとでもいうのか……？）

自問する。

答えなど分かるわけがない。

それでも、夢は続いていく。

「いいえ。それは寧ろ誇るべきことです。あなた方がその選択をすればこそ……我等の血は絶えずにすみませす」

「……勿体ないお言葉です」

「どうか壮健で。永き刻の果て、あなた方の子孫と見える日が来ることを楽しみにしております」

「御身も、どうか健やかな眠りを……」

そこで、総一の意識は途絶えた。

「……覚えている？」

今見た夢を、確かな夢として覚えているのだ。
大概において、夢など目が覚めれば忘れるモノだ。……にも関わらず、今回はしっかりと覚えている。

次に総一が思案するのは、そんな可能性である。

しかし、現時点において夢の内容に心当たりはない。……ならば、これから先——則ち未来——のことを暗示している、と考えるのは至極妥当なことだろう。

「まったくだ。あー、慣れないことなんてするもんじゃないな……。」

挨拶を交わす。……しかし、双方共に些か覇気がない。

題ないが、精神的に疲れ切っていた。

目を覚ましてはいるものの、その身体は未だベッドの上にある。起き上がればそうでもないのだろうが、起きる気がしないから問題だ。……恐らく、それぞれの部屋では鈴音と桃雫も同じ状態だろう。昨日のダブルデート——と呼んでいいか怪しいモノではある——において五反田食堂へ赴いた際、見るに見かねて接客を手伝ったのが理由である。

五反田食堂と繋がり深い一夏や鈴音はともかく、総一や桃雫までもが手伝ったのには、勿論のこと理由が存在した。

行列の理由として、弾は『人目当て』と言っていた。

勿論、中には『味目当て』の者、弾と蘭からなる『五反田兄妹』を目当てにしている者もいたことだろう。……だが、大半は今年の四月よりバイトとして働くことになったアクセル・アルマー御一行にある。

なにせ、アクセルを始め、統夜、カティア、テナア、メルアのいずれもが——タイプこそ違うものの——所謂『美形』なのである。

これで人の目が向かないはずがない。……しかし、それはあくまで『大半』であって、『全て』ではないのである。

残りは総一や桃雫の同僚に当たる、リリィ・シャトールブリアンを目当てにしているのだ。

先月、ひよんなことから蘭と知り合ったリリィは友誼を結び、その後もちらほらと五反田食堂を訪れていたらしいのだ。

それだけならまだしも、それが噂として口コミで広まった頃、リリィが自身のブログに『面々と一緒に写った写真』を掲載したのである。

つまり、『噂』ではなく『真実』だ、とリリィ自身が証明してしまっただ。

無論、リリィはちゃんと許可を取って載せた。弾と蘭の祖父にして五反田食堂の大将である五反田厳も『客寄せの一助になれば』と許可を出した。……そして、思惑以上に客が集まってしまったので

ある。

両者にとって不幸だったのは『美的感覚が麻痺していた』ところであろう。

なにせ、彼らの周りは美形揃いなのである。

リリイの場合は——自身を含めて——総一、桜華、桃雫、加山と
いった『BLOSSOM』の面々。

厳の場合は、弾と蘭——彼らも充分に『美形』といえる——を始め、織斑姉弟にアクセルご一行。

常日頃からこんな美形と顔を合わせていれば、感覚の一つも麻痺して当然である。

つまり、リリイや厳にとっては、総一や一夏レベルの顔が基準と化していたのだ。

しかし、それは世間一般と異なる環境にあるが故のこと。『五反田食堂に行けば、こんな美男子や美少女とお近づきになれる——かもしれない——』というのが世間一般の受け止め方である。

時間の問題ではあっただろうが、リリイの行動によってこの混雑が一足早く生まれたのは否めない。……全ての責任がリリイにあるわけではないだろうが、一因であることまでは否定できないのだ。

そして、世の中には『連帯責任』という言葉がある。

ただでさえ仲間意識の篤い総一たちだ。それを知ってしまえば、無視することなど出来なかったのである。

だから、手伝ったことには後悔などない。

しかし、総一も一夏も接客業など慣れてはいない。

それ故の、精神的な疲れである。

「あれ？　そういやリーヴァは？」

キヨロキヨロと室内を見回した一夏が零した。

「忘れたのか？　今日は用事があるから出掛ける、と言っていただ

ろうが……」

「あゝ、そういや、そうだった。セシリアも一緒なんだろう？ 一体どこ行ってるんだろ……？」

「さて……な。北大路に縁のある場所か、それとも仕事か。……俺に思いつくのはこの程度だ」

「だよな。……にしても、ダリイ」

言って、再び一夏はベッドへと横になった。

「……言うなよ」

総一もまた、一夏と同じく横になった。



さて、そんなわけでグロッキー状態な総一と一夏であるが、この二人がそんなことを知る由もない。……そう、箒と簪である。

昨日の鈴音たちと同じく、この二人も本日はダブルデートなのである。

先程廊下で出会って以降、肩を並べて総一たちの部屋へと向かっている最中であつた。

見るからに意気揚々としており、普段、学校で取っている態度からは想像も出来ない。……浮かれている、ともいう。

そして、到着。

箒は嬉しさを隠そうともせずチャイムに呼び鈴を押す。

「……………」

しかし、何の反応も返さない。

「ん……?」

疑問に思いつつ、再度、呼び鈴を押す。

「……………」

やはり、何の反応も返さない。

返事も何もないのである。……ここまできると、流石に浮かれ気分ではられない。

「ちょっと、どいて……」

箒の代わりに扉の前に立った簪は、呼び鈴を押すでもなく懷からそれを取り出した。

「弦……?」

箒が呟く。

そう、簪が懷から取り出したのは何の変哲もない弦である。……しかし、ただの弦であろうとも、簪の手にある以上、それは最早万能ツールと同義である。

「そんなモノで何を——ッ!??」

箒の言葉は最後まで続かなかった。

箒が言葉を紡いでいる間にも簪は鍵穴より弦を挿入、瞬く間にロックを解除してしまったのである。……完全な電子制御ではなく、手動制御も組み合わさっていればこそ出来たことである。

しかし、だとしても想像を絶する絶技であることに違いはない。針金やヘアピンでロックを解除するのは小説やドラマで見るこ

があった。……だが、流石に弦というのは見たことがない。
簪が行ったのは、それほどまでに埒外なことなのである。

「何なのだ、今のはっ!？」

「……乙女の嗜み」

思わず詰め寄る簪だったが、簪はまともに取り合わない。

いや、簪自身はまともに答えているつもりである。……家業の一環として身に着けた技能であるし、自身もまだ十代半ばの乙女であるのだから、間違っているわけではない。

しかし、簪にはそれが伝わらなかった、ということである。……まあ、簪でなくとも、この言い回しではふざけているようにしか受け止められないであろうが。

だから、簪は尚も声を荒げて詰め寄った。

「入らないの？」

「入る!」

——詰め寄ろうとした。……目先の簪より、奥にある一夏の方が重要なのだ。

ノシノシと進む二人が目にしたのは、まさしく『ダメ人間』だった。

寝間着のまま着替えもせずベッドに突っ伏している。……当然、寝癖もそのままだ。

これで寝ているのなら、まだ情状酌量の余地はあった。
しかし、総一と一夏の二人はテレビゲームに勤しんでいたのである。

群がる敵兵をバッサバッサと薙ぎ倒していく、所謂『爽快ゲーム』や『無双ゲーム』などと呼ばれるソレだ。黄色いジャケットを羽織った二刀流の青年剣士と、居合を得手とする桜色の着物をきた少女

が、画面の中を所狭しと駆け回っている。時折、『狼虎滅却!』だの『破邪剣征!』だのといった掛け声と共に派手なエフェクトが掛かり、ワラワラという化け物を吹き飛ばす。……見たところ、二刀剣士を選択しているのが総一で居合少女を選択しているのが一夏らしい。

このゲームは箒と簪もよく知っている。『桜花無双!』というタイトルで、現在は第五シリーズまで発売している人気作だ。二作目でプレイキャラクターが増え、三作目で舞台をフランスはパリへと変更。それに伴いプレイキャラクターも主人公を除いて一新。四作目でそれまでに出了たシリーズのキャラクターが全員使えるようになり、五作目で舞台も主人公も完全変更された。

また、箒や簪は知らないことであるが、三作目においてはプレイキャラクターの設定から『黒髪の貴公子』との関連も示唆されている。

シリーズを通して人気自体はかなりのモノであり、アニメ化などもされている。……のだが、五作目の発売以降——番外編はともかくとして——正伝は発売されていない。

いまプレイしているのは、どうも五作目以降に出た番外編のようである。

ちなみに、キャラクターごとのストーリーモードをプレイするとき以外、箒は専ら居合少女か三作目に登場する弓術少女を選択し、簪は只管に主人公一択である。

「……って、違う違う! 見入っている場合ではない! 何をやっているのだ、一夏!」

ついつい見入ってしまった箒であったが、当初の目的を思い出し、勢いよく首を横に振る。……そして吼えた。

「なんつーか、こう、昨日慣れないことをしたからか、起き上がる

氣力が沸かねえ……」

だがしかし、箒の劍幕も何のその。一夏は如何にも氣怠げに返すのみ。その声には覇氣というものが一切感じられなかった。

「右に同じく。……どうにも起き上がる氣力が沸かない」

それは総一も同じである。一夏ほどではないが、それでも普段の覇氣がない。

「一夏、貴様……ッ！」

「そう……わかった。総くんはゆっくり休んで」

それに対する、箒と簪の態度は真逆であった。

箒は更に形相を歪め、簪は聖母の如き笑顔を向ける。

「おい、お前はそれでいいのか!？」

その言葉を聞き、箒は簪へと問い掛ける。……一夏への怒りが冷めやらぬ為であろう、その口調は中々にキツかった。

「構わない。……だって——」

しかし、やはり簪は動じない。落ち着いたものである。

「——私と一緒に寝るから」

だが、次を取った言動は別だ。

ごく自然に言い放ち、ごく自然に総一のベッドへと潜り込んだのである。

いや、そういった言動がごく自然に取れる以上は落ち着いているのだろう。……しかし、冷静に考えるとそれはまずい。

「って、待て待て待て！ お前は一体何をしている！？」

箒は勢いよく捲し立てた。……何の違和感も感じなかったからこそスルーしてしまったが、落ち着いてみると違和感ありである。とてもじゃないが『健全』とは言い難い。

「何って……添い寝」

何かおかしいですか？ と言わんばかりの態度で返してくる簀は、やはり落ち着いたものだ。……こうなると、正しいはずの簀の方が間違っているように感じるのだから不思議である。

（いや、添い寝くらいならいいのか……？）

当の簀自身、思わず考え込んでしまった。

「いや、やはりダメだろうっ！ えーい、それというのも貴様等がだらけておるからだ！ さっさと起きぬか！」

しかし考え込んだだけであり、結局は流されなかった。

簀は怒りを露わに総一と一夏に食いかかる。

そこには微塵の躊躇もない。……最早、問答無用であった。



「これは……凄いな。まさか、ここまで澄んでいるとは……」

何やかやとありながらも出掛けた一行は、現在、篠ノ之神社を訪れていた。……これは箒の意向によるものである。

特に行き先も決まっておらず適当にぶらつくだけだったこともあり、箒以外の面々もすんなりとこれに賛成した。

そして、鳥居を潜ったところで総一は驚嘆の言葉を発したのだ。

昨今、神社仏閣といったところで穢れているところはとことん穢れている。

そう、『汚れ』ではなく『穢れ』だ。

一般大衆から信心が離れて久しいことを鑑みれば、当然といえば当然といえるだろう。

加えて、カタチだけの清掃など効果はあってなきようなものだ。

……きちんと後処理をすまさなければ、よりヒドイ状態になるのが半ば確定しているのである。

その立場柄、総一は退魔の仕事も何度か行ったことがある。

色々とパターンはあったが、その中でも『お祓いしてもらった』という注釈が入る仕事の大半は同じパターンだったのだ。

故に、篠ノ之神社も同じようなものだろう、と総一は思っていたのだ。

しかし、いざ鳥居を潜ってみると、どこまでも澄んでいるのである。そしてそれだけに留まらず、ご丁寧に結界まで張ってあるのだ。……総一は一度として見たことがない張り方だが、過たず効果が発揮されている以上、『結界』と評して間違いないだろう。

「あら、お客さん？ 珍しいわね。見たところ、道場の門下生でもないようだし……。まあ、いいわ。何の御用？」

そんな一行に掛けられる声があった。

声の聞こえた方を見やれば、どこかの民族衣装的な服装をした女性が一人。……街中では浮くことこの上ない格好だが、この場所に限ってはそうでもない。清澄な空気に、その不可思議な服装はとて

もよく映えている。

紫紺の長髪に真紅の瞳。……日本人ではないだろうが、その割に日本語は達者だ。

その口調と格好から活発そうな雰囲気が見て取れる。

自分たちよりも僅かに年上。——総一はそうアタリをつけた。

「私は篠ノ之箒という者ですが……あなたは？　ここの管理者の中にあなたのような人はいなかったと記憶しているのですが？」

口を開いたのは箒である。

政府の指示で各地を転々としなくてはならなくなり、そのために久しく戻ってくることはなかったが、それでもここが彼女の生家であり想い出の場所であることに変わりはない。

そんな場所に見ず知らずの人物が居座っているとあれば——女性の口調から箒はそう思っただのである——怪訝に思ったとしても仕方ないだろう。

その声音にも、どこか陰が感じ取れる。

「篠ノ之……？　もしかしてこの家の人？」

「はい。……もっとも、久しく離れておりましたが」

「なるほどね。私はシャーリィ・ルノイエ。ここの留守番を頼まれた駆——稲葉駆についてきた、考古学者の端くれよ」

「稲葉……稲葉……ああ、思い出しました。確かに、遠縁にそのような家系があります。なるほど、稲葉家に縁のある方でしたか。不躰な質問、お許し下さい」

言って、箒は頭を下げた。

自身が関与してないために知らなかったとはいえ、シャーリィがここにいるのはこちらから願ったが故なのだ。……それを鑑みれば、先の質問はあまりに不躰すぎた。

「いいっていいって、気にしないで」

謝罪を受けたシャーリイは手を振りつつ、かんらと笑った。

しかし、根が真面目な箒としては笑ってすませられる問題ではない。

「しかし、そういうわけには……！」

「実際、連絡の不行き届きつてのはよくあることだし、今回に限っては誰が悪いつてもないしね。……いえ、誰もが悪かった、とそういつておきましようか」

シャーリイの言葉は一面の真実でもある。

それ故に、そうと言われたら箒も食い下がることは出来なかった。

「私がいうことでもないけど、ゆっくりしていつてちょうだい。案内はいらないわよね？」

そう言つて、シャーリイは歩み去る。……歩み去ろうとした。

数歩進んだところで思い出したかのように振り向き、一行へと訊ねた。

「……っと、そういうえば用件を聞いてなかったわね。何かを取りに来たんであれば教えてもらえるかしら？　置き場所も結構いじくっちゃつてるし、物によっては勝手に持って行かれると折角敷いた陣が崩れちゃうから……」

「というと、この結界を張ったのはあなたなのですか！？　見事なものです。もしよろしければご教授願えませんか？　今まで見たこともない張り方なので、非常に興味があります」

箒が答える前に、総一が言葉を返した。

総一も結界を張れないことはないが、ここまで見事なモノは到底出来ない。……霊的支援部隊である『夢組』の者であろうともそこは同じだろう。

場所柄、ということもあるのだろうが、循環効率がとても良いのだ。

また、あるべき『綻び』すらも、『調和』の中に融け込んでいる。これを学び行使できるようになれば、霊障事件の減少に繋がるであらうことは想像に難くない。

そういった思いから、迂闊にも総一は堂々とオカルトめいた発言をしてしまった。

一夏、そして方向性は違えど裏の世界に住んでいる簀は問題ない。……しかし、箒に限っては別だ。彼女は裏のことなど知り得ないはずである。

総一もすぐさまその事には気付いたが、時既に遅し、である。既に発言してしまったのだ。誤魔化したところで余計に怪しまれるだけであらうことは考えるまでもない。

そんな総一の思いとは裏腹、箒は然程気にしてはいなかった。

箒の中で、総一は——良くも悪くも——『得体の知れない人物』なのである。

そんな人物が得体の知れないことを言ったところで、今更気に留めることもない。

記憶以上に空気が澄んでいるので、おおかたその事を言っているのだろう。……そんな風に自己完結していたのである。

「へえ、あなた、これが分かるんだ？　良いわよ。教えてあげて……ただ、あなたが敷衍るかどうかは別問題だから、そこは理解しといてね」

「ええ、それは分かってます。……つと、すまない、箒さん。元は

君の要望でここに來たんだったな」

思わず願ひ出ってしまったが、元々ここに用事があつたのは箒である。……順番でいえば、彼女こそが先に言葉を返すべきであつた。心中の動揺を顔には出さず、白々しい態度で総一は箒へと会話を振つた。

「ああ、いや、謝つてもらはうほどのことでもないから氣にするな。……自分は『緋宵』——ここに伝わる日本刀を取りに來たのですが、分かりますか？」

叔母である雪子がいれば問題なく伝わつたであろうが、シャーリイは見て分かるほどの外国人である。日本刀といったところで伝わるかどうか怪しいものだ。

「アケヨイ？　ゴメン、名前だけじゃちょっと分からないわね。駆……はアテにならないけど、天音なら知つてると思うわ。ただ、今は二人揃つて買い出しに行つてゐるのよ。帰つてきたら聞いてみるから、待つてもらえるかしら？」

「分かりました。……皆もいいだろうか？」

箒は頷いた後、他の面々へと確認を取る。

一夏とて篠ノ之道場は久し振りなのだから、時間が掛かろうとも問題はない。

総一は結界に関してシャーリイから教授してもらうので、時間が掛かるのは寧ろありがたい。

箒は結界に関しては知つたことではないが、総一を美人と二人きりにするわけにもいかないので、時間が掛かろうと掛かるまいと関係なかった。

そんなわけで、一行の答えは揃つて是であつた。



「うーん、これ以上は無理みたいね」

「どうやら、そのようです。……やはり、扱っている『力』の違いなのでしょうか？」

総一はシャーリイの結界を完全に習得することは出来なかった。……そして、それは予め分かっていた——正確には可能性が高いと踏んでいた——ことでもあった。

教授するとはいえ、何もいきなり実践から入るわけにはいかない。なので、両者はまず最初に情報の確認を行った。同じ事柄に対する名称でも、場所が変われば名称も変わることなどザラである。それ以外にも、最低限知っておかなくてはならないことや知らなくても大丈夫なことなどを確認する意味合いもある。

故に、それは当然のことではあったのだが、その段階で両者の知識にはかなりのズレが存在したのだ。

よくよく話を聞いてみると、シャーリイは『地球人ではない』とのことである。

シャーリイの出身世界は『NEO』^{ネオ}といい、そこでは当たり前のように魔法が使われているらしい。では、科学はどうなのか？　というと、これまた普通に使われているそうだ。

どちらに比重が置かれている、というわけではなく、二つが融合して一つの分野と化しており、『魔導科学』だの『魔法科学』だのと呼ばれているとのこと。……名称はどちらも正しくどちらも違う。つまり定まってないようで、暇さえあればどちらの名称に決定するか論争が行われているらしい。

なので、一般的には『魔科学』の略称で呼ばれているのだとか。それはともかく。

そんな異世界人である彼女が何故地球にいるのかというと、『ア

ームドファントマ』と呼ばれる膨大なエネルギーを放出する武具の暴走に巻き込まれたから、らしい。

ームドファントマはそれだけでも膨大なエネルギーを持っているのだが、その真価を発揮するには――武具だけあって――それ専用の機体に組み込む必要がある。

しかしその一方で、真価を発揮しなくて良いのならば充分なエネルギー資源たり得る。……なにせ元が武具だ。真価を発揮してしまえば、その方向性は極端に狭くなる。

また、ームドファントマは何も一つ限りというわけではない。結果、ごく僅かながらエネルギー資源として使用されているアームドファントマも存在する。

今回シャーリィが巻き込まれたのはそんなモノの内の一つだ。……もつとも、膨大なエネルギーを保有しているのは違いないため、その扱いには慎重に慎重を重ねている。

だが、件の暴走はあまりにも突然すぎたために、為す術なくこの世界に飛ばされた。そして稲葉兄弟に出会い、今に至る。

すんなりと納得できるような内容ではなかったが、そこは日頃から怪異に触れている総一のこと。『常識』という言葉では括れないモノがあることなど、これ以上ないほどに分かっている。

また、彼女の言を信じるならば、知識の齟齬についても納得がいく。『魔力』と『法力』、『霊力』と『妖力』……どれも超常の力であるが、その実は似て非なるモノだ。

実際、根本は同じとされている霊力と妖力にしたって、感じる圧力は異なっている。表現の違いだけではなく、妖力からは禍々しさをも感じるのが実状だ。

それを鑑みれば、シャーリィの言を頭ごなしに否定する総一ではない。……寧ろ、彼女の言を信じきった。

そんなわけで、いざ実践に移ったのであるが、結果は言わずもなである。

似てゐるが故に転用することは出来た。……しかし、否なるが故に

同じ結果にはなり得なかった。

「おそらく、としかいえないけどね。……まあ、こっちとしても勉強になったわ。私には霊力を使うことは出来ないようだけど、それが分かった事も含めて礼をいっておくわ。ありがとう」

「それをいうなら、こちらとて同じことです。超常の力に関しては、何でもかんでも霊力や妖力に重ねて考えてましたからね。それを訂正する良い機会となりました。ありがとうございます」

互いに礼をいった二人は、思わず笑った。

地球という世界における一般的な傾向を考えれば、こういったことを真剣に語り合うことなどそうそうできるものではない。他人の目や評価を気にしなければ可能ではあるだろうが、それはデメリツトの大きさをも示している。

あまりにも他者と逸脱した行動を取ってしまったえば、生きていくだけでも一苦勞。……それがこの世界だ。

まともな生き方でなければその限りでもないだろうが、好んでそんな生き方をする者こそ稀である。

そして、総一もシャーリイもそんな稀人ではない。……にも関わらず、二人は堂々とオカルトめいた話を行うことが出来た。

二人が笑ったのは、それが可能となった奇運にして奇縁を思えばこそである。

「ふいー、遅くなっちゃった。シャルのヤツ、怒ってるだろうなあ」

「大丈夫だよ、兄さん。シャーリイさんだって理不尽な人じゃないんだから、説明すれば分かってくれるよ」

不意に、そんな会話が聞こえた。その響きはどこかくぐもっている。

今現在ここにいるのは総一とシャーリイ、あとはもの言わず二人へと視線を向けている簪だけだ。……他には誰もおらず、先程の声の主だろう人物の姿はサッパリといていいほど窺えない。

それも当然である。

ただ単に、簪が――総一とシャーリイが一緒にいる時間を少しでも短くするために――張り巡らせた弦を伝って聞こえてきただけなのだから……。

簪は勿論ながら、総一もすぐさま声が聞こえた絡繰を理解した。

シャーリイだけは驚きの表情を浮かべているが、前もって『誰かが来たら分かるようにする』と言っておいただけあって、すぐに納得の表情に変化した。

そんな面々を余所に、弦は尚も会話を届ける。

「わっかんねーぞー。なんたって相手はあのドーナツ女だ。散々待たせて十個しか買ってこないとなれば、怒り狂ったっておかしくねえ」

「兄さん……。そんなことを言ってるからシャーリイさんだって怒るんだよ？ 聞いてたらどうするのさ？ まったく……。二人はお似合いなんだから仲良くしてよね。僕、シャーリイさんが本当のお姉さんになる日を楽しみにしてるんだから……」

会話を聞き、怒りの表情を浮かべたかと思えば、一転させるシャーリイである。……兄の台詞に怒ってはいるものの、弟の台詞で照れるあたり、どうやら兄のことを憎からず思っているようだ。

見ていて面白くもあったが、このままこうしているわけにもいかない。

「さて、どうやら帰ってきたようですね。出迎えに行くとしましようか？」

「フ、フフ……。ええ、そうね……。覚悟しなさいよ、かああけえ

「えるうう……っ！」



少年が箒へと鞘に納められた刀を渡す。

年齢は十歳で、その顔立ちもどちらかといえば女性的。言葉遣いも丁寧なもの。……それが稲葉天音という人物だった。

「おう、いってゝ！ シャル、お前なあゝ、もう少し優しくしてくれたってバチは当たらないと思うぞ？」

口言った罰だと思いなさい！」

——紅葉形に赤くなつた頬を抑えて、シャーリイへと文句を言っていた。……そして、言い返されて言葉を失っていた。

また、その年齢は17歳と総一たちよりも年上なのであるが、やはりそうは見えなかった。……ちなみに、シャーリイは19歳とのことである。

「夫婦喧嘩は犬も食わない……か。それとも、人の恋路を邪魔するヤツは馬に蹴られて何とやら、の方かな……？　なんにせよ、あまり長居するのはよくないな」

その光景を見て、総一が呟く。

「ああ、そうだな。……うん。これは正真正銘『緋宵』だ。間違いない」

「なら、用件はすんだってことか……。じゃあ、帰るとするか」

「お邪魔しました」

「お兄さんとシャーリイさんによろしく言っておいて下さい」

「すみません、ろくなお持て成しも出来ませんで……。兄さんとシャーリイさんには伝えておきますので……」

簡単な挨拶を交わし、その場を後にする一行を天音が見送る。

如何に年齢にそぐわぬ落ち着きを持っているとはいえ、天音が十歳であることに違いはない。またもに自己紹介もしてない以上、無理に引き留めるわけにもいかなかった。

「やれやれ……。仲が良いのは素晴らしいことだと思うけど、もう少し、こう、TPOってものを弁えて欲しいと思うのは我が儘なのかな……？」

振り向いたその視界の先に未だ喧々囂々とやり合っている駆とシャーリイの姿を認めた天音は、疲れたように零すのであった。

第13話（後書き）

何とか投稿。

今回はスパロボNEOより駆、天音、シャーリィの3人を登場させました。

それと同時に緋宵も早期獲得です。

セガとコーエーが組んでサクラ大戦が『無双』化する日が来ないものか……などという思いが作中に反映されていたりします。

ストックがなくなってきたので、次話の投稿は本当に未定です。感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4466y/>

I S大戦 ～少年少女よ、大志を抱け～

2012年1月11日03時50分発行